
In The Fantasynovel

kurora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Fantasy novel

【Nコード】

N2503T

【作者名】

kurora

【あらすじ】

主人公はPCを起動し日課になっているネット小説を読もうとしていた。だがURLをクリックした瞬間切り替わったのはディスプレイではなく視界に映る物すべてだった。

なぜ召喚されたのか？誰が召喚したのか？なぞの多い出発の中、主人公は生きるため。世界を知るために仲間とともに冒険を始める。

プロローグ(前書き)

> i 2 9 4 6 6 — 2 8 4 4
<

プロローグ

——勇者とは何か？

それは最も勇気のある誰にも負けない心と力のある者。

何事にも恐れないその勇敢で勇猛な戦士は全ての子供達の憧れだった。

ある時は一人の為に幾多の魔物と戦い、ある時は様々な国の為に人間の支配を企む魔王を倒す。

様々な世界で勇者は人々を守っていた。

——The earth without the end

そしてその世界でも一人の勇者の資格のある男が現れた。

だが男には守るべき人々、倒すべき敵がいなかった。世界は平和だったのだ。

それでも勇者になる為に魔物の被害を防ごうと世界をめぐる。だがそれは無残な結果に終わる。

村人は男を歓迎しなかった。村人達にとって魔物以上に強大で恐怖の対象にしかならなかったのだ。

……勇者という存在が恐れられてしまうのだ。

子供や村を守るために様々な魔物を倒し悪巧みを企む者を粛清した。

だが村人達が与えたのは男に対する薄っぺらな感謝と恐怖の感情だった。

男の力は強大すぎたのだ。村人の大人達が何人も集まってやっと

の思いで倒す事の出来る魔物を剣の一振りです倒してしまうほどの力を持っていたのだ。

村人達にはそれが魔物以上の障害が現れたようにしか見えなかったのだ。

村人の感情を読み取った男は悲しみ苦しんだがそれでも諦めなかった。

様々な国を訪れ沢山の人達を助けようとした。だがどの場所にも勇者の存在は求められていなかった。男の戦う姿は見る者を恐怖に陥れるほどの強さだったのだ。

ついに男は救済する村や国が無くなってしまった。

その時男には感謝される者や共に戦う仲間はい人もいなかった。

男は孤独だった。まだ誰かに感謝されれば救いはあったのかもしれない、だが勇者は誰一人心から感謝の言葉を贈られる事はなかった。

少しずつ勇者の強靱な心は壊れていった。自分は何のためにこの世界に来たのだろう、何故この世界に私を迎え入れたのだろう、勇者は悩み苦しみそして絶望していった。

勇者は世界を守る事を止め、世界を見て回ることを決めた。力を発揮する事はなく、傍観者として世界をただ見続けた。

だが仲間や分かり合える友のいない男は孤独により心を少しずつ削り続ける。

遂に心は勇者としての資格を失い大きな穴が開いた。

その時男は思っていたのだ、この平和すぎる世界が間違っているのだと。

世界に新しい風を吹き込もう、世界を作りかえるのも私の使命だと。

心の壊れた男は準備を始める。新しい世界を上げるために。

——そして世界は色を少しだけ変えながらゆっくりと物語は動き出していくのだった。

00話 日常

大学の講義が終わり、レポートを提出しに行く。いつも直ぐに大学を出るのだが今日は少し遅かった。

もうすぐ夏休みになる時期だ。楽しそうに予定を話し合っている声が聞こえる。俺はこんな熱い中で良く喋っていられるなあと思うながら大学を出る。

俺がこれから向かうのはドーナツ店だ。大学からは近くない、わざわざ電車に乗って何駅か通過しなければいけないのだ。特に珍しいドーナツがある訳ではない、チェーン展開された普通のドーナツ店だ。

「黒野今日は遅いわね」

奥の席から俺の名前を呼ぶ声が聞こえる、その声の主は今では珍しい三つ編みで、丸いメガネの地味な女性だ。

「……なんか変な事を思ってない？」

「気のせいだ。君の様な文学少女に、変な事なんて思う訳ないさ」
「うーん、なんか釈然としないけどまあ良いわ」

俺の心を読むような発言をした女性がこちらを見る。この女性は宮本あかり、先ほどの会話通りの文学少女だ。

俺はドーナツ店なのにコーヒーしか頼まない。その為喫茶店の方が良いんじゃないか？と交渉しているがことごとく却下されている。あかりは交渉を却下し続ける張本人でもあるのだ。

あかりは約2年間欠かさず一週間に一回ドーナツを訪れて、その度にドーナツを3個も食べていて「ダイエットしないとやばいわ」と馬鹿な事を言っている。俺と同じ大学の3年生で同じ年齢だ。

「それで今日は何で遅れたの？」

「今日中にレポートを提出しておきたくてね」

「……なんでもう提出しているの？ 写させてくれる約束は？」

あかりは首を傾けて何故？と真剣に不思議がっている。だが俺はそんな約束をした記憶は無いし、するつもりもない。あかりの頭の中では良い様に記憶の改変が施されていたようだ。

「約束はしていない。レポートを写すと俺まで評価が下がるだろ。自滅行為じゃないか」

「そんなあ私に単位を落とさせて言うの？」

「自分でやればいいだけだろ」

「待ってよ、私に物語以外の文章を書けって言うの？ 鬼、悪魔」
「たかがレポート作成がどれだけ苦痛なんだよ……」

くだらない会話をしていると、身長2m近くもある大きい男が入店する。その男は肉まんを何個も買ってこちらに向かって来る。

「たー君はいつ見ても大きいわね、入って来て直ぐにたー君ってわかるわ」

「そうだな、俺はいつも大きいぞ、毎日トレーニングを欠かさないからな」

「トレーニングを欠かさないとそんなに大きくなるのね」

「待て、その理論は可笑しいぞ。全ての体育会系の人間は2m近くになる」

「それは怖えなあ、俺の大学の奴ら皆2m超えるやつばかりになるな」

男は軽快に笑いながら俺の隣に座る。こいつはたー君こと田中

忠則。

同じ高校だった体育学科のある大学に行った元同級生だ。

柔道や剣道、ボクシングなんかを手当たり次第に手を付けては中途半端に強くなって飽きてしまう、もったいない奴だ。

本人曰く、どれも県大会優勝レベルまでは成長出来るが、コーチや先生に認められて期待されるとやる気をなくしてしまうらしい。

それでもまだ強くなりたいらしく、今ではテコンドーと少林寺を経て空手に至っている。

俺は一度なぜそんなに強くなりたいのか聞いてみた時があった。

「だってよ、いつ異世界に飛ばされて勇者として駆り出されるかわからんだろ？」

当たり前だろ？と同然の様に言いやがる正真正銘の中二病の馬鹿。だけどこんな性格の奴が漫画やゲームのファンタジーの主人公になるんだろ？な、と思う俺もまだ中二病を完治していないと苦笑いをした事を覚えている。

「そういえば今日は仲良しな兄妹は来ないのか？」

肉まんをくわえた忠則はモゴモゴと口を動かしながら俺とあかりを見る。

「そういえばメールが来てたわ、今日は仲良く家族で出かける見たいよ」

「兄妹だけじゃなく家族とも仲が良いんだな、流石だぜ」

「……さつきから当然の様に仲が良いとか言ってるが、あれは仲が良いのか？」

仲良しと話題に上がっていた兄妹の名は、佐藤 咲子と佐藤 直

人。

咲子は高校2年生の女子高生で直人は大学1年で皆と違う大学。
このドーナツ店で行われるサークルのメンバーで、いつも口喧嘩
の絶えない仲の良い？兄弟だ。

「さて今日は久しぶりに3人だけど集まった事だし始めましょうか」

あかりの声で始まる俺たちのサークル活動。

だが、まず俺達のサークル活動を語るについて話さないといけな
い事がある。

俺達がサークル活動を始めた理由なのでこれだけは外せないのだ。

ネット小説投稿サイトに掲載されている、イロアス先生の小説「
The earth without the end」果てのな
い大地」

この小説は約10年も続いており、そしてその10年間ランキン
グ上位から離れた事の無い長編小説だ。

オンラインゲームの様な完成された世界観や、素人とは思えない
表現力。

イロアス先生は毎回約10,000文字の物語を、週に1日のペ
ースで書き続けている。単純計算で1年52万文字、10年で52
0万文字になる。

20万文字を長編小説1冊と計算しても約26冊。この量だっ
たらたとえ名作だと言われてもさすがに手は出せない。だが、この
小説は1章ごとに完結される主人公達の物語なのだ。

最初はだれも思わなかっただろう。一つの作品が綺麗に完結した
と思ったら、次の週の小説の更新日に全く同じ世界で、別のキャラ

が主人公としてほぼ同じ時系列で別の物語が始まるのだ。

どの物語から読んでも違和感もネタばれもない。その一つ一つが優劣の出来ないような物語。剣士、魔法使い、狩人、商人やメイドの物語でさえ、独立した完全な物語になっている。

そして物語が進むにつれて交差される主人公達や重要な人物の交流も一つの楽しみにもなっているだろう。

なぜ俺がこの「The earth without the

end」果てのない大地」について熱く語っているのかは理由がある、俺達はこの小説のファンクラブみたいなものだ。

あかりがこの小説が好き過ぎて勝手に非公式HPを作成したのだ。そして同士を募ったのが始まりだった。当初は結構人気のHPとして軌道に乗っていた。だがやはり思いつきで作った簡易HPなだけあって、訪問数は日に日に減り掲示板の書き込みも著しく低下していった。

俺とあかり、忠則は一緒に作った一人として週に1度イロアス先生が更新する日は欠かさずチェックしていたし、数少ない常連さんと意見交換を繰り返していた。

だがある日、あかりがまた思いつきの提案でオフ会をやるうと言いだした。すぐさま掲示板で俺達の周辺の同士を募った。俺は来る筈が無いと思っていたが、常連の中に俺達と会いたいと直ぐに連絡が来た。

俺が驚いている間にどんどん話が進み、一度のだけだった筈のオフ会が週一で行われるようになったのだ。そして数ヶ月がたち、オフ会だった筈があかりがサークルと言い張るようになったのだ。

話は戻り、あかりがサークル活動開始宣言と同時に話を始める。

「今回の物語は結構前作の作品と比べて何か違ったよね？」

「そうだね、何かいつもの様に物語に引き込まれる力とか、次話への期待度なんかは常に進化している気がするけど少し違和感があったね」

俺達のサークル活動は、実に簡単なものだ。

前日に更新された「The earth without the end」果てしない大地」の感想、これからどうなるかについて意見交換や激論が繰り広げられる。それが終わると自作小説の状況報告や、今読んでいる小説の感想や評価、感想文創作バトル何かを繰り広げたりする。

「今回は小説家だろ？ 俺はバトル要素があまり無くて物足りなさがあったが、そんな事は無かったと思うけどな」

「忠則、お前は基本的に主人公が戦士じゃないと物足りないと言わないじゃないか。」

忠則は見た目の通り戦いが好きだ。小説も戦い以外あまり深く読まないし基本流し読みなのだ。俺は忠則の言葉を無視して話す。

「俺は小説を書くところを更に小説で表現するところや、全体的に舞台が自身の書齋だったのが違和感の原因の一つとは思うな」

「うーん、本当にそれだけなのかしら？ 何かもう一つある気がするのだけどなあ」

「そうなんか？ 今回も全く変わらんと思ってたんだけどな……」

「もうお前は良いよ」

今回の議題は、今週連載終了した第10章の小説家の物語について

てだ。会話の通り今回は少しだけ良く分からない違和感があった。それは小説家という職業のため、バトルや他国との交流の機会が最も少ない作品になっていた事が主の理由に見えたが、何かそれだけでは納得がいかなかった。

この後も色々議論を交わしたが途中で次の作品の主人公について話に移り変わり結局うやむやのままで終わった。

そして、次の主人公が誰かを次の集会でドーナツをかけて今回のサークル活動は終了した。

——このときの俺達は今日の賭けが全くの無駄になるなんて思っていなかったのだ。

01話 召喚

俺、黒野 迅はとてもファンタジーが好きだ。

小学校のころから指輪物語やダレンシヤンを読んでいた。

難しかったので理解できないところを親に聞きながら読んでいた。そんな俺は中学の頃インターネットでネット小説サイトを発見する。そこには同年代の子供や大人まで色々な人達が物語を作っていた。恋愛、ファンタジー、SF、コメディ、様々な小説に俺は衝撃的だった。

サイト内でも人気があり俺も好きだったジャンルがあった。それは主人公がいきなり異世界に召喚されて勇者になるような物語。今では珍しくなんてない異世界召喚物。

そんな物語の主人公に憧れていたし、俺もそんな冒険がしたいと思っていた。

だが正直こんな話はどうでも良いのだ。俺は何が言いたいのかと言っと、異世界召喚物は光や闇なんかに覆われて草原とかお城とか魔法陣の上なんて所に突如現れるのが良い。

いつものように小説投稿サイトにログインして、更新されたはずの「The earth without the end」果てしない大地」を読むためにカーソルを合わせてクリックをする。本当なら同時にウィンドウズ画面が切り換わるはずだった。

だが今日は違ったのだ。視界に入るもの全てが変わり、座っていた椅子が無くなり尻を強打し、蹲るという状況だ。

訳が分からない。俺は今から更新された小説を読むつもりだったんだぞ？なんだよこれ……。

理解できない状況で混乱している気持ちはどうにか抑えて、自分の尻をさすりながら立ち上がり現状把握に努めようとする。

「おい、何が起きてるんだよ？」

「此処は何処なの？ やっと自宅について帰ってゆつくりしようと思っただのに……」

まず目に付いたのは俺以外にも突然召喚されたと思われる人達がいいた事だ。

何人だろうか…… 50人、いや100人くらいだろうか。

立ったままの姿勢で現状を理解できず、固まってしまう人や、目を擦って何度も見間違えていないか確認する人。更に既に何人かが混乱し、現状を把握しきれないで表情に不安の色が見えていた。

そして、俺と同じ様に椅子から落ちて涙目の人達が多数いた事に、自分だけで無かった安心感と、自分がこの中の一人と思うとなんとも言えない気持ちになっていた。

……… あ、誰かが召喚された。

少し離れた所で、尻もちをつく誰かを発見した。

これは一斉に召喚されている訳じゃ無いようだった、ネット小説の最新話を開いた瞬間、自動的に飛ばされる様になっているのかもしれない。

通常、このような非日常的な状況にさらされたら混乱を起こしたりするものだ。案の定、周囲には数人が動揺を隠しきれず混乱しているような症状が見られていた。そして混乱は混乱を呼びパニックに陥る可能性がある。

では何故俺はその数人と同様に混乱せず、状況把握に勤める事が出来たのだろうか？

それは俺が中学生の頃、このような状況に陥った時にどうすれば良いかとても真剣に考え一人で色々な想像をしていた。そしてその対策を全てノートに書き記し、イメージトレーニングを約2年間も行

っていたのだ。

……いわゆる俺は中二病だった。

その為、俺は冷静でいるわけでは無く、動揺もしていたが対策は出来ていた。過去の黒歴史が蘇り、恥ずかしくて周りの様に混乱できずにいた。

俺は恥ずかしさや動揺を無理矢理隅に追いやって周りの混乱に巻き込まれてしまう前に今の状況を理解する事を最優先事項に置く事にした。

周りの混乱を避けるため、少し離れたところに移動する。

此処は教会だろうか？だが学校の体育館の様な広さで椅子は並べられてはいないし、正面には十字架は無い。キリスト教のカトリック教会やプロテスタント教会のものでは無いだろう。

だが天使の様な羽が生えた女性のガラス絵が飾っており、そこからもれてくる光は教会の様な神聖なものを感じさせている。

そして、服装が変わっていた事に今になって気づいた。

自分はジーパンにTシャツと適当な格好だったはずが、ゆったりした短パンに布巻いたような服を着ていた。

この国民の服装が民族衣装なのだろうか。いつの間には自分に着替えたのだろう。そんな事ばかり考えていると頭が可笑しくなりそうだった。頭を思いつきり振って考える事に専念する。

服装が変わったおかげでジーパンのポケットに入っていたはずの携帯と財布が無くなった事が不安になった。だがこの状況ではただの金属の塊と、紙にしかないと考え諦めた。

そして、いつもの癖で眼鏡の位置を直そうとした時、眼鏡が無い事に気づいた。

多分眼鏡は身につけていた物なので携帯や、財布のように無くなってしまったのだろう。

……待て、可笑しいだろ？視力が戻っている？

いや、戻っていたと言う表現は間違っているかもしれない、見え方があり得ない。

今、俺は教会らしい場所の入り口付近に立っているのに、ここからだいたい50m先にある向かい側のガラス絵に付いている汚れや、傷まで見えているし。

身体能力が日本にいる時より向上しているかもしれないな。

少しの間、どれだけの能力向上が見られるか試して見ようかと考えたが、その前に状況を理解する事を最優先にしていた事を自分に言い聞かした。

「やっぱり、そうだよな・・・」

周囲の情報と自身の状況を整理して一つの仮定を作る。

答えを見つけるまでの時間はほとんどかからなかった心のどこかではもう確信していた。

でも、情報整理という過程を行った事で冷静になるのは正解だった。仮定が正解だったと言う確信が得られた。

——この世界は「The earth without the end」果てしない大地」の小説の世界そのものだ。

俺は異世界に来て最初にやる事は決まった。

まず、教会から出無い事には始まらないのだ。多分ここにいってもパニックを起こした奴に巻き込まれるだけだ。見渡しても誰もここから出ていないみたいだが、異世界の教会があるってことは近くに町があるはずだ。

いきなり魔物に襲われる心配はないしどうせ出るなら早い方がいい。

もしかしたらもう何人かがこの教会を出ているかもしれない。自

分も早く行動を起こした方が良かったらう。

出入り口に近い場所にいたので俺はさっさと出る事にした。
だがそれは見なれない女性に声をかけられることで阻止された。

「黒野君やつと見つけたわ、もしかしたら私だけかと思って心配したわ」

「……あの、どちら様ですか？ なぜ私の名前を知っているのですでしょうか？」

「黒野君もしかしてここに来たショックで一部の記憶が飛んじやったの？」

その女性は如何にも俺の事を知っている口調で話しかけてくる。
女性の姿は綺麗に手入れされた黒髪ロングヘアの優しい目をした綺麗な女性だった。俺は女性の言った通り本当に記憶が飛んでしまったのかもしれない。

俺は不安になってその女性に名前と出身地を聞く、もしかしたらこの世界に飛ばされた瞬間に黒野という同姓の人間と入れ替わってしまったのかもしれないからだ。

「あの、貴女の名前を伺ってもよろしいですか？ 出来れば住所も」「もう本当に大丈夫？ わたしの名前はあかりよ、宮本あかり。住所は貴方と同じ県よ、もしかして自分が何処で育ったのかも覚えてないの？」

……ん？ なんか聞きなれた名前が出てきた。

「あかりはそんなに美しくありません」

やばい意味を理解したとたん即答してしまった。でも仕方ないんだ。俺は眼鏡でも三つ編みでもないあかりは知らない。

だが俺が即答した瞬間に何度か食らった事のある全く痛くないパンチが飛んできた。この痛くないパンチのおかげで、この目の前の女性があかりだという事が証明されてしまった。

「ごめん本当にあかりだったのか、でもなぜそんなに美人なのにあんな地味な格好をしているんだ？」

「何を言っているのよ？ 私はちよつと顔が整っているだけで美人って訳じゃないわ、それに綺麗にしていたって変な虫が寄ってくるだけ。私は本に囲まれて静かに過ごしたいの」

なんてもつたいない奴だ。そして今の発言でどれだけ敵にまわしてしまっただろうか、俺は怖くなりあかりの発言を誰かが聞いていないか周囲をうかがったが、皆自分の事しか考えられない状態だったので良かった。

そして俺は気を取り直しあかりと会話を続ける。

「あかりがいるって事は忠則もいるはずだよな、でもあの大きな奴が直ぐに見つからない筈がない、ここと違う場所で召喚されたのか」

「そうね、たー君なら一番に見つかるはずだわ」

「それにうるさい口喧嘩も聞けないってことは佐藤兄弟もここにはいないな、そうなればもうここに居る必要はないさ、早速この教会を出よう」

そうして、俺とあかりは皆が混乱の中で、思いのほか冷静に事を理解する。そしてこの世界で生き抜くために教会を出る事にした。

「おお！ やつと来たか黒野！」

教会の唯一の出入り口を開き外の光が教会に入ってきた瞬間また大きな影が威勢のいい声と共に現れた。

目の前には立ちはだかる壁……いや、忠則だった。

「なあ色々突っ込みたい事が沢山あるが一つだけ良いか？」

「何でも聞いてくれ俺がお前に教えるなんてめったにないからな、緊張するぜ」

「出てきたのが俺じゃなかったらどうするつもりだったんだ？」

「ん？ 挨拶をするに決まってるだろ、初めて会った人にはまず初めましてだ、基本だぞ」

「……俺の前に誰が出てないだろうな？」

「ああ俺が待っていて、最初に出てきたのはお前だ、良かったな」
「ああ本当に良かったぜ」

勇気を振り絞って、教会から出ようとしたら2メートル近い大きな男が目の前に現れたら、逃げ出すか腰抜かすぞ。

「なあ俺も質問してもいいか？」

「いや、お前の視線を見れば何が聞きたいかわかる。こいつはあかりだ」

「すげえ流石ファンタジーの世界！もしかしてあれか、黒野があかりを湖に落として湖の女神が『貴女が落としたのはどちらのあかりですか？』って質問されて正直に答えたんだろ。だからこんなに……痛って」

「二人とも私だからって失礼にも程があるわ」

あかりが忠則のみぞおちを狙って痛くないパンチをする。

「お！このパンチはあかりだな、でもなんでこんなに美人になったんだ？」

「もついいでしょ、どんな容姿だって私は私だわ」

入口でいきなりくだらない会話をする事になった俺とあかり、忠則は一緒に教会を後にしたのだった。

「The earth without the end」果てしない大地」の小説の世界は、日本と違い全く発展していない町並だ。

雰囲気は中世初期のヨーロッパの様なものだろう、この国は俺の知っている小説の中の世界でも大きく発展している国に入るだろう。車や電車などの燃料エネルギーを使用した交通機関は一切ない。自分の足か、馬の代わりとなる生き物が主な移動手段だ。そのため俺達3人は教会から活気のある街までただひたすら歩く。

だがただひたすら歩くだけでは何も進まない、俺は時間を有効に使うためにこれからの事を相談するために、2人に話しかける。

「ここ小説の世界だよな、一体どういう事なんだろうな」

「そうね、私はただケータイで小説を読もうとしただけなのに」

「そんな事どうだって良いじゃねえか、異世界に来たんだぜ、早く冒険に行こうぜ」

「忠則、俺とあかりはまだこの世界に来たばかりだ。準備も何もしてないんだよ」

「準備？ 俺だってしてないぞ、俺はこの鍛えぬいた強靱な体さえあればこの世界を駆けまわれるぜ」

そう言つて腕を上げて上腕二頭筋を俺に見せつける忠則。

「……そうか忠則は忠則だったな」

俺は未だに筋肉を見せつけようとする忠則を無視してあかりに視

線を移す。

「そうね、まず分かってるのは、今私の手元にあったはずの小説が無いってことね」

「……………お前らマイペース過ぎだろ、もう少しだけで良いから考えてくれ日本に帰れないどころか、このままだと死んでしまうぞ。」

三人寄れば文殊の知恵という言葉をあっけなく打ち砕かれた俺は、2人に意見を聞くのを諦めて忠則に疑問をぶつける。

「なあ忠則はなんで教会の外に居たんだ？」

「ああ俺は黒野とあかりより30分くらい前にこの世界に来たんだ、更新されたら直ぐにメールでネタばれしてやろうと思ったんだが失敗してしまっただぜ」

「30分前から此処に召喚された人間がいるのか……………、おい、今さらつと酷い事言っただな、それは万死に値するぞ」

「まあ気にするなつて、結局主人公は俺らだったつてオチなんだしよ」

「……………笑えねえよ」

忠則は俺の呆れた顔を見て笑いながら俺らが此処に来る前の話を始めた。

召喚された時忠則は、混乱に巻き込まれる前に数人がこの教会を出る流れに乗ったのだが、俺とあかりが見つからず教会の前で少しの間探していたらしく、結局周りから出遅れた形になってしまったそうだった。その為この教会付近をウロウロしているだけで、まだ俺とあかり同様全くこの国の事を知らないようだった。

「だが、一つ良い事を聞いたぜ、この教会で召喚された物は俺達の地域の人間だけらしいんだ、今のところ此処には佐藤兄弟は来ない

みたいだ」

「そうか、読者は相当な人数がいるから一つの教会に収まるはずがないか……」

俺がまだまだ考える事は多そうだなと思った頃、街の一番の中心街だろうか、様々な人達が忙しそうに働いている場所に着いた。

街は活気にあふれていた。商店街の様な一直線に続く道のりは今の日本にはほとんど無くなってしまった賑わいが何処までも続いていた。

果物や精肉、野菜などの食品や衣服や装飾品の店が他店に競い合うように声を大きく張り上げ通行人に商品を大きさに宣伝している。商店街に入っていると忠則が何度も食品を見つめて歩くスピードが遅くなる、金が無いのに見ても腹が減るだけだろうと思って忠則を呼ぶとそのたびに心配そう見つめてくる店員。俺はそんなに貧相な体に見えるのだろうか……。

忠則が横に立っているからだと自分に言い聞かせ、今さらだがふと思った疑問を忠則にぶつける。

「なあ忠則、今何処に向かっているんだ？」

「何処つてそりゃあ……何処だ？」

忠則は首を斜めに傾ける。じゃあ今どこに向かっているんだよ……。

このままだと3人で歩いていたら餓死するだけだと思った俺はまず情報を集めて出来る事からやっていこうと考え2人に提案する。

「まず一度銀行に行ってみよう」

「なんで？ 私達お金を持っていないわよ」

「お金はどうしようもないさ、だけど銀行でカードを発行するんだ。この世界の住民票の変りとなるカードが国の中に居るなら発行は簡

単にできた筈だ」

この世界の銀行とギルドは商会を通して統一している。その時に必要なのがカードだ。この世界で必須ではないが、他国へ移住する者や商人、冒険者など各国を回る必要のある者や、自身を証明する必要がある者が必ず持っているものだ。

俺達が生きていく方法で現在考えられるのは、店に頼んで住み込みで働くか、ギルドで雑用レベルの仕事をこなし続ける事だろう。

「どうせギルド今から向かったって行列が出来ていて無理だし、明日にでもならないと利用できないだろう。だから今のうちにカード作ってギルドで簡単に登録出来るようにしておくんだ」

「あ！　そういえばそうね、全然思いつかなかったわ」

「それと、ついでにこの町の事とか何処の国かも理解する事が必要だな、もしかしたら俺らの知っている国かもしれないし、知らなくても俺らの知っている国がどこにあるかも聞いておけば行動範囲は広がるはずだ」

「すごいわね、黒野君。初めて尊敬したわ」

「天才だな、俺はだいたい30分も前に召喚されても何もやって無かったぜ」

「初めてか……まあ忠則が馬鹿だからな、俺は冷静に考える事が出来たのかもしれないな」

「俺が馬鹿なのは関係あるのか？　なら俺のおかげでもあるな。褒めても良いぜ」

本当は俺の黒歴史ノートのおかげなのだがそんな事は口が裂けても言えるわけがない、適当に忠則のせいにしておくとしよう。

俺は通行人に銀行の場所を聞き、早速3人で銀行に向かう事にした。

数分後、銀行に着いて3人で登録とカードを発行した。

俺達の他にもギルドではなく銀行で証明書を発行している人達が数人いた。

カードを発行するのに金が無かったため不安だったがやはり必要が無いらしく、本当に便利で助かった、俺が三人分のカードの発行を待っている間『何故私なの?』と、不満を持っていたが何とかあかりにこの国の事を色々聞いてもらった。

やはりこの国でもあかりは美人な部類だった、小説では文字で表現されていても美人の対象が全く同じとは限らなかったがそんな心配もいらなかった。

あかりは適当に銀行で何かを待っている男に話しかけると、その男性は笑顔であかりの質問に答えていた。

それはこれから誰かに何かを聞くときはあかりに頼もうと思った瞬間だった。

この国は俺達の知らない国リーディアという国の東都市らしい。リーディアは東西南北の4つの都市部と中央の大都市があり、俺らの知っている国の中でも相当大きい国の一つの事が分かった。

近くの国は南の方角にラルト国、東にデリル国その他にも中小と様々な国がある事も確認できた。

「ラルトは知らないわね、でもデリルって小説では最東端の国だった筈よ」

「なら最初に向かう国はデリルだな」

「なんでだ? まず新しい新天地に進むのが男だろ。勇者だろ」

「馬鹿、何も下調べなしに死に行くつもりか? まず知っているデリルで今の状況を確認して冒険の準備をする必要があるだろ、それに俺達はこの小説の世界を知っているが、実は何も知らないに等しい。だからまず、デリルに行って様々な国の情勢を出来るだけ把握しておきたい」

「そうね、当面の目標はデリルで決定ね」

「残念だが準備は必要だよな、金がないと飯は食えねえもんな」

お腹を鳴らしながら納得する忠則。

銀行を出るともう日は沈みかけていた。早い処は既に店を閉めて
いる。この席には街灯という物がないのか、日が沈むと真っ暗にな
りそうだった。

「お金が無いと何もできないわね」

「ああ俺なんか晩飯食ってないから、もう餓死できるぞ」

「晩飯食わないだけで餓死するか馬鹿」

「お前らは大丈夫なのかよ」

「私は1日位食べなくても平気よ」

「俺はもう食ったな」

「畜生、俺も飯食ってから召喚されれば良かったぜ」

「ネタばれしてやろうつて考えがいけなかったんだな、その報いだ」

だが本当に困った。金が無いと飯も食えないし宿も泊まれないだ
ろ。

「でもこのままだと野宿になってしまっわね……直ぐにお金を手に
入れる方法が無いしご飯とベッドは諦めて今日は教会に戻ってどう
にかするしかないわね」

「いや、マズイだろ……」

「そうだな、俺らはまだ大丈夫だがあかりは女性だ」

「貴方達私が眼鏡と三つ編み無くなったら態度がガラッと変わるわ
ね、覚えてる？私貴方達と一緒に図書館で寝たわよ？」

「そうか……あかりだったぜ」

「ああそっぴいあかりだったよ」

「納得したなら良いわ、でも何かム力つく」

あかりは両手を使って俺と忠則に痛くないパンチを食らわせて3

人は街が暗闇に染まる前に教会へ向かった。

02話 仕事

街の賑わいから離れて、30分以上歩いたところに教会はある。俺達は日が沈む前に何とか走って教会にたどり着いた、走っていなかったら途中で暗闇に取り残され、不安な夜を過ごすことになった事だろう。

教会は月明りが窓から漏れ出して少し幻想的な雰囲気が教会内にあった。

教会には俺達のように宿に泊まることの出来なかった先客がいた。数は100人強くらいだろう、壁に寄り添っている人やすでに疲れて寝ている人、数人で会話している人達。

年齢はほとんど10代から20代で数人だが30代以上の人もいるようだ。

「早く寝ようぜ、これ以上起きていても腹が減り続けるだけだぜ、昼から何も食べてないからそろそろ餓死してしまうぜ」

「いや、あまり考えたくないが俺と忠則、どちらかが起きている必要があるな、誰かが起きていれば安全は保障される、こっちは忠則がいるからな」

俺は周りを見渡し少し警戒した声を出す、それにより俺の意味を読み取ったあかりと忠則は少し雰囲気を変える。

「あ、それって……………」

「…………ああ、そうだよな、俺らと同じ境遇でもこいつ等が仲間ってわけじゃないからな」

「そっか…………ごめんね、私のせいで」

「いや、どうせ俺はあまり寝つきが良くないし、一日起きてる事くらいどうってことないんだ」

「俺はどこでも寝れるぜ？ 良いだろ」

「そうだな、良いなお前は高校の時もいつも授業中寝ていたしな…」

…」

「でも、黒野はここでずっと一人で起きているの？」

「ああこの世界の事を出来るだけ知っておきたい教会に者の中にギルドの中の情報、ギルド以外の便利な場所の情報が手に入るかもしれないし、こちらには銀行でのカード発行の情報があるから情報の交換が出来るから有利だしな」

そう言つて俺は銀行で発行したカードを見せる。

「忠則とあかりは寝づらいかも知れないが、先に寝ていてくれ、今回だけは俺があまり離れない位置で聞き込みと情報交換に行つてくる、良い情報が手に入るかわからないけどな」

「わかった、でも眠くなつたら俺を起こしてくれていいからな聞き込みはできないかもしれないが、2人に誰も手は出させないぜ」

「そうね、忠則がいると安心だわ」

「ああ、あかりは頼んだぞ」

「おう！ 任せておけ」

2人は人のいない壁付近によつて横になった、忠則はともかくあかりはとても疲れていたようで直に寝息が聞こえた。

「じゃあ、忠則行つてくるから早く寝ろよ、修学旅行じゃないからな」

「なんだよ、ガキ扱いするなつて、言つただろ？ 俺はどこでも寝れるつて」

「高校の修学旅行思いだせよ、お前のせいで俺の睡眠時間は滅茶苦茶だった」

「修学旅行だから仕方が無いだろ」

「忠則お前、今その修学旅行と同じ目の輝きをしているが、気づいてないのか？」

「……まあ出来るだけ早く寝るさ」

絶対寝ろよと忠則に強く言い聞かせ俺は聞き込みを開始する。

数時間たつて日が変わったくらいだろうか、時計が無くて感覚でしかわからないが、俺達がこの教会に戻って来てから一度も誰も召喚されていなかった。

多分、時間の制限か人数に制限があったんだろう、この「The earth without the end」果てしない大地」は人気小説だ、読者を全てこの世界に召喚したら軽く1万を超える。

それほどの人数をこの世界は許容できないだろう、そんなことになったら大量の餓死者や、犯罪者が生まれる事は間違いないかった。そのような状況に陥ったら俺達も生きていける可能性はとても低くなる。

今のところこの教会に居る人数の事を考えると数百人程度、他の場所にも召喚された人物もいると言う事も考えて多くて数千人つてところだろうか。

聞き込みを開始した当初はやはり上手くいかなかった。俺はあかりの様に美しい女性ではないし、対して恰好の良い容姿でもない、何処にでもいる大学生だ。

特に引き付けるような外見の俺は気軽に他の召喚された人達に話しかける事は難しいし、教会に居る者は皆、既に数人のグループが出来ており他者への警戒心が強く俺が近付けるような雰囲気ではなかったのだ。

だがそれを打開してくれたのが一人の男性だった。

「おい、坊主お前さっきから周りを見てソワソワしているがトイレ

も一人で行けんのか？」

その声は寝ているものを配慮しているのか俺にだけ聞こえる様な声で話しかけてきた。

30代後半か40代前半位だろうか、メタボという言葉が全くその男には感じさせられない鍛え抜かれた体形だった。

俺は、その男がただ馬鹿にしている訳ではないと分かってはいたが近付いて男の言葉に対して否定をしておく。

「違いますよ、まあ周りをずっと見渡していたらそう思われても仕方ありませんが、不審者でもなければ怖がりでもありませんよ」

「そうだったか悪かったな、それで坊主はどんな有力な情報を知っているんだ？」

「……俺が何をしたいか分かっているじゃないですか」

「そうやな、でも坊主があんなにソワソワしとるもんでからかいたかったんだわ」

「それは何も言えませんがね、結局1時間以上貴方以外の人に話しかけられませんでしたし」

「まあ仕方ねえ、この雰囲気じゃ誰にも話しかけれねえさ」

「そうですね、ここだと周りに迷惑にもなりますし外に行きますか？」

俺は周りの警戒心むき出しの視線と静かに眠っている人達を見てから、男に出入り口を指差して言う。

男は俺の言葉に頷き静かに音をたてないように一緒に教会の外に出た。

「まずは自己紹介だな、わしは柴田だ、別にフルネームでいう必要無いだろ？」

「はい、俺は黒野って言います、今は教会内で寝ている友達と一緒に

に行動しています」

「ああ近くで寝ていた可愛いお嬢さんとデカイ坊主か」

「はい、それで柴田さんは何時頃ここに召喚されたのですか？」

「わしは多分最初の方だな、毎日暇な俺はこの小説は更新して直ぐに読むことにしてるんだ」

「なら私の情報はあまり柴田さんには必要のない物かもしれませんがね」

この世界の証明書になるカードを柴田に見せて言う。

「なんだそのカード？ ギルドにでも必要な物なのか？」

「はい、このカードはこの世界で自分の証明に必要な物です」

「そうなのか、ギルドは行ってないからな、ギルドを発見したときには既に列が出来ていたからな、並ぶのはわしは好かんのだ」

「なら、ちょうど良いです、明日も多分ギルドは並ぶ事になるかもしれないので、先にこれを作っておく事をお勧めしますよ」

俺はカードの利用方法と説明それに銀行で発行できる事を一緒に説明する。

「そうか、これがあれば便利になるわけだな」

「はい、明日にでも銀行で作った方が良いでしょう」

「では、わしからも有力な情報を教えてやろう、当分この教会は安全だ、多分1週間程度なら何の心配もいらないな」

「それは本当ですか！？」

「ああ、これは本当だ」

実は召喚される人数対して村人の反応が薄いのがとても気になっていたのだ。

たとえばここは大国の都市だとしてもいきなり数百人も身元不明

者が表れてギルドや酒場、宿屋に集まったのだ、普通この状況は国が動いてもおかしくない現状のはずだ。

特に都市部でこの人数になると一番大きな中央都市でもこの様な現象が起こらないとは限らない。

本当はこの教会で寝泊まりするのは危険なのだ。

柴田は、まずこの世界は小説の何処の時間軸に当てはまるのかを調べたらしい。

そのため、一番に教会を出た柴田は、ギルドや宿屋を素通りし、武器屋と防具屋、さらに酒場を中心に村人に聞き込みを始めたらしい。

柴田は武器屋と防具屋で戦争が終息したばかりで売れ行きが下がった事を聞いた。

そのため、戦場で亡くなった人たちが多く、住民が減少して難民や孤児がいてもおかしくないというのが剛志の予想であり納得のいくものだ。

「だが、多分それだけではないだろうな、これも憶測でしかないが、そもそもこの世界に俺達が一斉に召喚された事はこの世界には認識されていないのではないだろうか」

「認識されていないとは、そもそも俺達は異世界人でなく、この世界の住人で最初からここに存在していたと認識されていると言う事ですか？」

「ああ、本当ならこの国にわし達はすでに捕えられてもおかしくは無いぞ」

「そうですね、この町の活気からしてもこの国が正常に機能していないとは考えられないですからね」

「そうだな、それともう一つわかった事があるのだが」

「何ですか？」

「これはただで教えるわけにはいかん、お前の事だからまあ気がつ

くのも時間の問題かも知れんが」

「そうですか、俺は金もこれ以上の情報ありませんからね」

「うむ、まだわしも金が無いからここ付近で数日は過ごす事になるう、何かあつたらここに来るといい、金かそれに見合った情報で出来る事を手伝おう」

「ありがとうございます、では俺はあまりあの二人から目を離してはいけないので教会に戻りますね」

「ああ俺はもう少し外の風に当たってる事にするわ、あそこは視線が痛いからな」

俺は柴田にお礼を言って柴田と別れて教会内に戻った。

今のところ国に拉致される心配は無くなったのが分かったので一つの不安が消えた。

柴田と別れてさらに起きている人に情報交換の会話を求めたが、やはり警戒されてしまつて特に何も得られなかった。

その後、何時かわからないがだいたい3時頃だろうが、何もしないで一人で見張りをするのは想像以上に辛い事が分かった。

限界が来てしまった俺は忠則を起こし、見張りを任せ倒れるように眠った。

「ほら、起きろ、黒野そろそろ行動しないと出遅れるぞ」

「そうよ、今日はギルドに行かないともう教会で泊まるのは嫌だわ」

俺は、2人に起こされて、ギルドに向かう、日の出から見てもまだ6時頃だろう、身体のダルさからしてまだ3時間しか寝ていないだろう、周りの店もまだ準備中だ。

「この村にある大規模ギルドは7時に営業だろ？もう少し寝させて

くれ、無理だ、何も考えられないんだ、このままだと異世界人初の死者が出るぞ」

「死ぬ訳ないわ、24時間営業だからこそ出来るだけ人が少ないうちに登録とクエスト受注しようよ」

「そうだぞ、昨日は何もできなかったんだ、今日こそクエスト受けて冒険の始まりだぜ!!」

「忠則、冒険も何も俺らに出来る依頼なんてアルバイトか雑用だろ……」

「そうね、準備も知識もなしで森に行ったら死ぬわよ」

「そうだ、一番危ないのはそれだ、ここで死ぬと俺らの世界で死ぬかもしれない」

「な……なんだと冒険者になるはずの俺がアルバイトなんて異世界に來た意味がねえ!!」

忠則が頭を押さえて絶望を表現する。

「仕方ないだろ、小説や漫画の様にそう簡単に上手くいくか、はあそれより聞いてくれ昨日手に入れた情報だ」

俺は昨日の夜手に入れた情報を眠くて上手く働かない頭を無理やり動かして説明する。

「そついや、いきなり何百何千も難民が現れたらおかしいよな」

「そういう操作がされているのかしら、そうなると誰が操作したか気になるわね、世界かしら、それとも私たちがこの世界に召喚した人になるのかしら」

「ああ、それはまだ謎だな、元の世界に帰るためには知る必要になる情報の一つだ」

「それよりも、クエスト内容だろ、今聞いた限りだと俺らの出来るものだと日給銅貨80枚くらいって完全にアルバイトじゃないか!」

ちなみにこの世界の通貨は銅貨1枚で様々なところで物価は違いますが日本の100円相当。

銅100枚で銀1枚と同等。

銀100枚で金1枚と同等。

この場合、銅貨80枚は8000円といったところだろうか。

「仕方ないだろ、それより、戦争終結直後のおかげで人員不足で感謝するべきだ、もしかしたらそのアルバイト程度の依頼すら無くて俺達は異世界生活3日で餓死なんて事もあり得たんだからな」

「そうね、仕事があるだけ感謝しないと、まず3人で今日中に銀3枚は必要ね」

「え、12時間以上働けって言うのか・・・」

今度は俺が絶望を表現する。

俺と忠則が不幸を全身で表現しながら昨日と同じ道をたどってギルドに到着。

昨日訪れたときに比べて行列は大幅に減っていたが、まだ登録受付の場所はスタッフが右往左往しながら必死に沢山の証明カードとギルドメンバーカードを必死に俺達と同じ地球から来た人達を相手していた。

やはり終戦直後なのだろうか、昨日500人以上来たはずのギルドの依頼書数は全く減った様子は無かった。

俺達は登録受付と別の場所でクエストを受ける。

ギルドは依頼の内容によって、ランクが振り分けられる。

初級ランクFから始まる。

依頼内容によって報酬は変わるが、F・Eランクの依頼はでも受ける事が可能だ、

そして受けたランクを達成した事によって自身のランクが決まる。

それ以上ランクはC↓B↓A↓G・A（金A）となる。

このギルドランクはランク上昇クエストの依頼を達成するか、一定のランクのクエストを受け続ける事によってランク上昇の権利を得る。

ランク上昇することにより依頼の危険度や報酬が上昇する。

特にG・Aランクの人物はゴールドと言って一桁しか存在しない。

今回の依頼書の内容はほぼ地方の村の復興や人手の足りないところの手伝い。

俺達は出来るだけ高額で自分に見合うような依頼を探す。

「なあ、本当にアルバイトじゃねえか、それも日雇いだぜ？ 地球に居た時と全くやる事が変わらねえよ」

「たー君は文句言わないの、まず必要な金はちゃんと貯めないといけないでしょ」

「そうだな、俺達が冒険に行くにしても、金と装備と知識の準備が無いとこの国から出ても死に行くようなものだ」

「そうだけだよ……」

忠則はこんなの俺の求めてる異世界じゃねえと呟きながら掲示板に沢山張られた依頼書を見つめ、俺とあかりと同じようにアルバイトの様な依頼を探す。

「おお給料が高くて簡単そうなやつ見つけたぜ」

「なにになに？ 木材、レンガ運び……たー君にしか無理じゃないの、これ」

「そうか、あかりは無理でも黒野もいけるだろ？」

「無理だ、忠則お前は俺の体を見て何十kgもある木材を軽々持てるとも言うのか？」

「黒野が木材に埋もれている姿しか想像できないわ」

「それは想像出来るな」

爆笑する忠則、俺だって一応標準以上の体力と筋肉はあるんだ。だが、お前がいるせいで俺は草食系男子にしか見えないだけだ。言いたい事は色々あるがそんな事を話している場合ではないので気持ちを抑えて他の話をあかりに振る。

「それより、あかりは決まったのか？」

「ええ、私にも何とかなりそうなのがあつたわ」

「じゃあ俺もこれでいいや」

「なんだよ、そのボロくさい依頼書は？ 沢山新しい物があるのに変な奴選ぶんだ？ 黒野それはどんな内容なんだ？」

「内緒だ、わざわざ見せなくても良いだろ」

受付で依頼とギルドカード作成と一緒に処理してギルドを出る。

「じゃあ、日が沈む頃にまた此処で集合ね」

「そうだなどうせならギリギリまで働いた方が金を稼げるからな」

「おう、じゃあそれまでは各自頑張ろうな」

そして俺達は集合時間を決め初めての異世界アルバイトを開始する。

02話 仕事（後書き）

ギルドランクを修正いたしました。

それ以上ランクはC ↓ B ↓ A ↓ A A ↓ Sとなる。

←

それ以上ランクはC ↓ B ↓ A ↓ G ・ A（金A）となる。

03話 進展

……………納得がいかねえ、だつてそうだろう？

異世界に現れた主人公は新しい特殊能力や特技を駆使して冒険者として世界を駆け巡り魔物や盗賊を倒し、町や村、国を守り、果てには世界を守る。

そこには、愛があり涙があり、友情があるもんだろう？
なのに、なのに……

「なぜ異世界に来て、こんなアルバイトをしないとイケないんだあ
！……」

「うるせえ！！　なに叫んでんだ！！　口動かしてねえで、さつさと体動かせや馬鹿野郎！！」

「……………すみません」

ちくしょう、ちくしょう……。

今まで我慢してきたけどよう、これじゃあ日本でやってた引越しのアルバイトと変わらねえじゃねえか、俺が求めたものと全然違うじゃねえか。

こんな軽い木材やレンガ運んでは積んで運んでは積んで。

どれだけ持つて往復し続けりゃあいなんだよ、荷台にごろごろ乗りやつて……

ああめんどくせえ、一気に持つて行ってやろうじゃねえか、これくらい。

「どおりやああああ！！！！」

「おいお前、何やってんだあ、そんなの持てるわけが……」

くっそ、黒野は情報や準備が大事だとか言いやつて。

違うだろ？大事なのは勇氣だろ、努力だろ、友情だろ。

異世界だぞ、夢にまで見た世界だ、それも俺の大好きな小説世界。
こんな事やってる場合じゃねえんだよおおおおお！！！！

「おら、これでいいんだろおっさん！」

「おいおい、お前化物か？　これ今日一日かけて運ぶ予定だったんだぞ」

「じゃあ一日分の給料くれ」

「お、おう、まあそうだな……」

「よしおっさん！　他にやる事ないか？　俺は金が必要なんだ、これからやらんといけない事があるからな」

「いや、俺だつてそんなに金なんてもつてねえよ、金が欲しかったらもう一回ギルド行くしかねえな、それと給料はこれ持つて行け依頼達成報告書だ、それギルドに持つていつて金受け取りな」

「そうか、なら仕方ねえお金ありがとな！」

「おう、なんかしらねえが頑張れよ」

「つしゃあ！これで銀3枚なんて俺だけで稼いでやるよ、黒野とあかりをおどろかせてやるぜ。俺は英雄になつてやるんだ！！」

「ぐううううう」

「……だがその前に飯だな。」

ギルドで金を手に入れ、適当に飯屋に入つて一気に3人前の料理を頼む。

「あんた、一人でそんなにも食べるんかい」

「ああ昨日の昼から何も食べてないからな」

十数分後大量の飯が運ばれてきた。

よし、やつと飯が食える……ん？

…………… なんか向かい側で俺の飯を食おうとしている男がいる。

「あんた誰だ？」

「ん？ 私か？」

「そうだよ、なんで俺の向かいに座っているんだ？ それもなぜ食おうとしている」

「まあいいじゃないかそんな事、それより早く飯を食おう、飯は出来た手が一番だ」

「これは俺の飯だ」

「私が手伝ってやるよ」

「手伝いをしたいなら厨房で皿洗いでもしてこい」

俺にとって食事は聖職者の祈りに近い、それだけ神聖な行為だ。それを邪魔するものは許さん、向かい側の謎の男を睨みつける。

「悪かったよ、そんな怖い目で睨みつけてないでくれ俺は喧嘩しに来たわけじゃないんだ。こんな量食べきれないと思っただけさ、駄目なら大人しくしているよ」

男はフォークとスプーンを机に置いて手を上げてもう何もしない事をアピールする。

「じゃあ飯を食いながらで良いんだ。私が一人で喋るから聞いてくれるだけで良い。質問をするから肯定なら首を縦に、否定なら首を横に振ってくれ、いいかな？」

まあ飯の邪魔さえしなければ俺は全然構わないさ、俺は首を縦にふる。

「ありがとう、じゃあ質問をするよ、先程大きな荷台を持ち上げて数キ口先の場所まで持っていったのは君？」

そんなに大きかったか？と思いながら、俺は首を縦にする。

「やっぱりそうか……じゃあ次の質問、その依頼者のおじさんに聞いたんだけど出来るだけ早急にお金が欲しいんだよね」

俺は首を縦に振りながら何を考えているかわからないこの男の事を少し考えてみたが、俺は黒野じゃないしわかるわけが無いな、そんなことより飯だ。

「君は何か格闘技を習っているんじゃないか？ただ鍛えただけじゃそんな身体にはならないはずだ」

まあ隠す事じゃない首を縦に振る。

「じゃあ最後の質問だ。君はギルド以外でも金が手に入れば仕事を引き受けてくれるか？」

男は銀貨を数枚を机に置く。

「簡単な依頼内容は、裏通りの奴らを肅清する。不審に思うなら金は前払いでもかい、今の君には受けられないギルドランクDからC相当の依頼内容だ、悪くは無い話だと思うが」

「……その話のつた」

ちょうど飯を食い終わって、名前も知らない男の依頼を請け負う。こいつが何を考えているかわからんが、内容も良いし金がもらえ

るならそれでいいさ。

ついに異世界らしくなってきたじゃねえか、やってやるぜ!!

まあなんて速さで走ってくのかしら、たー君ったら。

多分、黒野の行動があまりにも慎重でずっと気持ちを抑えつけられていたのじゃないかね。

真っ先にギルド行って森に向かおうぜ、とか言っていたし、あれは冗談じゃなかったのね。

でも、たー君を抑えつけていたのは私のせいでもあるのよね、私がいなかったら、あの二人寝ずに夜から動いていたでしょうし、私のために寝ないで守ってくれたし……。

「はあ、このままだと私ただの足手まといじゃない……」

黒野も眠いとかまだ早いとか言っていた割にすぐに居なくなっちゃたし。

責任感が強くて意外と負けず嫌いだからね、黒野も。

「負けてられないわ、今日この世界でお金以外の何かを手に入れないと」

私だけ守られたばかりなんて、絶対嫌だわ。ならまずは速く目的地に着かないとね。

歩いて数十分が経って目的地と思われる場所に到着する。

「まず目的地に到着ね、この中で医療事務のアルバイトって聞いたけどここが病院？」

「そうよ、貴方があかりさん？」

「ひゃあ！」

「何よ、いきなり叫んじゃって貴方じゃないの？ あかりさんって」

「すみません驚いてしまって、はいあかりは私です」

「まあいいわ速く行きましょう、今は一秒でも時間が惜しいの」

「は、はい！」

——戦争は終わっていなかった。

私は、覚悟したつもりだった。

ここは日本じゃないし、そもそも地球ですらない。

ここでは、簡単に人が死んでしまう。

少し前まで殺し合いが長い期間にわたって行われていたと言う事を。

理解していたつもりだった。

でも、違ったそれは知識として知っているだけだった。

覚悟なんて決まっていなかったし、理解すらしていなかった。

「あかりさん！ いつまでも吐いている場合じゃないわよ、水と布、それとこの人はもう駄目だわ、ベッドから退かして2つ隣の身元確認班の所に移動させてちょうだい」

「は、はい！ すみませんでした、今から向かいます！」

ここは戦場だった。

戦場から帰って来た人達の治療室という名の遺体整理場での戦い。何十人も怪我人が運ばれて、その場で生死の判別をしなければならぬ。

「あかりさん、この人はまだ大丈夫よ、治療室に運んで」

「もうベッドが足りません！」

「仕方ないわ、床に布を引いて、そこに寝かせて」
「はい！」

ただ逃げ出したかった、簡単に目の前で人が死ぬ。
常に響き渡る悲鳴や悲痛の叫び、医療班の駆け足の音。

この世界の医療は発達していない、ただ傷を縫合して消毒し、包帯を巻くだけ。

私は、始めてみる赤と黒に染まった肌に消毒をし、包帯の様な布を巻きつける。

怪我人や瀕死者がどんどん運ばれてくる。

他の事など考える事なんて出来なかった、急速に時間が過ぎていく。

「あれは……」

数時間過ぎた頃、数人の聖職者の様な女性達が現れる。

「中央都市から来ました聖歌隊です、怪我人はどちらでしょう」

聖職者の様な女性の一人が声を上げた。

「良かったわ、これで今までの倍以上の人数は助かるわ、こっちに来ていただけませんか」

「はい、かしこまりました、全力で取りかかります」

私の指示をしていた女性が聖歌隊を治療室につれていく。

治療室に入り数人の白魔道士が怪我人を囲むように壁近くに均等に並ぶ

「では、今から範囲系の共鳴歌を合唱します、第二章五十八小節目

から」

「はい!!」

隊長と思われる者の声で他の聖歌隊の者達は返事をした。すると部屋を取り囲むように移動し、チューニングを開始する。

そして隊長と思われる者が手を挙げて指揮を取る。

——その瞬間部屋に響き渡る歌声と共に白く光った。

その歌は全く理解が出来なかった。この歌詞に意味があるのだろうか？今まで聞いた事のない言葉と発音で私は意味を理解する事は出来なかった。でも何故か自然と涙があふれてきた、意味は理解できなかったがこれが何を言おうとしているのか分かった。心に直接訴えてくる。

「さあ聖歌隊の人達も歌い続ける事は出来ないのよ、早く手を動かさない」

依頼者の声で私は何もしていなかった事に気が付いた。早く怪我人を運ばなければ、と思い部屋を見渡した。するとベッドで横になっている怪我人の小さな傷が綺麗に塞がっていくのがわかった。

衝撃的だった。絶望的だった私の世界が歌声で希望に満たされていく。そして、聖歌隊の活躍で今までの数倍の命が助かったのだ。た。

「今日は終わりよ、はい、これが契約書よ、これをギルドに持って言ってお金をもらいなさい」

「すみません、明日もこの仕事をさせて頂けないでしょうか」

「あら、こんな仕事普通一日で居なくなってしまうのに、意外と根性あるのね」

「はい、それと聖歌隊の人に会わせて頂けないでしょうか」

「会っただけなら、私に聞かなくても良いわ、もうそろそろ治療室から出てくる頃でしょう」

その声と同時に治療室から今まで歌い続けていた聖歌隊が出てくる。

「いきなりですみません！ 聖歌隊の皆さま私にその共鳴歌を教えてください頂けないでしょうか！！」

なりふりなんて構ってられない、私も強くならなきゃ。

絶対に今日のように見殺しにさせない、二人を絶対にそんな事はさせない。

は、速え……。

この世界に来てある程度の肉体強化はあったみたいだな、流石に忠則だとしてもあの速さはある得ない、100m6秒くらいに見えるぞ、世界新かよ。

あ、此处は地球じゃないからな、世界新がどのレベルかわからなか……。

ヤバイ、くだらない事言ってる場合じゃないな、俺もちょっと走るか。

どれくらいの自分の能力が上がったのか気になるし。

……………そして十数分後

「はあはあ、能力上昇には個人差があるのか、それとも忠則が化物なのか」

……そこまで上昇した気がしないぞ。

まあ、本当なら此処までたどり着いてなかったと思うし、上昇したんだろうな……多分。

そうだ俺は体力以外の違うものが上昇したんだな、多分そうだな、うん、そうであってくれマジで。

「よし、そんな訳で目的地には着いたわけだが・・・」

目の前には、いかにも怪しげな雰囲気漂う家。

やばい、ミスった、いきなりこれはマズイ。

特にこれからやりに行くのは賭けだ、アルバイトじゃない。すでにもう帰りたくなったが仕方ない、もうどうしようもないかな。

それに帰る家ないし……。

「お邪魔します、ギルドにある依頼を受けやって来た黒野です」

「ああん？ 知らんぞそんなもん、間違えてないか？」

「いや地図ではあっていますよ、依頼書ではここで魔法使いの実験の手伝いとので伺いました」

「……おまえさん、もしかして10年以上前の依頼書じゃねえか、それ」

「はい、その通りです」

「そりゃ、いつまでも依頼破棄しないわしも悪いが、おまえさんも頭大丈夫か？」

そりゃそうだ、誰だって10年以上前の依頼を受けに来ました、

なんて言われたって頭のおかしい奴か冷やかに来た奴だろう。

けどそんな事はどうでもいい、俺がギルドで受けられるランクはE Dの雑用と初級討伐の簡易依頼のみ、その中で一つしかなかったこの、魔法使いという単語。

俺が、これからこの世界で生きてく上で絶対に必要な戦術、今は出来るだけ早く強くならなければいけない。

だからこれは賭けだった。

「すみません、本当はギルドからの依頼なんて口実に過ぎないです、どうでもいいんです」

「……どう言うことだ？」

「私はどうしてもこれから強くないといけません、ですが剣術や体術は俺は無理ですってか嫌です。」

「嫌ってお前さん……」

「ですから雑用でもなんでもします、俺に魔法を教えてください！」

「あんたは魔法使いになって何をするんだ？」

「俺は仲間と冒険に向かいます、その時仲間を守るために使います、綺麗事は言いません、仲間を守るためなら人も殺す事になっても構わないと思っています」

「ほう、殺すか……」

「ですが俺はまだ人も殺したことも戦場に行ったこともない、人が死ぬ恐怖、人を殺す恐怖も知らない無知です、ですが行かなければなりません」

「なぜそんな事を話そうとおもったのじゃ？ 嘘をついたって良かったろう」

「俺のような未熟な人間が綺麗事を並べたところで嘘なんて簡単にはれてしまう、さらに綺麗事だけでは生きていけないです、特にこの世界では」

「ふむ……」

正直この魔法使いと思われる老人には駆け引きなんて出来る気がしないし、最初からそんなつもりはなかった。

「と言っておりますがどうしますか？ お嬢様」

「……………え？」

「お主、ただの使用人に何を言っておるんじゃ？ まあ見ていて楽しかったから良かったが」

あれ？なぜか老人の後ろの方から声が聞こえてくる、だが誰の姿も見えない……

「どうします、使用人を主人と間違えるような奴ですが？」

え？何これ俺、使用人に魔法教えてくれって言っちゃったの？

……………やばい穴があったら入りたい、いや、もう元の世界に戻りたい。

何ですかこの恥ずかしさ、忠則とあかりが見ていたらもう自殺してる。

「そうじゃなあ恥ずかしい奴じゃが、さっきの会話に嘘偽りは無かったからな、合格じゃ」

そして、老人の後ろからピョコッと現れたのは魔女……………いや、魔法少女だった。

「……………えつと魔法使い様ですか？」

「お主、私の事をちっちゃいと思ったのではないか？」

「いや、魔法少女？」

「魔法少女とはなんだ、私は立派な魔女じゃ」

「いやいや流石にこの展開は、無いだろ……」

魔法使いが少女……「The earth without
he end」ってこんな小説だっけ？

「なんじゃお主、私では魔法を使うなんて無理だとも言いたいの
か？」

魔法少女は少し怒った顔をする。全く怖くない、むしろ可愛い……。

いや、待ってくれ一応言っておくが俺はロリコンではない、断じてないからな。

はぁ誰に言っているんだ、俺……。

「いや、こんな展開は相当な魔法使い様でしょう、もうこの巡り合わせは奇跡だ、もしかして、あの魔法使いの国ウェザンドの出身ですか？」

そう、突然現れた魔法少女が弱いわけが無い、そう逆だ最強だろ
う。

この世界に唯一の魔法使いだけが住む国ウェザンド。
魔法少女さんはその国の出身だろう。

「ほう、先日まで異世界に居たのに物知りなのじゃのう」
「はい……え？」

あれ？何て言ったこの魔法少女。

「何て顔をしておる、あんなに大量にこの世界に転移しよって、何をしようとしているか知らんが私の目を欺けると思うなよ、そりゃ

あんな最上級精神操作術式は初めて見たけどのう」

……………どうやらこの賭けは大当たりだったようだ。

夕日の沈む少し前のギルド前

「おう遅かったな、二人とも、何か顔が死んでいるが大丈夫か？」

「そうね、もう限界ただただ早く寝たいわ」

「ああその事なんだが、宿は2人でどうにかしてくれないか？ 俺は住み込みでバイトに行く事になってしまった」

「あらそう、ならよかったわ、本当は私もそのつもりだったの、ちよつと私も明日も同じバイトで立て込みそうだから仕事場近くの宿屋に泊るつもりだったの」

「おいおい……お前ら、金はちゃんと集まるのか？」

「ああそれなら何とかなりそうだ」

「そうね、でも私は後10日間は頑張らないといけないわ」

「そうか、じゃあ俺もその10日間は勝手にやらせてもらっても良いか？」

「ああ俺もなんとか10日間で終わらせてみるよ」

「じゃあまた10日後に」

同時に別れを告げる声を上げる3人。

3人は集合の日に向けて様々な思いを込めて自身の戦場に向かう。

04話 長剣

「来てくれたのか、正直昨日で居なくなってしまうかと思ったよ」

「本当はそのつもりだったさ、だが事情が変わった。後10日間、俺に仕事をくれないか？」

「ああ、まだこの街の治安は良くなって無いからね」

「じゃあよろしく頼む」

俺は昨日依頼を受けた男にもう一度会う事にした。

この仕事は俺の力を測る事が出来るし、そして俺を鍛えてくれる依頼だ。

俺があのだ二人を守ってやらないといけないからな、一人分の強さだけじゃ足りねえ。

自分だけを守るなら今でも可能だが仲間の命を守るとなると話は別だ、2倍強くなるだけじゃ足りねえ、3倍いや4倍以上強くならないといけねえ。

ランクFやEなんかのアルバイトじゃ強くなかなれねえから俺は本当に運が良いぜ。

「では、今日も盗賊まがい奴らや暴力団などの悪さする奴らをこらしめてやろう」

「ああ任せとけ、今日はどこに向かえばいいんだ？」

「今日は商店街からかなり離れた所だ、あそこは危険なんだが君なら大丈夫だろう」

「お！俺を評価してくれるのか、お前良い奴だな、名前を教えてくださいんから変なやつだと思ってたぜ」

「そこら辺は勘弁してくれ、その為の非公式の契約なんだ」

「まあ何も聞きはしないさ、お前の事は気に入ったし俺にはこれ以上ない条件だぜ」

「それは良かった、じゃあこの地図のあたりを見回ししてくれ。危ないと思ったらこの位置まで逃げてくれ、そうすれば私も加勢出来る」

「分かった。まあそれは無駄になるのは目に見えてるけどな」

俺は笑いながら依頼者の男の肩をたたきながら目的地に向かった。まだこの街をあまり知らない俺は帰りに道に迷わないように飲食店の場所と名前で道を確認しながら男についていく。

飲食店と精肉、魚、野菜売り場を見ているうちに朝ごはん食べたばかりの俺の腹は、目的地に着く前に小さく悲鳴を上げ始めていた。さっさと仕上げてさっき見つけた美味しそうな肉料理店に向かう。

「地図の通りならここが目的地だな、始めるか……」

俺はアルバイト当日の夜に武器屋で買った木刀を体になじませる。木刀と言えども武器には変わらない、打ち所が悪ければ相手が死んでしまう場合すらある、細心の注意を払って武器を扱わなければいけない。

武器を使いこなすのは相当の集中力がある。少しでも気が抜ければ相手か自分が大怪我を負ってしまう、それが10年以上様々な武術で学んだことの一つだ。

俺は武器を持たないで拳で戦う方が好きだ。

だが拳で戦うと相手が武器を持った時こちらが圧倒的に不利になってしまうのは目に見えている。多分一対一なら相手が武器を持っていたとしても実力差で何とかできる自信があるが、複数になるとどうしても素手では太刀打ちできなくなる。

俺は試合前と同じ様に準備を始める。

準備といっても何か自分の中にジンクスがあるわけでも何か特別な動作をする訳じゃねえ。

——ただイメージする。

自分が今まで勝ってきたときの感覚を思い出す。

初めての出場した大会や、つい先日の日本での練習試合。

今まで勝った時の事は全てこの体が記憶している。

その時の体の緊張、姿勢、息遣い、足の運び、全て最高の状態を思い出す。

体調は完璧だった、筋肉の疲労も精神の疲労もない体内時計もしっかり機能している。

今回が特別良いわけじゃねえ、これが俺にとってどんな状況下でもこの状態を維持し続ける事が出来るのが本当の強さだ。

数分のイメージトレーニングを終え、意識を完全に切り替えた。

「よし、行くか」

俺は、依頼の男が言っていた通りの道をゆっくり歩いていく。

小さな商店街だった道は少しずつスラム街の様な場所になってきた。

俺自身に向けられる視線が少しずつ痛くなってくる、だが俺に何かをしかけてくる様子は無い。

今の俺はほぼ隙のない状態を保っている。ここで俺を襲う奴は俺の強さをわからない雑魚が俺以上に強い者だけだろう。

「にーちゃん、ちょっと堂々と歩き過ぎなんじゃねえか？」

前者がいきなり現れた。

2人組の男はズボンのポケットに手をつ込んでいる、小型ナイフでも隠してるんだろう。

どんな世界にもこんなくだらない奴は存在するんだなと思いが

ら俺は相手の挑発に答える。

「なんだ？　ここは歩道じゃないのか？」

「いやあ、ここは歩道だぜ。けどにーちゃんは通行料を払ってないだろう？」

「通行料か、それは知らなかったぜ。すまねえがタダで通らせてくれ」

「そりゃねえよ、にーちゃん通りたければしっかり払ってもらわないとなあ」

男に一人が俺の一切怯えない対応に痺れを切らしたのか、俺の思った通りにポケットに隠していた小型ナイフを構えて脅してくる。

「なあ分かってるだろ？　持つてる金全部置いてきやあ良いんだよ」

「まあ、お前らは俺が持っている金が欲しいだけだよ」

「分かっているなら痛い目にあわないうちにさっさと金をわたしな」

「仕方ねえな痛い目に会うのはお前達だ。やるならさっさとかかってきな」

俺は2人組の男に木刀を構えて臨戦態勢に入る。

2人組の男は木刀を見て馬鹿にした笑いを浮かべて俺に攻撃を仕掛けてくる。

木刀なんてタダのおもちやだと思っっているのだろう、切れ味のいいナイフに勝てると思ってないのかもしれない。

こいつらは本当に馬鹿じゃねえか？　リーチが高い木刀の方が有利に決まってるじゃねえか。

「おら、さっさと観念して金を渡せ」

2人の男は困む事も無く俺の前に立ちナイフを振り回している。

こいつらの相手は面倒になってきたな、さつさと片付けるか。

俺は数年前に習った剣道を思い出す、この頃は素手での戦闘練習しかしていなかったが、こいつら二人くらいには効くだろう。

「ちょっと痛いがお前らが悪いんだ、反省しろよ」

「グヘッ」

俺は、ただ思いつきり相手に向けて木刀を振る。そのスピードは自分が思う以上の早さだった。

……俺は此処まで強かったのか？

小さな違和感を感じながら、相手は自分に木刀が降られていることすら気が付かず一瞬で気絶した。

もう一人の男は何が起きたか分かっていない様子だ、すぐさま俺はもう一度剣を振る。

「グハッ」

「弱すぎるぞお前ら……………」

俺は木刀を腰にしまい、泡を吹いて気絶している男2人を担いで依頼者の男の所へ向かう。

俺は集合場所だった商店街の近くにある広場に到着して気絶した男を下す。

「なあ終わったぞ……………何やってんだ？」

「おかえり、意外と速かったな、今日はそいつらだけか？」

「ああ、ちょっと気を張りすぎたせいで警戒されたのかもしれないな。で、これは何だ？」

「これとは何だ、未来を担う子供たちだぞ」

男は広場で子供達と遊んでいた。

「楽しそうだな、子供達もお前も」

「ああ子供は素敵だ、まだ無垢な気持ちで日々を楽しく生きる事の出来る天才だ。この近くにある孤児院の戦争で親が無くなった子供達なんだ」

「……みんな笑顔だな」

「ああ本当に笑顔だ。自分の境遇に負けずに頑張って生きている、私はこの笑顔を守りたいんだ」

「その為の非公式治安維持か……本当にいいやつだなお前」
「ありがとう、直接そうやって言われるとくすぐったいな」

「……なんだこの感じ？俺はこの男の事を知っている？

いや、この世界に俺の知り合いはいないし、子供好きの金持ちなんて俺は知り合いに居ない筈だ。だが何故か違和感を感じる……。

だがその異和感の原因は分からず、俺は子供達と遊んでいる男を見ながら考えていた。

「ねえでつかい兄ちゃんも遊ぼうぜ」

「おう？俺か？」

「うん！これから鬼ごっこやるんだ、お兄ちゃんが鬼ね」

「お！？待てよ、いきなり俺が鬼かよ！このやろっ」

「わー、でつかい兄ちゃんか鬼だぞ！逃げろお！」

こうして結局俺は違和感の原因が解決する事無く日が暮れるまで子供達と遊ぶことになった。

「なあ、今日は襲いかかってきたチンピラ2人を縛って放置して、子供と遊んでただけだぞ？いいのかこんなので」

「ああどうせ、今日はあそこを周るだけだったんだ、周ったら帰ってよかったんだよ」

「マジか……さっさと飯食いに行つてよかったのかよ」

「ああそうだな、でも私がおこつてやつたんだ。悪くは無かっただろ？」

「タダで飯が食えたから良しとするか、じゃあ今日はさっさと宿借りて寝るぜ」

「そうか、また明日よろしくお願いするよ」

「おう、また明日な」

次の日俺は少し早めに起きて今後旅に出る時に自分が合う武器を探す事にした。この国には武器屋が何件もある為、朝早く出ないと時間に間に合わなねえ。

リーディアという国は少し前まで戦争をやっていただけあり、武器屋は10件程度あり武器の種類が豊富だった。西洋の剣から日本刀、ヌンチャクや手裏剣に似た様なものである。

この東都市だけでこれだけの武器屋があるんだ。中央都市はどれくらいの規模の武器屋があるんだ？

気になって仕方がないが、今俺にはそんな時間は無い、出来るだけ自分にあつた武器を探すか。

やっぱり武器は剣だな、勇者が使うのは剣に決まっている。そういえばレイピアはまだ習つてなかったな、まああれは俺には合わないだろう。

俺はまず日本刀に似た鞘に収まつた刀を見ていたが、俺は刀に関して全く知識が無いし、そもそも剣術はあまり得意じゃねえ。

見てわかるのはカッコ良いかカッコ悪いか、持ちやすいか持ちにくいかなだけだ。

特に気に入つた物が見当たらず5件目の武器屋を回つた時、店員に声をかけられた。

「お客さん、なんかお探しかい？」

「ああ剣が欲しいんだ。でもイマイチじっくりくる物が見つからな

くな」

「剣ですかい、さつきからお客さんの見てる物は剣というより刀って代物だがそちの武術を習ってたんかい？」

「ほとんど基礎しかやってないけどな、ただ刀しか触った事が無いんだ。こっちの方が良いかなと思ったんだがどれも合いそうにねえんだ」

「そうだろうな、お客さんの体型にはこしら辺の刀はあわねえよ。刀を扱うやつが基本的にお客さんの様な大きな人が少ないんだ」

「ふむ、だからどれも違和感があったのか、まあ身のこなしの軽い奴の方が刀は扱いやすそうだからな」

店主の言う事を聞いてから良く見ると、自分に合っている刀はここにも前の店にも無い事が分かった。

まあ刀に固執する必要は無いから別の武器を探した方が良いのかもしれんな。

「なあおっさん、俺にあった武器ってどんなもんかわかるか？ 出来れば剣が良いんだが」

「お客さんは結構大きくて頑丈そうな体型してるからな、やはり長剣じゃないかね」

「長剣か、迫力あってよさそうじゃねえか、この中で一番頑丈でデカイ長剣ってどれだ？」

「流石にこの店で一番デカく頑丈な長剣は扱えないと思うぞ？ お客さんみたいな人は沢山いたが、武器として扱えるような奴は今まで見た事ないからな」

「そうか、まあじゃあ一度見せてもらう事は出来ないか？ 一度どんなもんなのかだけ確かめてえ」

「まあお客さんみたいなやつは嫌いじゃないさ、ちょっと待ってな持ってきてやるよ」

そう言つて店主は店の奥に入つて数分後、荷台に乗せた布に包まれた物を運んできた。

「これだよ、まあこれを使うなら片手で持ち上げられる位じゃないと無理だな」

「おお、黒く輝いてカッコイイじゃねえか、こりや思つたより重そうだな」

「こいつを見るだけで諦める奴もいるからな、多分この国で1、2を争う頑丈な武器だな」

「おう、すげえな気に入った。ちよつと触らせてもらうぜ」

俺は布を取つて、大剣を両手で持ち上げた。

「お！ お客さん片手で持ちあげられるんかい。こんなに早く片手で持ち上げる人はお客さんが初めてだ」

「そうか、ありがとう。だがこりやまだ俺には扱える様な代物じゃねえな、でも気に入った！」

「気に入つたつて……お客さんいくらなんでも持つのがやつとな剣じゃ旅の邪魔にしかないぜ」

「大丈夫だ、これくらいなら1週間で慣れるさ、これはいくらだ？」

「いや、これは値段はつけてねえんだ。使いこなせる奴はいないし誰も買わんからな」

そうして店主は少し考えて俺に提案する。

「お前さん時間はあるか？ こいつを使いたかつたら何時でもここに来てくれ、裏庭に練習できる広場がある、この一週間、お前さんにこの大剣を貸してやるよ、それでお客さんがこれを1週間で使いこなせたら安く売つてやる。だが無理なら売る事は出来ねえからな、俺は上手く使えない武器は売らないって決めてるんだ」

「マジかおっさん！　じゃあ仕事前と仕事後に此処に寄らせてもらっていいか？」

「俺は強くなる奴が好きだからな、まあうまく扱えなくても扱える見込みさえあれば売ってやるさ」

「ありがとな、おっさん！　じゃあ仕事が終わったらまた来るぜ！」

こうして俺はこの世界の新しい武器を手に入れる為の修行が始まった。

05話 疑問

「どうだ、今日はこれでいいか？」

俺は昨日の様に木刀を使って不良と盗人を捕まえて、公園で子供達と遊んでいる依頼者の男に引き渡す。

「早いな。急いでいるようだが、なんかやりたい事でも見つけたのか？」

「ああちよつとな、だが仕事はしっかりやるさ、まだやる事があるなら言ってくれ」

「いや、一日に何人か捕まれば周りは警戒する。今日はもう上がっていいさ、行つてきなよ」

「おう！　ありがとう、じゃあまた明日な」

俺は直ぐに武器屋に向かい、店主に許可をもらい裏庭で剣を振る。

「頑張つてるな、これなら本当に使いこなせるかな」

「当り前さ、絶対にこの武器を使いこなせるような男になってやるさ」

「頑張れよ、努力は裏切らねえからな。絶対に自分の力になる」

店主は此処に泊まってもかまわないと一言言つて店内に戻つていった。

俺は剣を見つめる、その黒い剣はそこにあるだけで存在感を発揮していた。

俺にはとても挑戦的な態度を取っているようにしか見えなかった。この剣を作った職人の意志だろうか、それとも長年使用者の現れなかったこの剣自身の意志なのか分からない。だがその何かが俺を奮

立たせた。

「……気合入れるか」

大きく息を吸う、横隔膜を限界まで下げる事を意識し、腹いっぱいになるまで空気を取り入れる。

「っしゃあ!!」

腹いっぱいに入った空気を一気に声とともに吐き出す。

隣接していた林に居た数羽の鳥が一斉に飛び出したのがわかった。声自体は大きくない、流石に人の庭で全力で声を上げられないかな。

空気と声共に様々な雑念を吐きだす。

これは戦闘態勢に入るのとは別の集中方法だ。

練習は周りの事を気にする必要が無い。いきなり何かが襲ってくるかもしれないが、その可能性は低いからな、自分の事に集中していても問題が無い。

俺は目の前の黒い剣と対峙する。練習、訓練、特訓、修行。

どの言葉でも必要なのは繰り返すことだ。身体が動作を無意識に出来るまで止めない。

長剣を両手で頭上より高く持ち上げる。

意識するのは動作の流れと筋肉の使い方、呼吸方法。

最初はゆっくりと剣を振る。身体が何処を使っているのか、どこを意識すればいいのか、身体に教え込む。

呼吸も忘れてはいけない。深く息を吸ってはく、血液に絶えず酸素を与えて身体のコンドイションを整える。

「っはあああああ!!」

一振りに何分も時間をかける、焦ると筋肉が緊張し覚えが悪くなる。

全てにおいて剣に意識を向ける。

剣はやはり重かった。一度剣を振るだけで大粒の汗が全身から噴き出した。

だが、直ぐにもう一度同じ動作に入る。直ぐに休憩すると体が忘れてしまう、身体が限界の警報を鳴らしてからが本番だ。俺は何度もゆっくりと時間をかけて剣を振り続ける。

数十分後、身体が震えてきた。筋肉が限界を告げている、腕が震えて剣がまともに持てなくなっている。

だがここからが勝負だ。自分自身との戦い、筋肉を酷使し、筋肉が崩壊しているのも解る、だが更に痛めつける、科学的な方法じゃないがこれが俺を強くした一つだった。

足が動かなくなるまで走り続ける、腕が上がらなくなるまで剣を振り続ける、そうやって限界を超え続け、短期間で他の誰にも負けない身体と心を手に入れる。

「これで……どうだああ!!」

最後に全身を奮い立たせて剣を最速で振り下ろす。
振り下ろす時の力、更にその振り下ろした力を限界を超えて制御する。

「はあああ、もう腕が上がらねえな……」

完全に腕が使用不可能になってしまった。剣を引きずる事何て出来ないし、何かを握る事すら不可能になっていた。

「お前さん、やっと終わったんか？」

どうしようか考えていると店の方から店主の声が聞こえた。

「おっさん、すまん……腕が上がらねえんだ。剣を片付けてくれねえか」

「いや、そこに置いて構わんよ、お前さんがどれだけ真剣に取り組んでいたかは既に分かった。俺が何回か声をかけても全く気付きやしない、どれだけの集中力だよ」

「ありがとな、そんな正面から言われると恥ずかしいぜ」

「このままだと、本当に一週間で扱えるようになるかもしれない、ちゃんと値段くらい決めておけばよかったな」

「まあ破格な値段でなければ俺は払うぜ」

「男に二言はねえよ、使いこなせるようになりやタダ同然で売ってやるわ!」

「おっさん恰好良いな、男の中の男じゃねえか」

「当り前だ、女が武器作って売れるかよ。今日から一週間泊まっていけ、朝から晩までここ使っていいぞ」

「マジか! ありがとうおっさん、正直これから宿に向かうのが辛くてここで寝ようかとも考えてたんだ。じゃあ泊まらせてもらうぜ」

おっさんは軽快に笑って、俺に布団を用意してくれた。

俺は既に筋肉痛になっている腕を無理やり動かして井戸水で全身の汗を流し次の日の朝を迎えた。

その日から俺は朝起きてからバイトまで、バイト終了から寝るまでただひたすら黒い長剣と一緒に過ごした。

剣は俺を受け入れたのだろうか、3日目の夜、少し軽くなったように感じた。

バイトも、数人の盗賊集団を一人で捕まえたりと成長が著しかった。

俺はこの異世界では地球の時より成長スピードが速かった。更に

基礎体力も向上していたんだ。

今思うと、最初のバイトの資材運びは、いつも以上の力を出していたのかもしれない。

「遂にこの日がやってきたぜ」

アルバイト開始から8日目、剣の修行から一週間が経過した朝。
俺は店主の前で長剣を持ち上げる。

「じゃあ見てってくれ、俺の修業の成果をな」

この一週間、全てにおいて全力を尽くした。何時間も同じ姿勢で剣を持ち続けたり、様々な角度からも反撃を可能にする動きを考える。この剣の最大の利点、リーチの長さを利用した攻撃方法、弱点の攻撃速度の遅さの対応方法、様々な状況を仮定して修行を続けた。そして、遂に今までの成果を見せる時が来たぜ。

「っはあああああ！！」

一気に気合を入れて集中する。今までの修業の成果をもう一度行うだけだ。

何も心配はいらなかった。既にこの剣は自分を受け入れてくれていた。今まで考えてきた剣技を披露する。この一週間で体に染み付いた動きに沿って剣を振る。

——長剣を身体の一部として扱う。

もう、剣の重さは既に身体が把握していた。
剣を振る為の力は腕だけでは無い、全身の筋肉やひねり、足運びや全身の移動。

全てを川の流れの様に無理のない動きをする。
十分程度が経過しただろうか、俺は剣を地面に突き刺し、修行の
成果を店主に見せ切った。

次から次へと溢れだす汗と呼吸を整えるために静かに深呼吸する。

「これが俺の一週間の成果だ！」

俺は汗を脱ぎ取って店主に全てを見せつけた。

店主は俺の姿を見て一度うなずき満足な顔を見せる。

「……正直驚いた、お前さんみたいな人間もいるんだな」

「っしやあ！ ありがとうおっさん！」

「今日はその剣を家に置いていけ、今日中に手入れしておいてやる
よ」

「ありがとう、いくら払えば良い？」

「いくらでも良いさ、今日は気分が良いんだ」

こうして俺はこの世界を冒険するための武器を驚くほどの低価格
で手に入れた。

俺は、自分の物になった長剣の日課になった練習を終えていつも
の様に依頼者の所に向かう。

「よう！ ……どうした？」

俺は何時もの様に声をかけたが、その依頼者の顔はいつもと同じ
ような笑顔では無かった。

それは何かに絶望している様な顔だった。何かを憎んでいる顔だ。
少しの間、俺はその男を見ていると俺に気が付いたのかゆっくり
と近づいてきた。

「……今日は少し用事が出来た。お金は渡すから心配しないでくれ」
「あ、ああ……大丈夫か？ スゴイ顔をしているぞ？」

「大丈夫だよ、だけど今日はちょっと用事が出来た。すまないが今日の仕事は中止だ。金は今日の分も払うから安心してくれ」

男は俺が止めようとした言葉を聞かず早足で走り去っていった。

「どうしたんだ？ あいつ……」

俺は新しい武器を自慢しようと思っていたのにこれでは何かモヤモヤしたままだ。

この仕事以外やる事が無い俺は男の行方を追う事も考えたが、今から向かってても間に合わないだろうな、まあいい一度ギルドに行つて簡単な依頼を受けよう。

俺は大きな剣を担ぎなおし、ギルドに向かう事にした。

目的地のギルドに到着すると一つの大きく依頼書に人が群がっていた。

「……これを見たんだな、あいつ」

それは、あいつが最も嫌う依頼だった。

最新依賴

【兵士募集】

- ・ 依頼内容

我が国リーディアは様々な戦争に勝利を収めた。

そしてまたこれからも勝利を収め続けなければならない。

世界を我が国によって統一するため、さらなる戦果をあげよう。

さあ立ち上がれ国民達、我が国のために戦え。

依頼者 国王レオン・リーディア・リファレイン

・ギルドランク

―指定なし―

・報酬

銀5枚 「戦果により報酬上昇あり」

・依頼人数制限

無し

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

戦争の始まりを告げるこの依頼書は、孤児院の子供達を思うあいつの心を大きく削っただろう。

そして俺は前から思っていた疑問が大きくなり、この国とあいつの存在を考えるようになった。

「……あいつはこの小説の主人公じゃないのか？」

06話 剣士

戦争予告になった依頼書を見た後、直ぐにギルドから出て飯を食って宿を借りた。

俺が何かを考えるのは似合わない、でもこれははつきりさせておかないと気持ちが悪すぎるしねえ。

「だめだ、こんなモヤモヤした気持ちでいると何もできやしねえ」

宿の庭を借りて身体を動かすことにした。長剣が手元にない為、木刀を振っていたが、考え事をしていたらやはり集中が出来ない。気持ち悪い汗が邪魔で上半身裸になり、服で汗を拭う。

「しかし、あいつは主人公なのか？」

俺は、小説を読んでも主人公の名前を簡単に忘れてしまう、だからこの小説の話も昔の主人公の特徴や物語も曖昧で微妙だ。

だが、俺のその曖昧な記憶が正しければあいつはこの世界を舞台にした小説「The earth without the end（果ての無い大地）」の最初の主人公だ。

俺は曖昧な記憶を探り小説の冒頭を思い出す。

——主人公の本当の名は自身が消したはずだ。

それは主人公の旅の始まりだった。

主人公は戦争が盛んな大国の貴族の息子だった。貴族の長男として、幼いころから戦術を学んだ。

この大国は力がとても評価された。平民でも数々の勝利を治めればそれ相応の地位を得られたのだ。主人公の父親も平民上がりの貴族

だった。

主人公はひたすら父に戦術を学び、年齢が一回りも違う戦士達と渡り合う様になるまで成長した。

主人公は父を尊敬していたし、父の戦果を誇りに思っていた。自分も沢山の戦果を得たいと毎日戦術を学び力を付け続けていった。

そして主人公はたった14歳で戦場の最前線に立ち、何十もの敵兵を倒し圧倒的な力を見せつけた。

——だがそんな主人公を変えたのは一人の小さな女の子だった。

主人公はその日も広場で特訓を重ねていた。すると小さな女の子が主人公に話をかけた。

「ねえお兄ちゃんはそのなに剣を振って何をしてるの？」

主人公はいきなり話しかけられた事に驚いたが、無邪気に質問をしてくる女の子に胸を張って答えた。

すると少女は少し嫌な顔をした。

主人公は困惑した、毎日特訓しかしていなかった為子供の相手なんてした事が無かったからだ。

主人公は少女に訪ねた。

「君は戦争が嫌いなのかな？」

「うん、戦争は大っ嫌いだよ、ママとパパを奪っていったんだもん、私のママとパパだけじゃないよ、皆のママとパパを殺しちゃうんだよ」

少女の言葉で主人公は言葉が出なかった。

今まで全く考えたはいなかった。戦争で勝利を勝ち取ればそれは

とても良い事だと常に親に聞かされていた主人公は、心の一部が崩された気がした。

当たり前だった、戦争は人が死ぬ。死ねば悲しむ人がいる。

誰でも知っている事だった。だが主人公にはその言葉で初めて戦争が恐ろしく感じたのだ。

その日何故か主人公は少女の住んでいる孤児院を訪ねる事にした。何故主人公は孤児院に行こうと思ったのかは解らないが、戦争とは何かを確かめたかったのかもしれないし、自分が何をしているのかの答えを探していたのかもしれない。

そして主人公は戦争の怖さを認識した。

戦争は自分が輝ける場所だと思い疑わなかった主人公は今では戦争に対してどう考えれば良いかわからなくなっていた。

まだ15歳の主人公にはこの問題は大きすぎたのだ。直ぐに答えが出せるはずもない。

主人公は特訓をする理由に疑問を持ち、全く上手いけなくなっていた。そしてその頃から同時に主人公は都市を見て回る事にした。

その時初めてこの国のこの世界の状況を知った。

戦争は人が死ぬ、そんな簡単な事すらちゃんと理解していなかった事に主人公はショックを受けた、今まで自分が輝ける場所だと思っていた所は地獄だったのだ。

その日から主人公は戦わなくなった。戦場では後ろで指揮に周りが死なない戦い方を常に指示した。

主人公は戦場で戦果を得られなくなったが、その死傷者の数の減少により、多くの兵士に慕われるようになった。

だがそれをよく思わなかったのは両親と国だった。

両親は主人公と何度も口論をした。両親の事を尊敬していた主人公はとても苦しかった。だが主人公は既に戦争で沢山の人間を殺す事は出来なかった。

主人公は政治学を学んだ。外交を執り行う事によって戦争をしない国にしようと考えたのだ。だがこの国は戦争で築き上げた国、簡単に他国との友好関係が取れるわけがない、更に王が戦争で得る事の出来る莫大な金に飢えていたのだ。

主人公は諦めなかった。3年かけて交渉し次の戦争で戦果を治める事が出来たらその戦争を最後にし、政治や外交に専念する平和な国を目指そうと公約を交わした。

そして、主人公は最後の戦争で最高の戦歴を治めた。それは敵中隊を無傷での捕捉、そして軍の隊長のみを狙った討伐による最速の戦争終了。

主人公は今までにない傷だらけの体でその戦争を終わらせたのだ。……。

そして、最後の戦争を終え、これから平和になるはずのこの国を静かに見守るはずだった主人公に絶望の依頼書がギルドに撒かれる。……。
それが物語の始まりなのだ。

「何で今まで気が付かなかったんだ俺……一致するんだよな、金持ちのところといい、自分の名前を言いたがらないところ、更に子供好きなんだよな」

そして今回の展開、戦争開始宣告ともいえる徴兵の依頼書……。今回の依頼書は特別だったはずだ、事前に誰も知らされずいきなり発行された特殊なケース。

それで慌てて城に飛び込み依頼書の説明を求めるがその時の国の対応で主人公が国に裏切られたことに気が付くのだ。

そして俺は重大な事件に気がつき急いで出かける準備を始めた。

「やばい！　だが、それなら今から向かえば間に合うはずだ！」

俺は小説の冒頭を思い出した。

それは国に裏切られた主人公が次の日、孤児院に行くと何者かによつて火が放たれ何人もの子供達が死んでしまうという悲劇だった。その犯人は主人公の手により捕まえられ一度牢獄に閉じ込められていた者だったはずだ。

その為、主人公は今現在の所持金を使用し、子供達を違う国の孤児院に住まわせてこの国から旅立ち冒険が始まるのだった。

「国に裏切られるのはもうどうしようもねえ、だが子供たちが死ぬのは間違っているはずだ！」

俺は宿から飛び出し直ぐに孤児院へ向かって走り出した。

まだあいつが主人公と決まったわけじゃねえし、この国が主人公の故郷で物語の始まりの時代かどうかもわからないが、俺の行動によつて沢山の小さな命が救われる可能性があるなら動き出すしかねえだろう！！

俺は、木刀を持って孤児院までに戦闘態勢に入れるように準備を始めた。

「よし、まだ何も起ってないな」

俺は孤児院に到着し木刀を地面に突き刺し安心した。
だがその瞬間、こっちに近づいてくる気配を感じ取った。

「来る！！」

何者かが背後から一瞬で近距離まで迫られ攻撃を仕掛けてきた。
それは俺が両手で防がないと一瞬で膝をついていただろう、完璧に急所の狙った綺麗な攻撃だった。走っている途中で意識を戦闘態

勢に切り替えていなかったら防ぐ事は出来なかっただろう。

俺は攻撃をしてきた敵を視覚で確認しようとしたが直ぐに次の攻撃を仕掛けてきたので直ぐに防御態勢に入り次の攻撃を迎え入れる。相手の攻撃は一撃一撃が正確で破壊力があり、短時間で6撃もの拳を放ってきた。

俺は全て防ぐことに成功したが、こちら側の掌がしびれつつある。

「くそ、こいつは強い！　今まで戦ってきた中でお前の様な奴は初めてだぜ」

俺は相手との距離を何とか取って、反撃の機会をうかがう。

攻撃力は俺の方が強いはずだ、だが体格的な差で攻撃速度が確実に相手の方が早い。

相手の攻撃を受け流すのは、もう少し相手の動きを見ないといけないだろう、あの動きは何処かで見た事がある気がするが、まだどのような攻撃が来るか予測できない。

俺は様々な武術を思い出し、戦況にあったスタイルを導き出す。

木刀は相手に蹴り飛ばされ取りに行く事は不可能になっていた。

武器が無く相手の攻撃の方が早いならやり方は決まっている、出来るだけ相手の攻撃を自分の急所に当てない様に回避しながらカウンターを狙うだけだ。

既に相手はこちらに近づいてきている、俺は相手の攻撃を受ける覚悟でカウンターを狙う。

だがその時、俺と相手の男は孤児院からの悲鳴で動きが止まった。相手の意識が孤児院に向かっていている事が先に気付いた俺は孤児院に向かって走り出した。

すると俺の後ろから直ぐに相手が追ってきた。俺は追いつかれる前に言葉を吐き捨てた。

「くそ、お前以外にも仲間がいたのか、子供達を殺してお前らに何

の得があるんだ！」

「……は？ それはどういう事だ？ お前がこの孤児院を襲った奴の一人では無いんか！？」

そして俺ら二人は大きな勘違いをしていた事に気が付き2人で孤児院に向かった。

孤児院の門に到着し男は俺に声をかけてくる。

「俺は子供達を救出する、お前は孤児院を襲った男を探して捕まえ
てくれ」

「俺はお前を信じて良いのか？」

「俺は日本人だ！ お前と同じこの世界に召喚された男だと言えば
もうわかるだろ、目的はお前と一緒にだ！」

「そうか！ 分かったじゃあ子供達を頼む！」

俺は孤児院の裏口あたりに居た男を見つけた、手にはナイフを持
っており孤児院の子供と思われる子が抱えられていた。

「てめえ、この頃あいつの依頼を受けていた小僧だな、何故ここに
来ることが分かった？」

「うるせえ、さっさとその子を放して大人しく俺に捕まれ」

「何を言つてやがる、この子がどうなつてもいいのか？ さっさと
俺を見逃してお前も逃げな、そろそろ此処にも火が回ってくるぞ」

「てめえ既に火を放ったのか？」

「そろそろ俺の仲間が日を放つてゐる頃だ。残念だったなお前は何も
守れねえよ」

——ブチッ

俺は頭の中の何かはじけ飛んだのがわかった。

俺は何も守れないだと？ふざけるなよ、俺はこれからこの世界を

周り沢山の命と仲間を救う旅に向かうん、いきなりお前なんか
に否定されてたまるか。

そして俺の行動は最速の域を達した。

通常15歩程度の距離をたった3歩で相手に近づき一瞬で腕を折
り武器を薙ぎ払った。

「お前、俺に何て言った？ もう一度行ってみろよ」

武器を薙ぎ払われた男は一瞬で何が起こったのか分からなくなっ
ていた。

尻もちをついて子供を抱えていた腕の力が緩み子供が解放された。

「本当はもう拘束するだけで良いんだけどな、すまん一発殴らせて
もらうぜ」

俺は一撃で震えあがった男を気絶させ拘束し捕まっていた子供と
一緒に裏口から脱出した。

孤児院の門まで向かうと子供達と孤児院の院長が集まって身を寄
せ合っていた。

その前には先ほど別れた男が俺の顔を確認して手を振る。

「おう大丈夫だったか？ こっちにも一人火を放とうとした奴がい
たが上手く不意を突いて倒したんだが」

「ああこっちも無傷で救出出来たぜ、この通りだ」

俺は捕まえた男と投げ捨て、助けた女の子を解放した。
女の子は他の子供達のところへ走っていき泣いている。

「本当にありがとうございました。このお礼は必ずさせていただきます
ます」

院長らしき人が俺達に頭を下げる。

「いいさ、お礼なんて」

「ああ俺達が助けたくて助けたんだ、孤児院も燃やされずに済んだみたいだしな」

「だが院長、貴方達はこれから別の国に住み着いた方が良い」

もう一人の男が院長にこの国の危険性と明日来る筈の男に今日あった話をしりと喋っていた。

明日来る男とは主人公の事だろう、こいつはどうやってこの国のこの年の孤児院に主人公が来る事を知っていたんだろうか？

多分すごいマニアか頭の良い奴なんだろう。

男は色々と喋り終えた後、俺に話しかけてきた。

「おい、お前さん良く見れば黒野とかいう坊主の仲間じゃないんか？」

「黒野を知ってるのか？ あんだ誰だ？」

「ああ俺は柴田って言うんだ。丁度最初の夜に坊主が起きておつてな、少しだけ話したんだ、見た所坊主は見当たらないようだか？」

「柴田……そーいや最初の日にそんな男と会話をしたとか言ってたな黒野、今は黒野とあかりとは別行動だぜ」

「ほう、お前さん坊主より頭が良いんじゃないか、たった数日で此処までたどり着くなんて」

「いや、俺は偶然だ。丁度主人公に依頼を持ちかけられてな、それが無けりや此処に来てねえよ」

「そりゃ主人公に認められたってことかお前さん。俺の攻撃を受け止めるしすげえじゃねえか」

「まあ俺はなにも反撃できなかったから褒められてもあまりうれしくねえよ」

正直俺はこいつほど強い奴はあまり見た事無い、たった一瞬やり合っただけでも武道の師範大並みの強さを感じた。

「お前さん、これからどうする？　俺はもう少しこの孤児院を見回る事にするが」

「じゃあ俺は帰らせてもらうぜ、正直あんたの攻撃が腕に来てるんでな」

「そうか、良かったあれだけの攻撃を与えて防がれたとしても何もなっていないかったら俺はもう年だと思わんといかんからな」

俺は豪快に笑うおっさんに孤児院を任せ宿に帰る事にした。

次の日、目が覚めたら目の前に例の主人公がいた。

「……俺はそんな趣味はねえぞ」

「どんな趣味だ、何を言っているかわからんが私だって無い」

主人公は俺が起きて着替えるまで宿で待っていた。ってかこいつ何故俺の宿を知っているんだ？　言った事ねえのに……。

「で、朝から何の用だ？」

「まず、お礼が言いたい。俺がこの都市を離れている間に孤児院を守ってくれたんだろ？」

俺の目の前で礼儀正しくお辞儀をするその男は、やはり貴族だったんだと思うほどの綺麗な姿勢だった。

「ああ俺だって子供は好きだからな、それに依頼の分はちゃんと働かないといかねえからな」

「ありがとぅ、俺はあと少しでこの国に対して絶望するところだっ

たよ」

「そりゃよかったぜ、絶望なんてしても良いこたねえよ……それで？」

「それでとは？」

俺はもそもそとベットから起き上がる。

「お前、そろそろ旅に出るんだろ？ そうしないとわざわざ此処まで来ない筈だ」

「わかってるじゃないか、ああ私はこれからこの国を離れて世界をこの目で見てみようと思う、お前と同じようにな」

「先を越されてしまうのは嬉しくねえが、頑張れよ」

「ありがとう。君には感謝しきれないよ、金はその机上に置いておいた。少し早いがこれで依頼達成だ、今までありがとう」

「ああまた何処かで会えると良いな、なあ最後に聞いて良いか？」

「ん？ なんだ？」

「お前の名前だよ」

「ああ俺の名前はライオル、この名前で俺はこの世界を旅するんだ」

こうして、忠則と第一章の主人公、剣士ライオルは別れた。

残りの二日間は剣を振り続けるだけとなったが忠則の長いアルバイト生活は終了した。

07話 言葉

私は、大きな壁に行きあたってしまった。それも一瞬で。簡単に事が運ぶとは思っていなかったし、それも覚悟していた。でも初めて乗り越えなければいけない壁が山の様に高かった。

—— 共鳴歌 きょうめいか

共鳴歌とは、この異世界に存在する魔法の中で、人間が扱う事の出来ない回復魔法を、この世界の何処にでも存在する精霊の力を借りて使用する唯一の方法。

歌により精霊に呼びかけ、回復魔法を精霊が行う一見簡単な方法に見える。

だが共鳴歌はどれも高音域で難易度の高い歌な為、男性には歌えず、女性でも歌えない者も多い。

更に精霊は歌と心に反応するため、歌い手の精神に大きく作用するのだ。

たとえ共鳴歌が歌える者が何人もいたとしても、その歌と心が精霊に響かなければ全く意味のない物になってしまうのだ。

「これはあんまりだわ……」

深夜、ろうそくの明かりで照らされた宿の部屋で私は悩んでいた。…… 共鳴歌を私は歌えるかどうか。

通常の歌ならある程度の自信はある。合唱ではソプラノ、でそれに辛いと感じた事は無かった。

刺激の強い食べ物はあまり好きじゃないし、一時期声優を目指した事もあって喉には気を付けていた。

だから共鳴歌を習う前までは自身があつた。

「でも、共鳴歌を習う前にまず言葉を勉強しないといけないなんて」

——そう、大きな問題とは言語の壁だった。

初めて共鳴歌を聞いた時、何故か全く歌詞の意味が理解できなかった。

……なぜ歌詞の言葉が理解できないの？

最初、共鳴歌は特殊な歌だと思っていた。専用の言葉があり、通常では使わない言葉を使用しているのかと思っていた。でもそんな事は無かった。それは最悪な展開だった。

「そもそもこの世界の言葉が日本語の筈が無かったんだわ」

最初から言葉が通じた時、可笑しいと思うべきだった。日本がこの世界の共通語なんて無理がありすぎるもの。

「多分、異世界に召喚された時、もれなく言語の壁をどうにかしてくれる魔法を受けたのね。でも言語の魔法は完璧では無かったって事よね……。」

独り言をつぶやきながら落ち込む。

予想以上の高い壁に巡り合ってしまった。

この異世界で無意識で使っている言葉は日本語では無かった。

異世界の言葉だった、そして無意識にこの世界の言葉を日本語に

翻訳していた。

でも、意識すると一瞬で違いがわかった、相手の言葉を日本語では無いと認識するだけで、理解不能な言葉に変わってしまう。

そして同じで言葉は理解できても歌になると、イントネーションやリズムが加わり、無意識下での言葉の自動翻訳が出来なかった。

「この情報が手に入ったのは良いとして、どうすればいいのかしら」

この世界の言葉を覚えようにも、教科書もなければ指導者もいない。

完全に独学でしか方法がないのは頭が痛くなりそう。でも此処でめげてはいけない、諦めてしまったらまた目の前で人が死ぬ事になる。

「それだけは絶対にさせない」

この世界に来て昔の様な生活は一切できない、この世界には元の世界とは全てが違う、そう再確認できただけでも良かったわ。これでまた前に進める。

もう一度この世界で生き残る決意をして、ろうそくの灯を消した。

「おはようございます！ 今日もよろしく願いします！」

昨日よりも早く依頼者のもとに着く。私は大きく挨拶をして仕事を始める。

血で汚れた布を洗い続ける、洗剤の無いこの世界では綺麗に汚れが落ちない、何度も水で濯ぎ、汚れが落ちなくなったら次の布を洗う。

洗う場所が川でなければ2、3枚洗うだけで水が赤黒くなってしまうだろう。

川の水が冷たくて手が麻痺しているが手を休めてはいけない、まだ別の作業がたくさん残ってる。でも適当に洗ってしまったら布が傷んでしまう。それは絶対にだめだ。

たかが布でもこの世界では簡単に入手出来ないし、価値が違う。手が真っ赤になって感覚が麻痺した所でやっと水洗いし布を干して作業を終える。

「遅い！ どれだけ時間がかかってるの？」

「すみません！ 只今終わりました、直ぐに向かいます！」

今まで、勉強と読書と自作小説の執筆しかしてなかった私にはとても大変な作業だった。

多分この世界では川で洗濯なんて当たり前の作業なんだろう。たとえ日本が政治が上手くいってなくても、私はとても良い環境で育ってきていたと再確認する。

一度日本の生活の事を忘れて全一からやり直したと思わないと精神が付いていけない。

気を取り直し依頼者の元に向かって走りまた別の仕事に集中する。私一人の頑張りでもしかしたら何人もの命が助かるかもしれない。此処で投げ出しては駄目だ。

「はあこの世界には労働基準法が無いのよね……」

朝からずっと働き続けて先ほどまで朝日だったはずの太陽が既に夕日に変わっていた。

忙しすぎると知らずに時間が経過している、そして疲労感も同じ

だ。力仕事はしなかったが常に走り回っているので足がフラフラしていた。

本当なら今すぐにも借りている宿に向かい、身体の汗を流して死んだように寝たい。

でも向かうのは宿ではなく病院の一室。

「今日も大変でしたね、でもまだ時間はあります、始めましょうか」

ドアを開けると、一人の女性が私を待っていてくれた。

そう、昨日私の言葉をききいれてくれた聖歌隊の女性だ。仕事後にわざわざ私に共鳴歌の講師を引き受けてくれた。名前はレーアさんと言うそう。

「はい！ よろしくお願いしますレーアさん！」

「良い返事ね、じゃあまず共鳴歌の事について貴女はどれくらい知っていますか？」

「共鳴歌の意味とその使用方法の難しさを少し知っているだけです、すみません」

そう、この世界の共鳴歌についての知識は小説ではあまり語られなかった。

異世界での日常生活における様々な情報や生活スタイルを詳細に明確に表現しているにも関わらず、他のファンタジー小説と違う独特な設定で有りながら、共鳴歌の説明は少なく、使用者も数人程度しか作中に現れていないのだ。

その為、私の知る知識は小説の中で説明された少しの知識しか無く、無知と言っても過言ではない状態だった。

「そう、貴女はあまり教会には訪れた事が無いのね。でも今まで戦争が続いていたこの時代、教会に訪れる暇はないかもしれないわね」

「……はい」

勘違いしてくれたのは良かったけど、嘘をついている様で少し心が痛い。

「では、まず精霊と、共鳴歌について説明するわね」

「はい」

「この世界には魔力と言う存在が何処にでも存在します。その魔力を統計し管理していると言われているわ」

「……言われている？」

「ええ、精霊は私達人間には見る事が出来ません、その為精霊がこの世界で何の役割を持っているかは私達には理解できないの」

「では何故この世界に精霊がいると分かっているのですか？」

「それは、共鳴歌を歌うと解るわね。共鳴歌は精霊と共鳴し怪我人を癒し治す歌です。歌うと自然に精霊の存在が感じられるの。その感覚は歌った人にしか分からないわ」

「そうなんですか」

「ええ、感覚は人によって全く違うわ、私の場合は目の前に暖かな光が現れて包み込まれる感覚ね、他の人は視覚的だったり聴覚的だったりと本当に色々」

「では、共鳴歌を歌う方法さえ人により変わってくるんですか？」

「そうね、だから最初は精霊と共鳴するにはとても難しいわ。精霊の存在を認識できないからね。貴女も知っている通り、共鳴歌は歌と心に共鳴するの。だから精霊がどういう存在か認識出来るまで苦労するかもしれないわ、それで諦めていった人も沢山いるから」

レーアさんは荷物の中から一冊の本を出した。

「まあ精霊と共鳴歌についてはこれ位にしておきましょう、ではそろそろ本格的に始めますね」

レーアさんが本を開き、私には理解できない記号が規則的に並んでいた。

「貴女は、譜面を見た事ある？」

「いえ……これが譜面ですか？」

「ええ、ではまず譜面を読めるようにならないといけないわね……文字は読めるかしら？」

「はい、文字は……」

その時に私はこの世界の歌を歌えない事を思い出し直ぐに言葉を修正する。

「すみません、文字は解るのですが、音楽に歌詞を載せるのが苦手です……まずは譜面の読み方と、歌い方について教えていただけると嬉しいのですが」

「そう？ 貴女がそういうなら良いでしょう、ではまず譜面の読み方について説明させていただきますね」

「ありがとうございます！」

譜面の読み方を覚える間に、歌詞を読み、歌える方法を探さなければならぬわ……。

前途多難だけど、大きな壁を少しずつ削り続けるしかない。

「では、この記号の意味を全て説明するから出来るだけ覚えてくださいわね」

「はい！」

08話 感情

「あー難しい……」

宿について寝る準備を終えた私は頭を抱えて宿の机の上で唸っていた。

机の上に置かれているのは一冊の本と記号だらけの紙が数枚。本は病院にあった一冊の本を借りてきたのだ。本の内容は理解できた。だが日本語では無かった。

この国の文字だろうか？それともこの世界共通の文字だろうか？今の私には解らないが、何故か文字の理解だけは出来た。

今思えば、ギルドの依頼書も日本語では無かった。何故そんな当たり前な事を疑問に思わなかったんだろうと考えたが、明確な答えは出てこない。

推測だけど、自動翻訳魔法と同時にそれに対する精神作用の魔法が一緒にかけられたのでしょうか。

でも、読めても問題が解決できた訳ではなかった。文字が理解できてもその文字がどう発音するのかが分からない……。

基本的に全て日本語に自動的に変換し理解してしまうので、この国の言葉と文字を理解できても意識的に使用する事が出来ないのだ。簡単に言えばこうだ。

- 1、異世界の言葉で会話や文字でやり取りする事は可能。
- 2、異世界の言葉の意味を理解するのは不可能。

「異世界の言葉なんてたった数日で理解できるわけ無いわ……」

結果的に解った事は、共鳴歌を歌うには言葉を覚えるしかないのだ。

外国語を覚えるのだって、半年以上はかかってしまうのに異世界

語何てどうやって覚えればいいの……。私は既に誰かに降参したい気持だった。

「せめて、教科書や辞書があれば良いんだけど……」

そんなものは無いのは分かってわいても無い物ねだりしてしまう。こんな状態ではもう何も良いアイディアは私の中に生まれてこないわね。悩んでいても仕方が無い。

それに問題ばかりでは無かった。

机の上に置いてある本の隣にある記号の羅列。これはこの世界の楽譜だ。

最初に見た時は意味が全く理解できなかったが、説明を聞くと形が違っただけで元の世界の楽譜とほとんど同じだった。

並び方や形については独特でまだすべて理解したわけでは無かったがこれなら後数日のうちに全て理解できるだろう。

私は今日の夕方に教えてもらった事を譜面を見ながら思い出しゆっくりと復唱しながら記号を覚え、静かに譜面に合わせて口ずさむ。何度かそれを繰り返し、明日の事を考え私は布団に入った。

二日目の朝、私は昨日の様に朝から仕事に専念した。だが、私が昨日と同じように仕事をしてても周りが同じように動くとは限らない。

……その日初めて私の目の前で人間が死んだ。

この仕事を初めた初日で既に数十の死体を見た私でも、それでも耐えられなかった。

その男性は左腕が無かった。右手で左肩を抑えただひたすら言葉にならない悲鳴を上げ続けていた。

直ぐに聖歌隊に引き渡そうとしたが、一人の女性が首を振って私を止めた。それはもう何度も見た事のある、助からないと言うサインだった。

私は、少しずつ悲鳴が小さくなっていく男性を荷台に乗せて、ゆっくりと身元確認を確かめる部屋に運んでいた。

男性は既に焦点があっていなかった、ただ「助けてくれ。助けてくれ」と私の方を向き呟いていた。

部屋に付いて私が男性を引きずる形で動かそうとした時、静かに息を引き取った。

その瞬間、私は男性の身体を持つ事が出来なくなった。身体力が一気に抜け身体が震えた。

………人が死んだ人が死んだ人が死んだ。

頭の中で唯それだけが繰り返される。それ以外の事が考えられなかった。思考が停止し、目の前が真っ白になった。

気が付いた時には私自身がベッドの上に寝ていた。

病院で働いている女性の一人が私を見つけてくれたそうだ。その女性によると、死体を目の前で、吐いて涙や鼻水を流しつぶつぶと何かを喋り気絶したようだ。

私は話を聞いている間、その時の事を思い出し身体が震えていた。目の前で人が死んだ時の恐怖は想像をはるかに超えた。この日はもう仕事をする事は出来なかった。

夕方になり、昨日と同じ部屋に向かった。

「今日は大変だったそうね」

昨日と同じ笑顔でレーアさんは私を迎え入れてくれた。

多分今の私の顔はともひどいだろう、此処に来るまでの間に何度も大丈夫かと声をかけられた。今日はもう共鳴歌の練習は控えよ

うと思いレーアさんに告げようとしていた。

「すみません、今日は……」

「ちよつと、私の話を聞いてくれるかな？」

私の言葉をいきなり遮ったレーアさんは私を近くの椅子に座らせ静かに語り始めた。

「ある一人の少女の話なんだけどね、その子のお母さんが病院に勤めていてね、貴女と同じように一人で病院のお手伝いをしていたわ。その子のお母さんは歌が好きだったんだけど、高い声が出なくて聖歌隊に入れなくてね。それでも誰かを助けたいって思いがあつてね、病院でお仕事していたの。まあそんな事はその子は知る訳が無く、お母さんを手伝おうと洗濯や布団を直したりと色々頑張っていたわ」

いきなりで戸惑いつつも、私は静かに聞いていた。

「その子はお母さんとあまり一緒の仕事は出来なかったの。そして何年かが経つてね、その子が貴女より少し年下くらいかな？ それくらいの年にね、お母さんの仕事を目の当たりにしたの」

「それって……」

「そう、初めてそれを見たのがその時。その子は数年病院で仕事してたけど、初めての光景だったわ、その時も今の様に戦争があつてね、目の前には今の様に死体の山。貴女と同じね」

「……………」

私はレーアさんの話に聞き入っていた。それを確認してレーアさんは話を続ける。

「それは悲惨だったわ、その時の戦争は長く続いていて今以上だっ

たかも知れない。でも驚いたのは、その中で頑張っていた人達だった。聖歌隊の人達が必死に歌い続け、その周りで様々な処置をしながら走り回るお母さん達。皆真剣で一秒一秒を全力で生きていた。怪我人も聖歌隊もそのほかの人達も。それを見ていたら知らない間に時間が経ってしまった。その日は何もできなかったわ、何かしようとしても、目の前には何時死ぬかわからない人と死体の山。怖かったし、それを直視できなかった」

この子は私と似ていた。とてもこの子の気持ちは分かる気がした。

「その時にその子の中に新しい感情が生まれたの、このままではいけないってね。直ぐに聖歌隊の方をお願いしたわ、その歌を教えてくださいってね」

「そ、それって……」

「ええ、全くあなたと一緒によ。その子も文字は読めなかったし譜面だっけって見た事が無かったわ。でも必死に練習した。まず譜面を覚えてね、文字は歌詞は一つ一つ聞いて覚えて少しずつ文字を覚えてたの。大変だったけど苦痛ではなかった。私が頑張れば死ぬ人間が減るんです、助かった人の笑顔を見ると涙が流れるほど嬉しかった。貴女にもその笑顔を見て欲しいの」

「……レーアさん」

「そういう事で貴女には頑張ってもらいたいわ、今日はもう何もしませんけど、明日から覚悟してね」

レーアさんは私に微笑んで、さあもう帰りなさいと私を部屋から追い出した。

先ほどの話は多分レーアさん本人の話だと思った。自分と似たような私を見て手を貸してくれたと、今になってわかった。

そもそも子供の時から毎日病院で手伝いをしていた子供ならまだしも、たった一日仕事を手伝いに来た私に夜遅くまで付き合ってく

れる人なんてお人好しにも程があつた。

そんな事も今さら気が付くなんて今まで何も見えていなかったのかも知れない。

病院を出て風に当たる。この世界には四季がなくて、地方により温度差は一年を通してあまり変動はなかったのを思い出した。

この国の風は生暖かく、快適とは言えなかった。けど今は日が沈んだ事によって、気温が少し下がりが心地の良い風が変わっていた。

召喚された時からずっと着ている服はこの国に合ったもので、風通しが良く良い風が私に直接あたる。

私は昨日走って向かった道のりをゆつくりと歩いて帰る。やるはずだった仕事を半分以上やらずにベットで寝込んでいた為身体の調子は悪くは無かった。

でも、心の方はぐちゃぐちゃのまま、収まりきるはずの無い気持ちを引き出しに詰め込もうとしていた。

たった数日に色々な事がありすぎていた。いきなり見た事も無い教会に来たと思ったら、今まであつて当たり前前の物が全くない異世界だった。

不安と恐怖で今にも押しつぶされそうだった私を救ってくれたのが、いつも何かを考えている様な目つきの男性、黒野だった。

眼鏡が無かったが、しかめ面の顔は直ぐに黒野だと分かった。私がゆつくり近づいて声をかけると私を知らないと言う、その瞬間すごく不安になったけど、その時私も眼鏡が無く、三つ編みもしていない家にいる恰好だった事に気が付いた。

そんなに見た目が違うのかしらと疑問だったけど、黒野の大きさなりアクションで怒りつつも今まで感じていた不安と恐怖が消えていた。

その後直ぐにたー君にも遭遇し、この世界でも全く変わらない2人を見て心は不安と恐怖から安心と安堵に変わっていた。

でも一人になって、直ぐに始めて死体を目に焼き付けてしまった。また少しずつ私の心に不安と恐怖が蝕んでいた。

異世界の怖さを知った私は共鳴歌と言う武器を手に入れようと必死になった。そこでぶつかったのは言葉の壁。それでもしがみ付こうと心を無視していた。

……そして耐えきれなくなってしまうた。

今思うと無茶苦茶だ、ただのインドア派の女子大生がこんな環境変化に追いつけるはずが無いわ。

「あははっはははは……」

何故だか笑いがこみあげてきた。既に日が沈みきる寸前で周りに人はいなかった。

笑い声が少しずつ小さくなって、視界がぼやけていき喉が詰まり笑い声が嗚咽に変わった。それから笑い声に負けないほどの声で泣いた。

何で笑ったか何で泣いていたかわからなかった。ただ感情を吐き出したかったのかもしれない。今まで我慢していた感情が崩壊した。大粒の涙が土に染み込んでいく。

どれくらいたっただろう。土の一部が湿っていて泥の様になっていた。日は既に沈み切り、所々にランプの様な明りが点々と付いていた。

私は直ぐに宿に向かい身体を拭いて借りた本と譜面を片付け寝る事にした。

まだ何も解決していないし、何かを手に入れた訳でもなかった。でも今日一日で私自身の何かが変わった。今までと違う事が分かった。

感情を吐き出し疲れた心と体を休ませる為に布団の中に入る。

今日はこの世界に来て初めてぐっすり眠る事が出来る気がした。

09話 共鳴

朝起きた時、今までにないスッキリとした目覚めだった。

近くに流れている川の流れと小鳥のさえずりをこの世界で初めて聞いた気がした。顔を洗う為に外にでると視界が広がっていた。

初めてこの世界を直視したのかもしれない。朝日はまぶしく雲ひとつない天気だった。

私は川辺で顔を洗い深呼吸する、空気はとても美味しかった。空気を肺にいっぱい詰め込み酸素を身体に行き渡らせ、静かに吐き出す。日本に居た私の身体が異世界に馴染もうとしている気がした。何で今まで気が付かなかったんだろう。この世界はとても美しい。もちろん、人は死んでいるし綺麗事ばかりではないけど、自然と共存出来ているこの世界は芸術作品ともいえる美しさだ。

川には魚が流れに逆らい泳いでいるし、小鳥達は歌っていた。風も心地が良い。猫に似た動物がゆつくりと歩いている。木には見た事の無い木の実が赤く染まりその木の根の近くの草は綺麗な花が咲いていた。

知らないうちに私は口ずさんでいた。

歌詞は覚えていなかったがハミングで聞いた歌を思い出しながらゆつくりと声に出していた。口ずさんでいるとこの曲が生まれた理由が分かった気がした。

この世界で生きていけば自然と歌いたくなってくる。歌詞が分からないのがもどかしかった。直ぐにでも共鳴歌を歌いたくなった。『歌わなきゃいけない』ではなく『歌いたい』という気持ちが一気に膨れ上がった。

私は急いで準備をして走って病院に向かった。

——共鳴歌が聞きたかった。歌いたかった。

昨日の朝とは違いモノクロ画像が色彩豊になった様変わった。
人が死ぬのは悲しかったが、目を背ける事を止めた。まだ心をズキと痛むが耐えられない物では無かった。自然と声が大きくなり笑顔が漏れた。

昨日倒れた私を心配していた人にお礼と言って直ぐに仕事を始める。

仕事は大変だが苦痛ではなかったし汗をかくのが気持ち良かった。
怪我人に声をかける様になったのは私自身驚いた。

周りも私の変化に驚いていたが直ぐに驚いた表情から微笑みに変わった。

自然と歌を口ずさんでいた。共鳴歌を聞いて、それに合わせて口ずさんでいた。歌詞を理解できなくても何かが伝わった。

そんな事をしている間に知らないうちに日が沈み始めていた。

私は仕事を急いで終わらして、レーアさんに合う為に昨日と同じ小部屋に走った。

「お待たせしました！」

「あら、取っても良い笑顔ね。昨日はあの話を貴女に言って正解だったよね、良かったわ」

レーアさんは昨日と同じように私に微笑みかけてくれている。机の上には昨日とは比べ物にならない量の譜面が積んであった。

「じゃあ昨日言った通り、覚悟して泣いて謝ったって手は抜かないわよ」

「はい！」

練習はただひたすら歌う。歌詞の読めない私の為にレーアさんは一つ一つ発音と歌い方を指摘しながら歌い。私に復唱させた。歌詞の内容を見るととても綺麗だった。自然に感謝する歌。様々

な者を愛する歌。前に進む為の歌。歌詞の意味を理解した私は更に共鳴歌が好きになった。

歌詞をイメージして歌う。精一杯気持ちを込める。たどたどしい歌い方だったが歌い続けた。

大変だが楽しい時間は直ぐに終わってしまう。レーアさんは私に大量の譜面を貸してくれた。

「寝る前に目を通して口ずさんでね、大きい声は駄目だからね、周りに迷惑をかけてしまうから」

宿に付き寝る準備を直ぐにした私は眠くなるまで譜面を読み続け口ずさみ続けた。

4・5・6日目とただひたすら共鳴歌を口ずさみ続けた。精霊との共鳴は出来なかったがレーアさんは私の成長に驚き喜んでいた。

「もしかしたら貴女が此处を出るまでに精霊と共鳴が出来るかもしれないわね」

冗談かと思ったが、レーアさんの表情を見ると真剣な顔だった。

私はレーアさんに答えようと歌詞を必死に覚えた。歌に関連する言葉をいくつか理解する事が出来た。

少しずつ歌い方に違和感が無くなってきたのが自分でも分かった。7日目の朝、私は目が覚めたと同時に起き上がり朝の支度をして病院に向かった。

既に名前も覚えられて病院の職員達と仲良くなった私は仕事は苦痛でも何でもない物になった。身体を動かすと生きている事が実感できる。死と言う物を直視する事によって生きていられる事に感謝する事が出来るようになっていた。

この世界に来てからたった数日でとても成長した気がした。いや実際成長したのだろう。

本に囲まれた一人の世界が好きだった私は友達と言えば黒野達だけだった。中学高校と地味に過ごしていた私は大人しい女の子のグループにずっと属していた。更にそのグループでも大人しい人間だっただろう。

大学に入ってもこのまま地味に生きていくのだろうと思っていたのだが、それを変えたのが黒野だった。

出会いは文芸系のサークルに入ったのがきっかけだった。私は読んだ本について話をしたいと心のどこかで思っていたのだろう。

けど入ったサークルは名前だけだった。ただ集まって本も読まず何か喋ったりゲームをやっていただけだった。

直ぐにこのサークルは駄目だと思った。だけど歓迎会だけは出てみようと大学から少し遠い居酒屋で歓迎会があったので参加したのだ。

そこで特に運命的な出会いがあったわけじゃ無かった。ただ、私の様にサークルのイメージが違い、明日にでも幽霊部員になろうと思っていた人が黒野だったのだ。私はこの時も地味な服装で周りからの反応も無かったのですと隅で歓迎会が終わるまで喋っていた。帰りに連絡先を交換してから、少しずつ交流が増えた。サークルには行かなかったが黒野とは良く合うようになって、黒野の紹介で大きな身体の人と君とも友達になれた。

自分でも驚いていた。私にはこんなにも行動力があつたなんて、初めて同じ趣味の人と知り合ってその分野について話す事がこんなにも楽しいとは思わなかった。

知らないうちに私はHPを立ち上げ、サークル活動をし始めていたのだ。面白い、楽しいという感情は私をどんどん突き動かしていたのだ。

そしてこの世界に召喚された今、また私は成長した。

高校の時の私が今の私を見たら別人だと思うだろう、ドッペルゲンガーを疑うのかもしれない。それくらい私は変った。これが大人になると言う事なんだろうかと思いつながら衣服を干していた。

この日、遂に生死の境目をさまよう患者を担当させてもらう事になった。恐怖は拭えなかったが、精一杯頑張った。何人もの死を目にしたが其れを受け止めた。そして生き延びた人の笑顔に涙した。

そしてまた日が沈む頃、レーアさんの所に向かう。私はいつも通りの頬笑みで迎えてくれるレーアさんをお姉さんの様に慕っていた。この人がいなくなったら私は様々な感情に押しつぶされ駄目になっていただろう。黒野かたー君に助けを求めて逃げていたかもしない。

「何？ 私の顔に何かついてる？」

「あ、いえ、いつもありがとうございます！」

「お礼なんて良いわよ。でも嬉しいわ」

脈絡もなく感謝の言葉を告げてしまったけどレーアさんの頬笑みがさらに増したように見えたので良かった。

レーアさんは、私に始めるわよと歌う準備を急がせる。時間はあまり多くは無いのだから時間を有効に使わないといけないのだから当たり前だ。

一音ずつ正確に音を合わせて声を出す。都合良く絶対音感を持っている訳じゃない私は毎日このトレーニングをして身体に覚えさせるしかない。昔から楽器と触れ合う機会があったので正確ではないが、ある程度の音を当てる事は出来るようになった。

この世界では音階がドレミファソラシドでもなければイロハニホヘトイロハでもない。もちろん楽器の様にドイツ語読みのでもなかったので全ての記号を日本語に変換し、当てはめるのは大変だった。だが、覚えてしまえば音楽の規則はほとんど一致していた。それからは合唱の練習をひたすら続けるだけだった。

この世界の言葉は音楽の場合にのみ使用できるようになった。通常の会話では分からない言葉が多すぎるし片言になってしまつのでこの世界の言葉を使うにはまだ長い時間がかかるだろう。

歌うのが楽しかった、毎回全力で心をこめて歌った。だがこの数

日間何度も何度も精霊と共鳴使用と心をこめて歌っていたが全く反応は無かった。

焦ってはいなかったが、私が歌っている歌を共鳴歌にしたかった。

「歌は既に合格点ね。後は精霊と共鳴するだけだけど。これはもう歌い続けるしかないからね、最初の一回が一番難しいわ。歌う時は常に全力で歌って精霊が貴女を認め共鳴をしてくれるのを待ち続けるしかないわ」

レーアさんの言葉を聞いて歌詞を読み、歌い方を覚え、何度も歌った。病院の就寝時間まで歌い続けたが今日も結局共鳴は出来なかった。レーアさんに礼を告げて病院の門の前でさようならと別れる。残りは後2日になってしまった。共鳴歌を歌えるようにはなってきたが、まだ使用できない。

レーアさんが言うには数日で共鳴出来る人もいれば何十日経っても一向に共鳴出来ない人もいるんだそうだ。最初の精霊との共鳴は完全に精霊側の気まぐれなのだ。

直ぐに気に入る精霊がいれば気に入らないと思う精霊も沢山いるらしい。私はこの世界の人間じゃないが精霊は私を受け入れてくれるのだろうか……。

今日の勉強と練習、共鳴歌について考えていると既に宿の前に来ていた。

昨日までは帰ってから直ぐに就寝していたが、今日は何故か眠くなかった。身体の汗を拭きとり、2日前に毎日同じ服を着ていた私を見てレーアさんが一緒に服を選んでくれた代えの服に着替える。身体が適度に疲れて気持ち良かった、多分ベッドに入れば直ぐに眠れるかもしれない。

だけど今日は少し眠りたくなかった。朝に顔を洗う為にいつも向かう宿の裏庭に当たる川辺に向かった。

月は青かった。そもそも正確には月とは言わないのだろう。この

世界のどうという言葉で表現されるのだろう。考えるととても楽しかった。

月明りに照らされていた川の流れは、心地の良い音を響かせ幻想的な雰囲気を漂わせていた。

押し隠していた、『帰りたい』と言う気持ちは少しずつ和らいでいた。帰りたくない訳じゃ無かったけど、まだ帰る前にこの世界を見ていたかった。

どうせ帰る方法が分からないのなら皆と一緒に帰る方法を探しながらこの世界を見て回るのも悪くは無いと思えるようにまでなっていた。開き直ってしまったんだろう。こんな状況で後ろを向き続けても良い事何て無いんだ。

川の向こうの森林には月明りに照らされた淡い青に染まり、所々月明りに反応してか光を放っていた。

見れば見るほど幻想的だった。私は静かにこの世界を見つめていた。どれくらいの間だろうか、ただ自然を感じている私自身も自然の一部になった気がした。

「――」

自然と声が漏れていた。自分が歌っていた事に気が付くという体験を始めてした。

身体が歌に飢えていたんだろうか、気が付いても全く驚かなかった。囁くような歌声がだんだんと大きな声になっていた。

歌っていたのは共鳴歌の中の自然を愛する歌。共鳴歌は誰かを癒す為だけにある歌では無い、何度も歌って分かった、この世界が好きな人達が作った歌だ。

歌う度にこの歌が、この世界が好きになる。

「――！！」

その時だった。後ろから何かの気配を感じたと思った瞬間、誰かに抱きしめられたような感覚に襲われた。それは暖かく、幸せを感じた。

一瞬何が起きたかわからなかった。ただ幸福だった、ずっとこの感覚に包まれていたかった。ただそれだけの為に歌い続けた。たった数分の曲を、私が歌う事の出来る歌をつなぎ合わせ歌った。

20分くらい歌い続けていただろうか、歌い終わった直後息が切れて、身体力が抜け虚脱感を感じた。

その場に座り込み全く動ける気がしなかった。最初何が起きたのか分からなかったが、呼吸を整えて、頭が働くようになって分かった。

「……成功した」

ぼーっとしていた。共鳴歌が成功したのは分かった。精霊を感じたのがはつきりとわかった。私だけの精霊との共鳴する感覚を味わったからだ。

嬉しかったが歌いすぎたようだ。共鳴歌は歌声で精霊を呼び共鳴し、心を消費して対象を癒してくれるため、歌い終わった後の疲労感は大い。

身体は疲れていなかったが、共鳴歌を歌えた喜びを表現できる力が生まれなかった。

私はフラフラになりながら立ち上がりゆっくりと宿に戻った。

今の私を見たら夢遊病者だと思うだろう、それくらいゆっくりとフラフラしながら裏口から宿の中に入って布団にもぐった。嬉しさより心の疲弊が凄まじく死んだように寝た。

目が覚めた時、心が癒えていたのを感じた瞬間飛び上がり布団の上で創作ダンスを即興で作った。この姿は誰にも見せられないだろう変な踊りを息が切れるまで踊った。

嬉しかった、ただ嬉しかった。これこそ満面の笑みだろう。一人

でニヤニヤしているのはコメディの小説を読んだ時以来だ。

何とか顔の筋肉をほぐして顔を洗い病院に向かう。直ぐにレーアさんに報告したい気持ちでいっぱいだった。

「聖歌隊の人は既に中央都市に帰りましたよ」

依頼者が走ってきた私の顔を見て告げた。多分とても誰かに何かを伝えたいと言う気持ちを顔に出していたんだろう。

だがそんな事はどうでもよかった。

「……なぜですか？ まだ此処には大勢の怪我人がいるんですよ！」

「そうですが、既に危険状態の患者はいません。後は私達の出来る範囲の処置と本人の治癒能力で何とかあります」

依頼者の言う通りだった。既に怪我人の処置は出来ていたし、死につながる危険性と言えば感染症などの今現在気を付けておけば大丈夫なものだろう。危険だった人達は生と死の二つに分けられていた。

だけど納得がいかなかった、レーアさんが私に何も言わずにいなくなるはずがなかった。

「でも……何故今日だったんですか？」

「まだ貴女は知らないのね。さつき、ギルドの表に新しい依頼書が張られたの。……戦争の為の傭兵募集だったわ」

戦争……、その言葉に色々な事が頭の中で交差した。この世界の戦争。戦争が起こる事によって生まれる残酷なほどの死者。

この戦争開始の合図で私達の様な召喚された者は今何処の時代でどの場所なのか分かっただろう。

だが、今私が気にしているのはその事では無かった。

「なら、まだ聖歌隊の人達はこの病院を出てあまり時間は経って無いのですね」

「ええ今なら走れば間に合うかもしれないわね、でも貴女には仕事があるわよ」

「すみません、帰ったら私聖歌隊の代わりになりますので少し時間をください！」

「え！ 貴女、この数日で共鳴歌を歌えるようになったの？」

最後に依頼者が何かを言っていた気がするが私は聞かないで直ぐに病院を飛び出した。中央都市は大通りをまっすぐ進めば到着する。直ぐに中央都市に続く大通りに向かう。

今日会わないといつ会えるかわからない、いや多分もう二度と会えないだろう。私達はこの国を出ないといけなくなってしまった。

二度とこの国に戻ってくる事は無いだろう、たとえこの場所に戻ってきたとしても、その時はこの国は別の名前になっているはず。

——この国は次の戦争で大敗して名前の無い国になってしまうのだ。

それは第一話で戦士ライオルがこの国から出るまでのプロローグで語られていた。

戦争の多い国だったのは主人公の故郷だけだ。それもこの短期間に新しい戦争が起こればこの時代は小説のプロローグ部分か、又はそれよりもっと昔の時代になるだろう。

この時代が小説の始まりと同じなら、これから剣士ライオルは悲劇を迎える事になるだろう。

助けたいがライオルがどの孤児院に通っているかわからない。この戦争の多い大国なら孤児院の数は少なくは無いだろう。

この時代が物語の始まりだと言う確信はまだ無いし、ライオルが何処の都市の孤児院かもわからない今、私が今から探したところで手遅れだろう。

もしかしたら私以外の他の誰かがライオルの悲劇を止めるかもしれない。完全に他人頼りだが、今私がしないとイケないのはこの世界の主人公との対面じゃない。

短期間だけど身元も解らない一人の女性に親身になって共鳴歌を教えてくれた恩師に感謝の言葉を言わなければ。

全力で大通りを走る。学校の体育の授業でも此処まで真剣に走った事は無かった。足が直ぐに悲鳴を上げているのが分かったが、無視して走り続ける。

「レーアさん!!」

目の前には聖歌隊の服装を纏った女性達が中央都市に向かっていった。

後ろ姿ではレーアさんがいるかどうか分からなかったがなりふり構っていらなかった。大きな声で叫んだ事で聖歌隊以外の商店街の人達も私を見ていた。

恥ずかしくは無かった、此処で恥ずかしがって何も言えなかったらずっと後悔し続けるだけだ。それだけはしたくなかった。

直ぐに聖歌隊の中からレーアさんは現れた。

「あら、此処まで追いかけてくれるなんて嬉しいわ」

「当り前です！ 私、レーアさんのおかげでこの世界で生きていく自信が付いたんです」

「この世界？ 面白い言葉の使い回しをするわね」

レーアさんは何時もの様に微笑んでいた。

さっきまで走っていたので息苦しかったが、何とか声をだす。持っていた、譜面と本をレーアさんに突き出す。

「それは貴女に上げるわ、実は恩師から頂いたものなの。その内容

はすべて頭の中に入っているわ、それは必要とされている人が持っていた方が良いのよ」

「……でも」

「貴女も誰かに共鳴歌を教えてあげて、その時それを渡してあげて」

私の前まで来たレーアさんが私の頭をなでる。

「私、昨日の夜やっと共鳴歌を歌う事が出来たんです！」

「流石私が見込んだだけあるわ、貴女の共鳴歌を見る事が出来ないのは残念だけどね」

「信じてくれるんですか？」

「貴女がこんな時に嘘をつく人じゃない事くらい分かるわ」

私の頭をなでる手はとても優しく安心した。このままずっとこの人に共鳴歌を教わっていきたくと思った。でももうこの人の頬笑みは見れない……。

「この数日間、本当にありがとうございました」

レーアさんから一步下がり大きく頭を下げた。頭を下げるのがこの世界のルールに当てはまるのかは分からないが、私自身が出来る誠意は頭を下げる事だけだ。

「頑張つてね」

優しい声が聞こえた。多分その顔は微笑んでいただろう。

だがその姿を見る事は出来なかった、頭を上げる事が出来ない。

また地面に水滴が落ちていた。

涙を見せなくなかったのだ。

「お願い。私が救う事の出来ない沢山の命を救ってあげてください」
「はい……頑張ります！」

出来るだけ泣いている事を悟られない様に声を出す。多分ばれて
いるだろうけど……。

それでも泣いている姿をレーアさんに見せたくは無かった。レー
アさんが私の頭をポンポンと軽く叩いて離れていく。

足音が少しずつ小さくなっていく。これでお別れだ……。

涙が止まらなかった。また水たまりが出来ている。周りに人がい
て私を見ていたが抑える事が出来無い。

泣きやんで顔を上げると既に聖歌隊は遠くにいた。もう一度だけ
頭を下げて聖歌隊とは逆の方向へ進む。

「お待たせしました。聖歌隊の人達には敵いませんが、私に共鳴歌
を歌わせてください」

既に準備は出来た。集合まで残り2日、後はただ実践し自分が歌
える曲を増やして私が救える人を救おう。

——人が癒えるなら何度でも歌おう、命が救われるならいくら
でも心を削ろう。

こうしてあかりの10日間が終了した。

10話 魔法

「黒野」

「何でしょうか？」

小さい女の子が派手で大きな椅子に座って堂々と俺に話しかける。どの角度、どの状況下でも目の前にいるのは自分より年下の女の子だ。どんなに頑張っても中学生にしか見えない。ランドセルを背負っても違和感が無いだろう。

正直こんな女の子に敬語を使うのは嫌というわけではないが、強い違和感がある。

そもそもこの部屋自体も可笑しな事だらけだ。いわゆる魔法使いの部屋という感じでもなければ女の子の部屋と言っわけでもない。

あちこちに放り投げられた本と、紫や緑色の良くわからない液体の入った瓶もあるし、猫に似た動物の人形や、綺麗な花瓶に入っている綺麗な花が無造作に並べられている。他にもごちゃごちゃと色々な物が並べられていたり落ちていたりするが俺には理解できない物が多すぎて説明が出来ない。

一言で言つと統一性の無い滅茶苦茶ない部屋だ。

「昨日はすっかり話しこんでしまったな、なかなか面白い話を聞いた」

「それはなによりです」

俺は魔法を教えてもらう条件に元の世界の話とここに来るまでの経緯を昨日一日をかけて出来るだけ詳しく話した。

元の世界の話は予想以上に難しかった、そもそも元の世界とこの異世界ではあって当たり前の物が違う為、好奇心旺盛なこの小さな女の子に一つ一つ様々な物を説明する羽目になってしまった。

「さて。言い忘れおつたが、魔法を教えても良いのじゃが、たった10日では出来るかわからんが良いか？」

「はい、たとえ10日で魔法が使用できなくても使えるまでいつまでも練習し続けるので基礎だけでもお願いします」

昨日は結局仕事らしい仕事は全くしてい無かった。だがこの世界に召喚された時の事を目の前の小さい女の子に敬語で説明し続けた。だが言動や俺の説明に対する思考能力を見ると、小学生や中学生位の年齢では無いのは直ぐに分かった。

年齢を聞きたいところだが、女性に年齢を聞くと言う行動は危険すぎる。とても気になるが我慢するしかないだろう。

「さて、お前が魔法使いになりたい理由は聞いた。だがこの世界の魔法使いは良い扱いは受けないぞ。魔法を学び知識を得れば得るほど村人等に疎まれる事になるやもしれんのじゃ、良いのか？」

「それは知っております、この世界の魔法使いの歴史はお世辞にも綺麗と言えるものでは無い事は」

そう、この世界の魔法使いはあまり良い身分ではなかった。

なぜ身分が低いのかは世界の遙か昔、この世界に魔法というものが定義されていなかった時代に遡る。

魔法は誰にでも使えるものではない。本の文字を読める事が必要で、人間の持つ魔力は人により異なるのだ。魔法を覚えても中には火の粉を出す事も不可能な人間も少なくない。

そのため魔法を扱えるものは、文字が読めて勉学もでき魔力の持ち者に限られた。

魔法使いの存在が確立された当初、魔法使いは学者として尊敬の対象だった。

魔法使いは様々な魔法を使い森を切り開き町を作り、繁栄させて人々の生活を豊かにした。

だがその時代は長くは続かなかった。権力者達が魔法使いを目指したが魔力の少ない者達や勉強に優れない者達が魔法使いに対して僻みや妬みが生まれたのだ。

その感情は少しずつ大きくなり、爆発した。ついに魔法使いを弾圧し始めたのだ。

権力者は身分の低い魔法使いを様々な理由を付けて攻撃していった、一度始めてしまった弾圧は徐々に大きくなっていった、

魔法使いが世界に広まり何十年か過ぎた時、ついに魔法使い狩りという言葉が一つの国で生まれた。

その国は魔法使いが少ない国だった、魔法の繁栄が無いその国は魔法使いは嫉妬の対象でしか無かったのだ。

国は一斉に魔法使いを呪われたものとして死罪を言い渡しその日うちに民衆の前で断頭されたのだった。

その反響は大きく様々な国で魔法使いを名乗るものが弾圧されていった。

だが魔法使いも黙ってはいなかった。魔法は大きな力を持っているのだ、大人が数人一気に襲いかかっても抵抗できる力すらある。

そして事件が起きた、魔法使いを捉えようとした者達が大量に殺害されたのだ。

これを境に魔法使いと魔法使いでは無い者の間に恐怖や憤怒で大きな溝が生まれたのだ。

数年の争いの中、魔法使いたちは結託し、弾圧を避けるように寄り添い一つの国が生まれた。

それが魔法使いの集まる唯一の国ウエザンドだった。

ウエザンドは一切戦争を行わなかった。魔法使いは学者が多かったのだ、争いを好むものは少なく武器を持つ前に盾を持ったのだ。

魔法使いの国は魔法で直ぐに大きな繁栄をして、大きな防壁を築きあげた要塞の形をした大きな国になり、それにより他国の弾圧を阻止し、侵入不可能にさせた防壁は戦争を防いだのだ。

その国は他国との交流を極力遮断し、魔法を覚えたい者や、魔法を使える様になったものを迎え入れた。

ウエザンドが建国して数年で魔法使いと魔法使いでは無い者の交流は遮断される事になった。ウエザンドは魔法に対して嫌悪感を持つ者は一切国に入れなかったからだ。

そして魔法使いとの争いが無くなり長い年月が経った今は、魔法使いとそうでない者の溝を少しずつだが埋めていった。

そうして魔法使いはウエザンドから出る事も出来るような世界になったのだった。

「それでも私は魔法を使いたいのです、今から私が武術を学び仲間と同じ、それ以上の訓練を重ね血をにじむ努力をしたところで仲間に追いつく事は不可能なんです、仲間と俺とでは武術に対する才能と意識が違っんです」

そう、今俺が武術を学び訓練を続けようとも忠則には何年掛けても及ばない。これは才能の差と言うより自分の意志の差だ。自分がどれだけ必死に忠則に追いつこうと努力しても忠則は自分と同じ量を簡単にこなしていくだろう。

それだけ忠則の武道に対する熱意や努力は圧倒的なのだ。

「ほう、お主もそこまで身体が弱くは無かるう、今から武術を学び頑張ればある程度までは成長するだろう、だがそれでは駄目なのか」
「このまま人並みに強くなるだけではだめなのです、この世界の何処にでもに対応できる強さを俺は求めているんです」

「そうだな、樹海や山などに向かう場合、生きていける者は魔法使いと武道を極めた者と自然と共存可能な知識を持った者ではないと生きて帰ってくる事は難しいか」

「はい、自分が武道を極める事は出来たとしても何十年かかってしまうでしょう、ですが魔法使いは知識と自身に魔力があれば魔法使いになる事が可能です」

「そうじゃ、魔法を使用できるという事はそれだけで見え方や生き方が変わる。自分自身も周りの人間もな」

少女師匠は少し何かを考えていたが直ぐに別の話をし始めた。

「ふむ、ではそろそろ始めるかのう、最初は魔法についてじゃ」「はい！」

「お主は魔法についてどの程度知っておるのじゃ？」

「あまり詳しくは無いですが、ある程度の知識はあります」

「お前が言っていたネット小説とやらには魔法についての記述も存在していたのか？」

「はい、あまり細かくはありませんが魔法使いが主人公だった時魔法に付いてある程度説明書きがありました」

「魔法使いまでもが主人公として書かれていたのか……」

少女師匠はまた考え始める。何か考えているかわからないが思考している姿は全く硬く見えない、むしろ可愛いと言っても問題が無い。

多分俺が思っている以上に何か難しい事を考えているのだろう、だが見た目が小学生なのだ、他人から見ると算数の計算をしているようにしか見えない。

とても難問に行き当たったのか少し険しい顔になったが全く可愛さは衰えない、だが全く喋らなくなった少女師匠に声をかける。

「どうしました？」

「……ん？おうすまなかった、考え事をすると周りが見えなくなってしまうのじゃ、では始めようか、まずお前が知っている魔法に付いての知識を私に話せ、私がお主に何を教えれば良いかわからん」
「少し待ってください、整理させてください」

俺は今知っている魔法に関する内容を話す為に全て整理する。

まず魔法を使用するにはエネルギーとなる魔力が必要だ、魔力はこの世界の全てに存在する、空気中に漂ってもいるし、砂の一つ一つにも微量だが魔力が存在するのだ。

魔力が何故この世界に存在している理由は正確には分かっていないが、魔力が無ければ精霊は生きられない、精霊が生きられなければ魔力が無い。そういう相互関係になっているのはこの世界独特の医療技術、共鳴歌によって分かっている。

魔力は目に見えない自然エネルギーになる、エネルギーは使用すると当たり前だが無くなる。

自然に存在する魔力は無限に存在すると言っても過言ではないが、それを人間が使用する事は出来ない。自分自身の存在する魔力を使用するしかないのだ。

では何故魔法を使用するのに自身の魔力しか使用できないのか、それは魔法を使用する時の流れが重要になってくる。

この世界の魔法は魔法陣を空气中や地面や壁、更には脳内で描く事によって魔法の性質が決まり、その魔法陣に自身の魔力を注ぎ込み、明確なイメージと共に発動されるのだ。

この魔法陣に魔力を注ぐのはとても重要で危険だ、魔力の操作を誤れば魔法陣は正常に作動する事無く誤作動や爆発、魔力の暴走で死の危険さえ生じる。

自身の魔力操作さえ難易度の高く、小さな火や水滴程度なら兎も角、火炎放射機の様な火力や消防車が放つ水圧などの魔法を発動するとなると一瞬の気の緩みも許されない細心の注意が必要なのだ。

その為、制御の難しい自身以外の魔力を扱う事は理論上不可能ではないが、実際は誰も扱う事が出来無いのだ。

「……以上です」

「ふむ、そんなところか」

少女師匠は俺の話聞き、少し待っておれと言いつつ何かを考えている。今日の少女師匠は考えてばかりだ、昨日は俺の話をただひたすら新しい事を知る喜びで丸く輝いていた目が少し細目になって顎に手を当てている。

「まあだいたい黒野が知っている事で問題ないだろうな」

「そうですね、一度間違えて覚えてしまったら覚えなすのは苦労するので良かったです」

「そうじゃな、さて早速始めるかの」

少女師匠は手を叩いて立ち上がる。

その一瞬で何かの魔法を使用したのだろう、一瞬光の粒みたいなものが掌からパラパラと落ちたと思った瞬間、どこからやって来たのか雑巾とバケツ、竹ぼうきの様な物が俺の目の前に現れた。

「黒野、この家の全てを掃除してもらう、私の書物には触れるでないぞ」

「え……掃除ですか？ それと魔法とはどういった関係が」

「関係などある訳無かろう、タダでお主に魔法を教えてやり、金を渡すとおるのか？ そんなお人好しな人間などこの世には存在しない、さっさと働け」

こうして俺は魔法使いになる為に少女師匠との10日間が始まる。

11話 魔力

少女師匠が暮らす家は大きくは無い、日本の一軒家程度だが構造が複雑だった。

日本ではありえないような場所に階段があつたり柱が無駄に多かった。日本の様に優れた建築士がないのか、それともこの少女師匠がこのような間取りを望んだのかは分からないが掃除が大変なのはどうかしてほしい。

やたらと角が多く丸まったところ、小さな隙間が多いので箒を何度何度も動かさないと溜まった塵がとれないし、拭き掃除も隙間の奥まで手が入らない。

そもそも俺は掃除が得意では無かった。部屋が汚いわけではない、部屋を汚さないからだ。

日本で大学生としての一人暮らしをしていた頃は家具全般とノートPCと小説と大学で必要な教材だけだった。

毎日やる事と言えば大学のレポートを黙々とこなして、終わった小説を読んだりPCで小説を読んだり……、今思うと家では食事洗濯と小説しか読んで無い悲しい生活をしていたかもしれない。

まあそんな事はどうでも良いだろう、そう掃除と言えば学校での掃除や本棚にたまつたほこりを払うことぐらいしかやった事が無いのだ。

だからいきなり掃除しろと言われた俺は初めての大掃除に大苦戦していた。

「終わらない……、このままだと掃除だけで10日間が過ぎてしまう」

実際に掃除で10日間をすぎる事は無いだろうが一人で黙々と掃除をしていると独り言が多くなってしまう。既に掃除を初めて3日

目なのだ。

そもそもこの家には物が多すぎだ。この世界では貴重な書物が無造作に積んであったり、奇妙な物置や不気味な人形や可愛いぬいぐるみ、謎の植物が入った花瓶。

どれを見ても統一性無いものばかりでなぜこのような場所に置いてあるか分からない物ばかりだ。一日中掃除しているとこの部屋自体が俺には理解できない芸術ではないかと思うようになってしまった。

そして掃除中最も嫌なのは俺に掃除を言い渡した張本人だ。

掃除中なにかと俺を呼び出しては他の仕事を押し付けたり掃除に文句を付けてくるのだ。

これが姑に苛められる嫁の気分なんだろうか、全く気持ちよくない。どれだけ頑張っても言われる事は否定だけで更に押し付けられる仕事。

特に言いつけられるのは年下にしか見えない女の子。見た目は関係ないと思ってても流石に3日間何度も文句を言われ続けるとストレスは蓄積していくものだ。正直に言う又何故あんな女の子に命令されて掃除を延々とさせられなきゃいけないんだ……。

心の中で愚痴っているとストレスの現況が現れた。

「掃除の状況はどうじゃ？」

「今、一階の埃を全部落として掃き掃除が終わり拭き掃除に移るところです」

俺は意識しないと表情があまり大きく変化しない、声が変わらなければ怒っているのか笑っているのか分かりにくいので自分がどう思っているかこの少女師匠には伝わらないだろう。

この何を考えているか分からない無表情スキルはあまり良い方向に作用しないので久しぶりに活躍した。

「そうか、では拭き掃除の前に庭の草むしりと花に水やりをしておけ」

「……分かりました」

自分では温厚な性格だと思っていただけどころそる限界なのかもしれない、握っていた濡れ雑巾から水滴が落ちる。自分でも奇妙な笑みがこぼれた。

少女師匠が俺から離れた事を確認し、たまったストレスと言葉を一緒に吐き出す。

「……今日のうちに全部終わらせてやるよ」

俺はその瞬間から自分の中の何かが壊れた様に動き出した。

早さ自体は少ししか変わっていないが、今いる空間の細部まで注意して見る事で様々な所の掃除まで同時に行った、絶対に今日で掃除を終わらせてやる。

気持ちだけでは無い、頭の中は意外と冷静だった。冷静であれば大抵の事は上手くいく、ストレスがたまって頭が可笑しくなりそうな時ほど、冷静にそして力任せにはしない。

ストレスを吐き出す方法は怒りだけじゃない、上手くエネルギーに変えて効率よく作業をこなしていく、既に2日間この家の掃除だけをし続けていただけあって部屋の物の場所や位置は把握していた、後は無駄のない動きでこの家を攻略する。

「お、終わった……」

既に日は沈み、青い月が綺麗に輝いていた。

集中力は既に切れていた。人間物事に集中出来る時間は無限ではない有限だ。途中でエネルギー源だったストレスすらも消費しつくしてしまった。

今の俺は精神面で疲労しきっていた。体力面ではまだ余裕があったが何も考えなくなかった、精神的に疲れるとお腹も減るし眠くなる。

「寝る前に報告しないとな……」

フラフラと身体少し揺らしながら少女師匠の部屋に向かいドアをノックする。

入れという声と共にドアが勝手に開いた。一々魔法を利用するのは普通に身体を使うより精神力、魔力が消費されて効率が悪いはず、何故ほとんどの作業を魔法で行っているのか？ それも移動以外の動作を魔力で補うのは相当魔力の量が必要になる筈、この小さな体にどれだけの魔力が秘められているんだろうか……。

「どうした？何を黙っておる」

俺が少し考えていると大きな椅子に堂々と座っている少女師匠が声をかけてくる。

「すみません、少しボーっとしていました」

「まああれだけ集中力を持続して掃除をしていれば疲れても可笑しくないか」

「見ていたんですか？」

「当たり前じゃ、黒野がどれくらいの集中力があるのか確かめておったからのう」

そう言つて、今までの俺の行動していた場所を周囲に映し出す。監視カメラの様な映像化魔法なんて聞いたことが無かった。それも何個もの映像を常時再生し続けるだけの魔力の量がどれくらい必要なのだろうか想像もできない。

「そうだったんですか、ですが何故私の集中力を試すような事を？」
「集中力は魔法を使用するのに一番必要な能力だからな、黒野は良い線を言っておるぞ」

「では、やつと俺に魔法を！」

「そうじゃな、では明日から魔法に付いて教えるでしょう、今日は早く寝るのじゃ、魔法は集中力が無いとどうにもならんからな」

俺は撮み出される様に中へ浮かび部屋から追い出された。一般人と魔法使いの差を実感しながら疲れ切った俺は何も考える事も無くベッドにダイブして意識が切れた様に睡魔に身を委ねた。

朝、目が覚めると寝る前と違う場所にいた。

ベッドから落ちていたとか、寝像が悪かったとかそういうレベルじゃ無かった。目が覚めた場所が空中だったのだ。

「……浮いてる」

身体を動かす事は出来るが地面に足を突く事が出来ない、空中で身体を動かしている姿は他者から見ると滑稽だろう。そう思い俺は直ぐに我武者羅らに動くのを止めて浮かせた張本人を探す。

「諦めるのが早いな、もう少し抗っても良いんじゃないかのう？」
「浮かせている張本人が何を言っているんですか、それもそれを見て笑っているじゃないですか、私は見世物になりに来たわけじゃないですよ？」

俺はクスクスと笑っている少女師匠を見て少し怒った口調で話す。

「まあ楽しむためにお前を浮かせた訳じゃない、これが黒野、お前の試練じゃ」

「試練ですか？」

「そうじゃ、お前に使っている魔法は私以外の魔力の干渉によって解除される様に出来ている、まずは私の魔力を感じて魔力の存在を認識する。そして自分自身の魔力を操作し私の魔法を解除するのじゃ。自分の意志で魔力を放出するだけで簡単に解除できるから頑張るのじゃぞ」

「え、魔力を感じるってどうやって……」

俺の最後の言葉を無視して視界から消えてしまった。空中に浮いた俺を何処かでまた遠隔操作映像化魔法を使用して俺を見ているんだろう。

「さて、どうするか」

何処かで監視している師匠の事を考えている暇は無い、早く何とかして魔法を解除しないと、いつまでたっても浮き続けている羽目になってしまう。

まずは冷静にならないいけないがそう思っても簡単には行かない。空中で浮いている状態というのは今まで経験した事の無い状況だ。そう簡単に冷静に対処できるはずが無い。

落ち着こうと考えていても実行できない、その気持ちにまた俺を焦らせて落ち着けない、まずはこの悪循環をどうにかしないといけない。まずは深呼吸だ、呼吸を整えて身体を落ち着かせる、頭は混乱していても身体の方はまだ対処できる。

空中で寝た状態を維持したまま身体を動かす事は止め、考える事だけに集中する。

未だに今のありえない現状と焦りで考えが上手くまとまらないが、

出来るだけ一つの事を考えようと意識する。まず考える事はこの魔法を解除する為に魔力を感じる方法だ。

「でもどうすればいいんだ……」

魔力なんて地球には存在しなかった物をどうやって感じれば良いんだ……。

正直、無理だと手を挙げて降参したいところだが、そうしてしまうともう魔法を使う事は出来ないかもしれない、投げ出したい気持ちを抑えてまずこの世界の魔力について知っている情報を整理する事にした。

魔力はこの世界の何処にでも存在する物だ。空気と同じ又はそれ以上にありふれた存在と言っても良いだろう。だがそれを認識する事は出来ず、感覚のみで扱わないといけないがその感覚を掴んで扱えるのは魔法使いだけだ。

魔法使い以外で魔力を感じられるのは上級者の戦士や共鳴歌手だけだ、それだけ魔力の存在はこの世界のありふれてはいるが一般人から離れた存在なのだ。

「あ……これ今日の間に地上に降りられるのか？」

魔力を感じるって思っていた以上に難しそうだ。吐き出しそうになったタメ息を飲み込んで前向きに考える。今は落ち込む時じゃない、絶望的でも絶体絶命でも無いただ攻略までの道のりが険しいだけのだ。

それも今の環境は全く悪くない、少し師匠の性格が歪んでいたりするが、この世界で生きていける環境と魔法を学ぶことの出来る環境が揃っている。

これは確実の他の召喚されて来た人達に比べ確実に良い条件が揃っている筈だ。それなのに状況に甘んじている訳にはいかない、強

くなる為に一刻も早く魔法を自分の物にしないといけない。

「よし、悪くない。頭の中の整理は出来た、後はこの問題をどうやって解決するかだ」

言葉に出して気持ちが落ち着いているかを確認する。思ったより冷静になれたようだ。

だが思いのほか時間が経っていた。この世界に正確な時計は存在しないが太陽の位置を見ればある程度の時間の経過が分かる。

この世界の太陽は地球と同じように動いているはずだからもう昼に近付いていた。朝食を食べていないのでそろそろお腹の空き具合もヤバくなって来ている。

魔力がどんな物か分からない今、自分が知っている魔力という物をイメージする。身体から湧き上がるオーラや、溢れ出るような黄色い炎など、漫画やアニメにある様な存在しないエネルギー素材をイメージする。

時には全身に力を込めて唸ったり叫んだり、時には全身の筋肉を脱力して無心になり身体から魔力が出てこないか試したりしたが全く無反応に終わる。

昔、小・中学校で考えていた事と同じような事をしている自分が重なって恥ずかしくなり顔の温度が上昇したが止めるわけにはいかない。

それから数時間経って既に魔力を感じたいと言うより早く地上に降りたかった、いや降りなくても良いからこの空腹を満たしたかった。

日は沈みかけ空は赤く染まりつつあり、その間何も飲む事も食べる事も出来ていない為集中どころでは無かった。忠則ではないが何か食べないと何も考えられないし生きていけない……。

俺は朝食から始まる人間だ。朝を抜くとその一日は絶対に好調で

は無い。今日もその日だ、集中力は昨日の半分以下だったし時々頭がくらくらしていた。

感覚は鈍くなり無駄に力を入れない様に脱力した。空中に浮いている状態だから足と手が下に垂れて空をただ見上げていた。

「朝食さえ食っていれば昼も夜もいらないのに……朝食を食べないとか死ぬ」

そろそろ晩御飯の時間だな……、色々身体を動かし続けたおかげで身体の動きは鈍く動かしたくない眠いけど空腹で寝れない。もう何もしたくない、ただ栄養を身体に補給したい。

でもただ朝食を抜いただけでこんなにも身体がだるくなるのだろう……、今思うと可笑しいかもしれないがそんな事を考えるのも億劫になってきた。身体が浮いている筈なのにとっても重い、頭が痛くなってきた。

何故かイライラしてきた。身体が自分自身の異常にストレスを感じたのだろうか、昨日の様に集中力はもう無い、体力もあまりなかったが動かせない程ではない。

「多分これで上手くいかないと気絶するな……」

俺は残りのエネルギーを振り絞り力を入れようとした瞬間。押しつぶされる様な感覚が俺を包み込んでいるのが何となく分かった、空気圧に似ている出似ていない、水圧に似ているようで似ていない何かに圧迫されている感覚が何故か感じ取れた。

「……………」

俺はその瞬間脳裏に電撃が走った様な感覚が生まれた、身体が何かを認識したのだ。

そしてその感覚が自分自身の中にも存在している事も同時に理解した。身体の中その存在は操作可能だ、自分自身で自由に扱える。その存在を少し掬いあげる様に持ち上げて身体の外に放出した。身体を圧迫していた存在は消え浮いていた。

……そして身体は地面に急落下した。押しているその瞬間走馬灯のようにゆっくりと時間が流れている様に感じた。

……ああそういえばこれが魔力を操作すると解放されるんだっけ

疲れ切った頭の中で今日の朝聞かされた言葉を思い出して地面に叩きつけられた。

——ドスン！

解放感と疲労感と背中に走る激痛で目の前がぐらぐら揺れる。その瞬間今日の朝見た少女師匠が視界に現れて何かを喋っているが意識がハッキリしていない為聞き取る事が出来ない。俺は最後の力を振り絞り言葉を絞り出す。

「師匠、ご飯が食べたいです……」

俺はその瞬間目を閉じて意識を失った。

12話 料理

気絶した次の日は魔法について何も触れる事は無かった。

朝起きて自分でも驚くほどの量のご飯を食べてまた死んだように眠った。次に目が覚めた時は既に日は沈みきって少女師匠は寝ているだろう時間だった。

身体に異常は無く元気になった。だが既に夜だった為やる事が無かったのだ、明日に支障をきたすので成る為にも外に出て身体を動かすことにした。

この数日間この家の敷地内から全く出ていなかったので解放された気分になった。涼しいとは言えないが服がなびく程度の風が吹き心地が良い。

念入りにストレッチをして呼吸を意識する。これは忠則に教わった運動方法だ。呼吸と伸ばす筋肉を意識してゆっくりと身体を動かす。30分以上ストレッチに時間を掛けるとそれだけで全身から汗が吹き出して良い運動になる。

その後、軽く走って各種筋トレを行い更に汗を流す、呼吸を出来るだけ整えて筋肉が疲労しきるまで身体を動かし続ける。俺は忠則の様に無尽蔵な体力と規格外の筋肉を持ち合わせていないので直ぐに限界を迎える。

身体を動かしたのは1・2時間程度だろうか、井戸の水を使って汗を流す。この国は水に不自由しない国なので本当に良かった。毎日身体の汗を流さないと気持ち悪くて仕方ないだろう。

運動を終えて少し散歩をする事にした。一人の夜と言うのは何となくセンチメンタルになる、今までの展開が早すぎて感覚がマヒしていた分、更に不安な気持ち押し寄せてきた。

——何故この世界に俺達は召喚されたのだろうか？

——この世界で生きていけるのだろうか？

——俺達は元の世界、日本に帰る事は出来るのだろうか？

これ以外にも家族、他の友人や学校。様々な疑問や不安が押し寄せて俺を押し潰そうとしてくる。仲間がいないと俺は小さな存在だ。この世界で直ぐにあかりと忠則に出会えて本当に良かった。

一人だったら俺は未だに何もできずに教会で寝泊りをしていたかもしれない。仲間がいるから頑張ろうと思えるのだろう、忠則の馬鹿な言動や行動をみて笑い勇気付けられ、あかりの静かなツツコミや天然なのか狙ったのか曖昧なボケに対して俺が突っ込む。

そんな何気ない毎日をこの世界でもやれるから俺は今まで頑張っていたいこうと思えたのだろう……。

感傷に浸ると、涙腺が緩くなって目の前がにじんで見えるから良くない。そろそろ身体の火照りも覚めてきたし明日に備えて練習しよう。

俺は明日に備えて布団に入り再度決意を固めて静かに眠った。

6日目の朝を迎えた俺は本格的に魔法を少女師匠に教えてもらう事になった。師匠は俺が思っている以上に教えるのが上手かった。記憶が曖昧だが4日目に魔力を感じれる様になったので次は魔力をコントロールする練習と魔法陣を構築する勉強をした。

魔法陣の構築はプログラミングに似ていた。魔法陣には様々な指示を与える事が出来た。基礎となるのは魔力を別のエネルギーに変えるプログラム。

風、炎、水など自然の物に変換しそれ进行操作する魔法だ。この基礎が出来ないと他の魔法陣を扱うのは不可能なくらい難易度が高い。この程度の魔法を無意識で行える世にならないと魔法使いを名乗る事が出来ないそうだ。

「……出来ない」

俺は魔法使いを名乗れるのか心配になって来た。自分の魔力を上手く扱えない。

魔法陣の構築は初級の形なので難しくは無いが、魔法陣の形は円形の為、絵を書けない俺は綺麗な丸が書けない。何度も書き直して数分後やっと一つの魔法陣を書き上げる事が出来た。

この世界の紙は貴重だ、俺は地面に何度も何度も木の棒で魔法陣を書く練習をしてその地面の魔法陣に魔力を注ぐ。

魔法陣となる物は形さえしっかりしていればどのような形状でも問題が無い、神の上でも地面に書いても壁に書いても頭の中で描いても全く問題が無い。

問題なのはその魔法陣に上手く魔力を注ぎ込めるかだ。

書かれた形に沿って魔力を流し込み形を形成し発動を促す。そしてその発動をイメージするのだ。魔力を上手く流し込んでもイメージが確立されてないと発動は失敗する。逆もそうだ、イメージが出来ても魔法陣に均一に魔力を流し込めなかったり、発動の瞬間を間違えると失敗するのだ。

そして怖いのは失敗の結果だ、全くの無反応なら問題が無いのだが、結果によっては暴発したり魔法陣が暴発してしまうかもしれないのだ。

「……とっても痛いです師匠」

「人間が使える魔法の中に治癒魔法は存在しないのじゃ、そして私は共鳴歌を歌う事は出来ぬ、諦めるのじゃ」

切り傷や小さな火傷を腕に沢山刻み巻いている布が赤く滲んできている。

魔力は上手く注げないし、一定の形を保ってくれない、一気に流し込み形がぶれる前に発動しようとしてもイメージが間に合わなかったりばやけていたりして爆発しかない。

魔力を無駄には出来ないのもやみやたらに発動を繰り返す事は

出来ない、魔力の枯渇は死を意味するからだ、魔力の枯渇で似ぬ魔法使いは少くない。自分の魔力の量をしっかりと把握して正確に管理しないといけないのだ。

でも俺が魔力の枯渇を心配するのはまだ早いだろう、少量の魔力で発動できる初級の魔法で暴発と爆発を繰り返し身を守る為に無意識に防ごうとする腕がボロボロになり魔法陣を書ける様な力を出せなくなっている。

まだ日は沈みかけで時間はあるが俺は続ける事が出来そうにない、師匠に腕を見せて包帯の代わりになる物をもらい川の水で洗い流して布を巻きつけて怪我が悪化しない様に防ぐ。

魔法の基礎を教えて貰えたが全然進歩の無い自分が情けなくて嫌になる。

腕のチクチクやヒリヒリする痛みに耐えながら魔力操作の練習を始める。

魔力の操作は練習を重ねれば身体の一部の様に動かすことが可能になるようだ、今は何かに抑えつけられている様な重くて扱いにくい感覚だが少しずつ軽くなっていくのだそうだ。

身体の中にある魔力を意識する、俺の中に存在する魔力は無色透明で無味無臭だ。暖かいわけでも冷たいわけでもないし感触も無い。でも何故か感じる事が出来るのだ、どうして魔力の説明が上手く出来ないのかこの時よくわかった。魔力を表現する方法が無いのだ。そう魔力は五感で感じる事は出来ないから文章や言葉で表現できない。

あえて言うなら第六感で感じているのだ。触れる事も見る事も出来ないのだがそこにある事だけは分かるのだ。

それを自分の意思で動かすのだ。この操作も手や口で動かすのではなく意志だけで操作できるのだがその方法も上手く説明はできない。この世界の物を地球の言葉だけで表現が出来ないのだ。

ベッドの上でリラックス出来る姿勢をとり集中する。身体の魔力

の位置を動かしていく左右上下回転……出来るだけ魔力が体内から洩れない様に。身体から漏れ出した魔力は操作が出来なくなる、自分の魔力ではないからだ。

感じる事は出来るが自分の物で無い魔力を操作するのは空気を手で掴んで集める位不可能に近い。だから魔法使いは自身の魔力が少ないとなれないのだ。

「予想以上に疲労するな……」

首筋に汗が滲みゆつくりと肩に落ちていく、身体は一切動かさないが体の内部の魔力を操作するのは精神力と集中力を根こそぎ奪っていくまだ魔力を身体が認識して3日目だからだろうか、馴染めないうちかあまり身体が魔力の存在を受け入れていない。

たった十数分で頭痛がして操作して纏めていた魔力が体内の隅々に放散した。身体が魔力を受け入れるまではあまり無理をしない方が良くと師匠に聞いたので今日は明日に備えて練る事にした。

7日目も昨日と同じ魔法陣を組み立てて魔力を流し込み発動する練習を重ねた。だが全く成果は薄く更に腕に傷を刻みつける事になった。一つ一つの傷は薄いとその傷が大量にあつて傷の上に傷を重ねると流石に顔が歪んでしまう。

師匠は俺が聞けばアドバイスをくれるがそれ以外はずっと俺の練習を見ていた。何かを考えているようだ俺には何を考えているか分からないので気にしないで練習に集中する。

マッチ程度の火すら発動できず小さな爆風で何度も怪我を負った腕がそろそろ耐えられなくなって来た時、師匠が口を開いた。

「今日はもう終了じゃ、このまま続けてもお前の腕が壊れるだけじ

や」

「でもまだ時間が……」

「黒野は自分の腕を傷つけるのが付きなのか？」

「そんなわけ無いですよ」

「じゃあ良いじゃないか？ 黒野に仕事を与える」

少女師匠は俺に銀貨を数枚渡してきた。

「黒野の世界の料理が食べたい、この世界にある材料で代用して作ってみよ」

「俺の世界の料理ですか？」

「そうじゃ、そもそも黒野お前一昨日から仕事も何もせずただ飯を食っておるんじゃ、料理くらいして当り前じゃ」

「いや、料理は全然かまいませんが、自分が食べたい物を作っても良いのですか？」

「うむ、美味しければ問題がないぞ」

「分かりました！ では行ってきます」

俺は腕の痛みには耐えながらも意気揚々と家から飛び出した。

まだ時間は昼過ぎたばかりでたっぷりあった、そしてこの世界には主食としては流通してはいないが米に似た食べ物も存在する。お金も相当余裕がありそうだ、異世界の食べ物で代用が効く物を確認もできそうだ。

「久しぶりにあれが食べられる」

俺は読書以外にもう一つ趣味があった。それは料理と言うには限定されすぎていてあまり人には言えなかった。ある料理を作るのが大好きなのだ。

召喚初日に歩いた商店街に向かって走る。同じ物は作れないかも

しれないがそれに近い料理は作れるはずだ、小説でも同じ調味料や日本にある似た食べ物は良く紹介されていたし、商店街で見た限り必要な材料は大抵揃っていた筈だ。

商店街に着いてまず一番重要な材料を探す。

「トマトと卵……卵は昨日食べたばかりだからあるはずだ」

トマトが無ければあれが作るのが困難になる。一応無くてもできるがやはりあった方がよい。俺は色々なトマトに似た食材を少しずつ買って食べ比べてみる。

色が赤で形がトマトに似ていても全く味が異なる物や、緑の野菜の様でトマトに似ていて甘く美味しい食材があつて初めての食べ物とは抵抗はあつたが色々食べ比べているうちに慣れてきた。

どの野菜も新鮮で美味しかった。その中で少し苦味のあるオレンジ色のトウタムと言う食材と、甘みの強い黄色のエンバクトムと言う食材を見つけた。どちらにするか迷つたが、苦味があると少し問題がある為に黄色で茄子の形をしたエンバクトムを使用する事にした。

次は鳥肉と卵だ。この世界には鶏がいないがそれに似た鳥と卵はあつた。肉を味見する事は出来ないので店主に出来るだけ肉の長所と短所を聞いて良さそうなエインライトと言う少し高めだが鳥肉と卵を選んだ。

次にタマネギに似たノイオンと言うネギ科の食材と料理に合いそうなキノコを数種類購入した。ニンニクが何故かこの世界にも存在していたのが驚きだった。全く同じ食材はこの世界では結構珍しい発見だ。

調味料は専門店があり、俺が料理の説明をすると興味を示してくれたのか俺が言ったような調味料とハーブと香辛料を教えてくれた。この世界は様々な食材や調味料が存在しているが腕利きの料理人が少ない。大抵の料理は焼いた肉や野菜に塩と他の調味料で味付けを

したり、煮込んだりする簡単な料理や調味料と香辛料を生かしたスープだけだ。

まあこの世界のスープは調味料と香辛料の種類の多さを生かした様々なスープがあり、一種の薬の様な役割をする物までありスープだけなら漢方薬並みの種類はある。だからこの世界を回れば様々な料理の種類が少ないわけではないがやはり地球に比べると料理の種類は少ない。

だから今日作る料理の様にソースを作る様な事は無いのだ。商店街での買い物は思ったより早く終わった、この国は海が近くに無いため魚介類はほとんど見当たらないがこの土地の環境で様々な野菜や家畜が育てられるので今日必要な食材が揃っていたからだ。

更にこの世界には保存方法が常温保存のみなので基本的に食品はついさっきまで生きていた新鮮な肉の筈だ。

俺は買い出した食材をもう一度見直してから直ぐに少女師匠の家に向かった。家に着くと俺は一度手に巻いていた包帯が割の布を外し痛みには耐えながら手を洗う。

料理前は血のにじんだ手で料理なんてできないので川の水でしっかりと血と汚れを落としてキッチンに向かう。

「コンロが無い……いや、何も無い」

キッチンに向かうとそこには何もなかった。

そりゃ日本の様に冷蔵庫やガスコンロやシンクなんてものは無い事は分かっている。だが、そこにはまな板と包丁が置いてあるだけだった。掃除の時なぜ気付かなかったのだろうと今さら後悔しても遅い……。

「帰って来たか、なにを買ったのじゃ？」

キッチンで立ちつくしていると少女師匠がひょこつと頭を出して

俺に話しかけてきた。俺の反応が無かったので少女師匠はこちらに来て俺が持っていた籠に入った食材を見て何が出来るのか考えているようだ。

「師匠、今俺が作ろうとしている料理なんです……」

「おう、なんじゃ？ なにを作るのじゃ？」

「すみません、作れないです」

「なぜじゃ！？」

そして火の温度を調節する事が出来ないのは分かっていたが、コンロその物が無いとは思っていなかった。水道も無いため水を汲みに行かないといけないし、その他調理器具がほとんどないのであれを作るには絶望的だった。

俺は少女師匠に料理の説明をする、少女師匠は調理する工程を聞いてふむふむと頷いた。

「それなら任せるのじゃ、私が料理の手伝いをしてやろう」

「え？ 何をするんですか？」

「私が食材を加工したり調理の忠助祖してやるのじゃ、黒野が言った事なら全て魔法で代用可能じゃ」

少女師匠はその場で水を出したり火を出してその火の大きさを色々調節して見せたりした。

「これで問題無いじゃろ？」

「はい！ 大丈夫そうです、やりましょう！」

俺は少女師匠の魔法に感謝して料理を始める。料理に魔法を使うと言う発想が無かった俺には暗闇にいきなり光が射したように希望が生まれた。

まず、大きな鍋で米を炊く。師匠の魔法陣が電気コンロの役割をするのでとても便利だ。新しい料理が食べられるのが楽しみなのか、今までで一番の笑顔で俺の料理を手伝ってくれる。

トマトの代わりのエンバクトムを水洗いして別の鍋で軽く茹でて皮をむく。タマネギに似たノイオンをみじん切りにしてすりおろす。ノイオンはタマネギと違い涙が流れるような成分が無いようだ。いつもタマネギに泣かされる俺は日本にもこのノイオンがあれば良いのんじゃないかなと切り終える。

ニンニクと塩、砂糖の代わりに蜂蜜に似たランシロップと言う蜜と各種スパイスを準備する。

「師匠さっき俺が言っていたのをお願いします」
「うむ、任せるのじゃ」

エンバクトムとノイオンを鍋に入れて師匠に渡す、少女師匠は鍋の上に魔法陣を描き魔法を発動する、すると鍋の中のエンバクトムとノイオンが勢い置く周りすりつぶされていく。そうミキサーと同じ役割をしてもらったのだ。

どうじゃ！と自信満々に俺に見せると上手くミキサーの様にこす事が出来ていた。俺は少女師匠に感謝をしてそれをそのまま火にかけるとろろになるまで煮詰めていく。

最後に準備した調味料とスパイスを加えて更に数分煮込む。スパイスの中に唐辛子の様な真つ赤な物がありに混ぜていくと黄色から赤の濃いオレンジ色になってきた。

「出来ました！」
「ほう、これがケチャップと言う物なのか」
「トマトケチャップと言いたいところですが、これはエンバクトムで作った物ですからエンバクトムケチャップですね」

少女師匠が小指で味見をしている間、俺は大量のケチャップを瓶に詰めて師匠に冷蔵保存する事を説明する。少女師匠に説明し大量の氷を用意してもらい簡易冷蔵庫を作ってもらった。

次は、エインライトの肉を解体する。エインライトはスーパーに並んでいる様な加工されえいる様な物じゃ無くて丸焼きに出来る様な状態で売られていたので最初分からなかったが試行錯誤して何とかも肉を加工する事が出来た。

フライパンにバターを入れて鳥の皮を最初にじっくり焼いて油を出す。その後も肉を加えて炒める。もも肉に火が回り 先ほどみじん切りしたノイオンを加え更に切ったキノコを加えて火が通るまで炒める。

色が変わって着たら先ほど作ったケチャップを加えてかき混ぜながら煮詰めて水分をある程度飛ばし炊きあがったご飯を混ぜる。

ご飯が綺麗に混ぜ合つと綺麗なオレンジ色のご飯が完成した。

「ライスをこんな風に調理するとは面白いな、美味しそうじゃこれで完成か？」

「いえ、最後の仕上げ行きますよ、今回はふわふわとろとろにします」

俺は卵を割り卵に空気を含ませるように良くかき混ぜる。フライパンにバターを入れて全体に広げ卵を投入する。強火熱して混ぜながら混ぜてとろとろの間に火を止めフライパンをトントンと動かして上手く卵を丸める。

「おお！ 面白い卵焼きじゃ」

「出来上がりました！ テーブルに持っていくので一緒に食べましょう」

「うむ！」

テーブルまでテコテコと走っていく師匠を横目にお皿の上にオレンジ色のご飯を盛ってその上に卵をゆっくりと乗せる。それを崩さない様にテーブルまで運ぶ。

「師匠お待たせしました。オムライスでございます」

「良い匂いがするのう、オムライスと言う名前なのかとっても綺麗で美味しそうじゃ」

俺は席に着くと卵の真ん中に切れ目を入れてチキンライスをとると卵で包んだ。それに気が付いた少女師匠が目をキラキラさせて声を上げる。何というか見た目通りの反応で可愛い。

「黒野何じゃそれは！ 卵がとろとろしておるじゃないか」

「卵の真ん中に一本の切れ目を入れて開くんですよ、やりまじょうか？」

「いや、自分でやる」

少女師匠は慎重にスプーンで切れ目を入れる、その表情は真剣で少し手がプルプルと震えている。これはどう見ても小学生だ。オムライスが大好きな小学生にしか見えない。そんな事を考えていると師匠は綺麗に卵を開けた様で、とっても満足な笑顔で俺を見た。

「どうじゃ！」

「はい、とても上手です、ではそこにさっき作ったケチャップをお好みの量をかけてください」

俺はお手本として真ん中から少しずらして一般的オムライスの形をイメージしてケチャップをかける。師匠も俺を真似して同じくらのケチャップをかける。

「これで良いのか？ もう食べてよいのか？」
「はい、では頂きましょう」

この世界では食事の前は手も合わせないし神様にお祈りもしない、ただ頂きますと食べ物にありつける事に感謝をする。

「美味しいぞ！ このオムライスと言う料理。卵がとろとろでこのケチャップとやらと言う物と合っている。黒野がこんなにも美味しい料理が出来るとは思っておらんかったぞ」

「俺が作る事の出来る料理はこれだけですけどね、それ以外の料理は一切できないです」

「それでも凄いぞ黒野！ 掃除なんかさせないで最初からこのオムライスとやらを作らせればよかったわ、これは毎日食べたいの」

少女師匠は今前見た事の無い満面の笑みでオムライスを食べていた。今まで俺を雑用の様に扱い丸一日空中に浮かせたまま放置とか残酷なほど酷い修行を行う人間が嘘のように少女の顔をしていた。どちらが本当の姿なのか分からないがこの笑顔は本物だろうと思えた。

俺もオムライスに手を付けると、思っていたより良い出来だった。日本とは違う食材でも代用できて本当に良かった。俺自身が大好きなオムライスだけは自宅で何十種類も作ってきたのでそれを生かす事が出来て本当に良かった。

俺がゆっくりと味わっていると一度スプーンを置いて口を開いた。

「よし、決めたぞ黒野、此処にいる間お主は色んなオムライスを作るのだ」

「え！ ですが魔法の修行は」

「魔法なぞ一日中やるものじゃない、どうせ黒野の今の状況じゃ昼までに腕が限界を迎えるわ、それに魔法がたった数日で出来ると思

うな。黒野の場合、魔法が使えるようになるまでに最低でも後10日はかかるじやろうな」

「そ、そんなにですか」

「師匠の言葉が信じれぬのか？ 魔法の修行は無理をすると死に至るのじゃ、急ぐ事じゃない。それよりオムライスの方が重要じゃ」
「……はい」

こうして俺はこの10日間で魔法の練習を続けるも発動する事は出来ず、最後はデミグラスソースのオムライスを作って笑顔の師匠とお別れをする事となったのだった。

13話 集合

「遅いわよ」

10日前に約束していた集合場所に到着すると懐かしい声が怒鳴ってきた。

俺が到着する前にギルド前には忠則とあかりが俺を待っていた様だ。忠則はでっかい焼き鳥の様な物を食べていつもの様に笑顔で何を考えているか分からないが楽しそうだ。

だがその隣にいるあかりはあまり機嫌がよくない様だ。

「時間は指定していなかったんだ。それにまだお昼じゃないか遅くは無いと思うぞ」

「知ってる？ 女性が怒っている時にそうやって言い訳を持ち込むと嫌われるわよ、ちゃんと謝らないから黒野は彼女出来ないのよ」
「ご、ごめん」

これはとても怒っている状態のあかりだ。何故こんなに怒っているか分からないが、これはまずい。俺は何故こんな状態になっているのかアイコンタクトで忠則に尋ねようとするが、忠則はこっちを見ていなかった。あかりに直接聞くと逆鱗に触れそうだ。

俺はあかりを対処しつつ何気なく忠則に近寄って今の状況を聞く。

「なあ忠則、何であんなにあかりはご立腹なんだ？」

「ん？ おお黒野、久しぶりだな。何時来たんだ？」

「質問を質問で返すな、と言うか俺が来た事に気が付いてなかったのか……」

「すまん、すまん。この串焼き鳥が上手くて夢中になってたぜ」

忠則と通常の会話を行うのは少し時間が掛かるのは前からの事だ。忠則と会話するにはある程度忍耐力が必要だ。高校時代忠則との意思疎通の困難さをこの忠則で学んだ俺は大抵の人との会話が可能になった気がする。

「まあ此処に居ても意味が無いし、今日は宿を探して今後の話をしないか？」

まだあかりがイライラしているが、この場であかりの機嫌を取るのには難しいだろう。それなら適当に場所を移してあかりの好きな甘い物でも餌付けすれば大抵上手くいく。

俺はまだぶつくさ言っているあかりと串焼き鳥を食い続けている忠則を何とか行動に移させて宿を探す。

この世界は旅人や商人。雇われ戦士が多いため宿屋の数は多いがやはりこの世界に俺以外にも何人もの召喚された人がいるため満室の宿が多かった。

俺が宿屋を探している間、あかりは予想に反して愚痴を言わず、何故か少しずつイライラが収まってきている様だった。基本的に爆発的に起こってストレスを貯めない性格のあかりは別に珍しい事ではないが、理不尽に怒りを押しつけて来たのは納得がいかない。俺は歩きながら少し時間をかけて忠則との対話に成功させた。

「なあ、さつきなんであかりはあんなにご立腹だったんだ？」

「あれだ、俺が来た時に男が集まってたんだ。依頼系ギルドは圧倒的に男が多い、その前に一人で立ってたら声掛けられて当たり前だな」

「そういう事が、この世界にも難破する人間は居るよな、まあ男に言い寄られて喜ぶ人間じゃないからな、あかりは」

あかりは俺と忠則以外の異性とはあまり会話をしない。そもそも

基本的に人間より本が好きなのだ。人見知りと言っより他人と関わるのが好きじゃない。

多分、一番に来て俺と忠則が何時までたっても来ない不安な状態で寄って来る男をあしらうのに疲れてイライラしていたのだろう。

俺がギルド前に集合場所を決めたのでイライラの矛先が俺に向かったのか……。一応納得の理由が見つかったので少しだけだがスッキリした。その後、忠則とくだらない会話をして数分歩くとやっと空いている宿屋が見つかった。

「2人部屋をふた部屋取ろう、荷物を置いて明日の準備が出来たらあかりは俺達の部屋に来てくれ、今までの話とこれから話をしたい」

「分かったわ、でも少し時間かかるわ色々やりたい事あるから夜になるかも」

「じゃあ俺達も先にやりたい事やっておくよ」

「そうだな、俺も飯食った分身体動かさないとイケねえしな」

俺らは宿で部屋を取った後直ぐに解散した。俺は忠則と2人で部屋に入り手荷物を置いて部屋から直ぐに出た。忠則は行く所があるらしくまだ俺が行った所の無い方向へ走って行ってしまった。

一瞬追いかけてよと思うたが忠則に追いつくには残念ながら能力値が足りない。確実に見失って迷子になってしまるのが落ちだろう。俺はどんどん小さくなって見えなくなる忠則を見守ってから行動に移すことにした。昨日までの10日間俺は少女師匠の家と商店街を行き来するだけでこの世界の情勢について全く理解していなかった。せめてこの国の事を知らないといけない。

一度ギルドに戻ってこの国の事を詳しく聞いてみるのも良いだろう。俺は今日来た道に戻ってギルドに戻る事にした。

「マジか……」

ギルド前ではあかりのイライラの対処だけで精一杯だったため気が付かなかったが、この国は第一章初代主人公の母国だ。既に主人公はこの国を旅立ってしまったているが、たった数日前までこの国に居たのだ。

もっと早く気が付くべきだった。主人公は旅立つ前に仲良くなった孤児院の子供達を殺されてしまう。俺以外にこの事実気が付く人はいるだろうが、誰か主人公と孤児院を見つけて助かっているといいんだが……。

だが既に事が起きた後だ、もう俺がそんな事を考えていても何かが変わる事ではない、今考えるべき事はこの事によって分かる情報だ。

——この国は後1年の間に崩壊する。

今まで東の国を攻めていったこの戦争国リーディアは、他国との物流に関して積極的に行っていた。リーディアの特産品は戦争の国にしては鉄や銅などの金属ではなく種類豊富な野菜と家畜などの食材なのだ。そのため武器などの元になる鉄鉱石などの金属は保存のきく食料との交換で賄っていたのだ。だが今回戦争はその物流を断つてまでその国に攻めると言うものだった。

前回の戦争が短期間で終わった事を良い事に武器の在庫や保存食が多かった事と、次の戦争も短期決戦で終える事が出来ると思った事が原因だった。

だがそんな考えは甘く、前回の戦争で勝利を治めた要因でもある第一章の初代主人公、ライオルは既にこの国からいなくなっていた。ライオルは指揮官としても最高の逸材だった。兵士達の中にもライオルに尊敬の意を示しておりライオルの居なくなつた理由を知つた数人の優秀な兵士達は戦争を放棄した。さらにライオルが率いていた隊は国の中で最も強靱な隊だった。その隊はライオルがこの国

を見放した途端直ぐに国を去り、更にライオルの父も既に兵隊を引退しており、既に今回の戦争が敗戦になる事を感じて国を去っていた。

王はライオル一人がいなくなる事による弊害がどれほど大きなものか分かっていなかった。戦争が始まって直ぐに前回の戦争とは全く違う事に王は気が付くが既に遅かった。リーディアは直ぐに攻め込まれたった数力月の内に崩壊に至ってしまうのだ。

「戦争が始まる前にこの国を出た方が良いな」

戦争が始まると国の出入りが厳しくなる。偵察と間違われる可能性がある、ギルドで必要なカードでは身分の証明にはならない。このカードが証明できるのは依頼系ギルドと銀行で物を預ける時と引き出す時だけだ。

ギルドは様々な種類の物があるが、この世界で大きなギルドは俺がいるこの依頼系ギルドと商業系ギルドだ。依頼系ギルドは俺達のような安定した職業の無い者が唯一稼げる方法であり戦士達の実力を示す所でもある。

この依頼系ギルドが成立するのは商業系ギルドが存在するからだ。商業系ギルドの大きさは依頼系ギルドの比ではない。商業系ギルドは様々な国の小さな商業ギルドが連盟を組んで統一されているのだ。統一されていると言っても制度が完璧に決められている訳ではなく、ある一定のルール上の規則があり取引の相手を騙して大儲けが出来ない様になっているだけだ。

力があればあるだけ儲ける事は出来るが、力が無くても儲けが無いわけではない様に出来た、とても優秀な商業連盟が依頼系ギルドなのだ。

その商業系ギルドのネットワークを利用したのが依頼系のギルドだ。依頼系ギルドは依頼を聞いて商業ギルドがネットワークを利用し様々な国で依頼が受けられるようになっていいるのだ。

だからこのギルドのカードはギルドでしか利用できないのだ。カード自体に価値はほとんどない。人間と人間の取引でのみ使用するこのカードはカードと本人が居て意味がある物なのだ。

全国で身分証明になる者などこの世界には無い。あるとすればこの世界に一つしか無い物を身に付けて有名になるしかないのだ。俺達にはそんな珍しい物も知名度も無い。早くこの国から出た方が安全だ。

俺はギルドを一回りした後宿の部屋に戻った。部屋にはあかりが居たがまだ忠則は帰ってきていなかった。あかりは新しい服を買ってきたようだ。あかりらしいと言うか何というか、とても地味だった動きやすそうで旅には適した服装だった。

「何処行っていたの？」

「ギルドの方にね、あかりはこの国が何処だかわかっていたのか？」

「あら、黒野は知らなかったの？ てっきり何か行動に移してきたのかと思っていただけ」

「すまない、俺は昨日までの10日間ほとんどこの国を見て回る事が出来なかったんだ」

あかりの機嫌はすっかり良くなっていた。俺に怒っていた事もすっかり忘れていたようだ。俺はあかりと今までの事を話そうとする。忠則が帰ってきた。忠則は身体を動かした後汗を流してきたように汗臭くなく逆にさっぱりしていた。そして待ち合わせの時には見かけなかった背中に大きな剣を背負っていた。

「忠則、それはなんだ？」

「おう！ 良く聞いてくれたぜ。これは俺の武器だ」

「あらカッコいいわ、正に戦士って感じね」

忠則は自慢げに大きく長い長剣を掴んで見せつけてくる。俺には

持つ事も苦勞しそうな大きさの剣だが忠則はしっかり持ち上げて様になっていく。良く見ると忠則の体はさらに大きくなっている様に感じた。

忠則はこの10日間どんな事をしていたのだろうと思うと口は直ぐに開いた。

「なあ2人ともこの10日間どんな仕事をしていたんだ？」

俺は自分の話を混ぜつつ2人の話を聞いた。2人とも俺と同じようにただのアルバイトをやっていた。あかりは病院で想像を絶する光景と人の死を直面する精神的戦いを。忠則は俺の心配していた初代主人公剣氏ライオルと接触し柴田と一緒に孤児院の子供達を救っていたのだ。

聞いているとまだ自分が魔法を使えていない事が恥ずかしくなる様なすごい体験を2人はして成長をしている。忠則は長剣を使えるように、あかりは共鳴歌を使えるようになり、この世界の言葉を覚えようとしている。

俺は、魔法使いになる為に訓練を怠っていないが、師匠とオムライスを作ったのんきに食べていた自分は2人より劣っているのではないのかと考えさせられる内容だった。

師匠の話だと俺は後数日で魔力操作を上手く出来るようになり、魔法を使用する事が出来るらしいがもっと頑張らないといけない様だ。このままだと2人を守るどころか足手まといになってしまふ。

俺と忠則とあかり、皆この10日間の話を終えてくだらな雑談を咲かしていると既に青い月の光が窓から差し込んでいた。

「そろそろ寝ないとまずいわね、私自分の部屋に戻るわ」

いきなり話を中断させて自分の部屋に戻るあかり。基本的に突発的な正確なあかりだがこの世界に来てから更にきつくなったんでは

ないだろうか。

俺と忠則はいきなり過ぎて何も言えずにあかりを見送った。数秒間、無音の空間が生まれ、糸が切れた様に2人で笑いあった。

良く俺を振り回す忠則も、あかりが加わると振り回される側になる時がある。その度に忠則と俺は2人して笑い合っていた。この感覚、この雰囲気は俺達のあり方だった。俺達が日本にいた時と同じ様に、少しずつ俺達はこの世界に馴染もうとしていた。

「さて俺らも寝ないといけない、明日は3人で準備をしないとな」

「お！ 流石だな黒野。分かってるじゃねえかも冒険するんだな！」

「そんなわけないだろ、まずはあの喧嘩好きの兄妹を探さないといけない」

そう、俺達は3人のグループじゃない、5人だ。この都市の教会にはいなかったが、必ずこの世界に召喚されているはずだ。あの二人なら何とかやっていけていると思うが、早く合って行動を共にしたい。

「そうだな、佐藤兄妹も必ずこの世界に召喚されてるはずだよな」

「ああ、だからまずこの都市を出て探さないといけない、師匠の話だと俺らと同じ様にこの世界に召喚された者は確実にこの国しかないそうだ」

そう、師匠が感じ取った魔力は、この国全体を覆う超巨大魔法陣でその魔法陣が何重か重なって同時発動されたと言っていた。一番目は俺達への召喚魔法。2番目は国の人達も含める精神操作魔法。3番目は通常は動物や魔物に発動させる言語翻訳魔法だった筈の物を高度な技術で人間にも使用できるように変換した魔法。

その魔法陣と魔力の大きさは人間ではありえない大きさだったと

言う。常に魔法を使い続けて入て無尽蔵の魔力を持っていたてもおかしくない様な少女師匠でさえ無理な量と大きさだと言う。俺達を召喚したのは人間なのだろうか……。

少女師匠に聞いても何も答えてくれなかった、肯定も否定もしない少女師匠は何かを知っているようだが俺には教えてくれる事は無かった。

「なあその師匠に佐藤兄妹を探してもらう事は出来ねえのか？」

「……………あ」

全く考えが付かなかった。その通りだ、師匠なら搜索魔法を使う事が出来るだろう、俺は自分の魔法の事で他の事を考えられなかったみたいだ。忠則にこんな指摘をされるなんて滅茶苦茶恥ずかしくて悔しかった。せめてあかりに指摘されたかった位だ。

「なんか、驚いた後にすごく苦い顔に変わったがどうした？ 変なもんでも食ったか？」

「なんでもない、さああかりは朝に強いんだあいつは漫画やライトノベルの様に可愛く起こしてはくれない、さつさと寝よう」

俺はショックを隠し切れていが寝て忘れる事にする直ぐにベットに移ろうと移動する。だがその光景にすぐ身体が止まる。

「なあ何でベッドが一つしかないんだ」

「なんかあかりが大きい部屋が良いって言って先に部屋決められたからこうなっちゃった」

「おい、何でそれを許した」

「黒野が了解してたんだと思ってたんだぜ」

「了解するわけ無いだろ、何で男2人でベッド一つなんだよ」

頭が痛くなってきた、何故忠則はこれを許したんだ？ 上手くい
きそうになったと思ったたらすぐにこんな状態だ。

「俺は一緒に寝ても良いぞ？」

「死んでしまえ」

こうして俺達は兄妹を探す旅が始まったのだった。

14話 師匠

朝起きて上半身を起きあげるとベッドの横で丸いとてもでかい物がそこに蹲っていた。

「やはり忠則は寝る時、丸まって寝るのか……」

忠則はまだ丸まったままいびきを立てて寝ていた。でかい図体している癖に、小さくなろうと丸まって寝ている様な姿が地味に笑える。

昨日、忠則があかりに2人部屋を渡してしまったので壮絶なジャンケン大会が始まり、8連続あいこと言う記録をたたき出して俺は勝利をした。

ちなみに忠則との勝負は高校時代から色々物を決める時はジャンケンだった。力比べでは全部に忠則優勢だし、クイズなんかの頭脳勝負なんて面倒だし忠則に負ける気がしない。

俺は先に準備をしてから忠則を蹴り起こす。修学旅行の時の忠則はいくら声掛けても起きなかった。多分物理的に攻撃しないと起きない。忠則を何度か蹴るともぞもぞと動き出した。

「起きろ、朝だ。」

「ん？ 何か身体が痛いぜ……」

「そんな事無い、多分寝ばけて感覚が麻痺してるんだ」

「そうか？ そう言われるとそうかも知れないな」

俺は先に部屋を出て井戸水で顔を洗い深呼吸をする。すると背中から声が聞こえてくる。

「ねえ今日からどうするの？」

「あかりか、今日は色んな準備をしようと思う。色々動くためには俺達は準備が足りないからね、旅に必要な道具なら買えるけど旅に必要な知識も少ないからそれも何とかしないといけない」

「旅つてもう行く場所は決めたの？」

「いや、まずあの喧嘩好き兄妹を探そう、あの二人ならどんな状況下でも仲良く喧嘩しながら生きていけそうな気もするが一度会って確認しないとやはり心配だから」

「そっか、佐藤兄妹もこの世界に来てるはずよね、この頃色々あったからってあの子達を忘れるなんて……」

あかりに今日の説明をしていると目をこすりながら忠則が現れた。俺は忠則とあかりにもう一度今日、どうするかを説明をしてから部屋で集合する事にした。

今日の重要になるのは買い物だ、これは慎重に時間を掛けないといけない。荷物は多過ぎず少な過ぎず丁度良い量を考えないといけない。それと移動には確実に足では不可能だ。早く移動するためには馬の様な動物が必要になる。

この世界には馬が存在しない。だが馬より速く走る事が出来て、馬より速く乗りこなす事が出来る動物が存在する。

「この世界を旅するには自分のヘディガーを買って乗りこなせないとけない」

皆が同じ部屋に集まって俺は口を開いた。ヘディガーとは犬と虎に似た動物だ。肉食だが性格は穏やかで犬の様に主人に絶対の忠誠を誓ってくれるのだ。知性も高く訓練を積みば何種類かの言葉の意味を理解させる事も可能な優秀な動物で、主人を食う事は一切ないが、主人に危害を加えようとする動物や人間は自信の死も試みず立ち向かう勇敢な戦士でもあるのだ。

「でもヘイガーって高いはずよ、私達が買える様な代物じゃ無いわ」

「そうだね、多分俺らの金をすべて合わせても一番安いのが1匹かえるかどうか……」

「いや、3匹余裕で買えるぞ?」

忠則がいきなり小さな子袋から見た事無い金貨が現れた。

「え……?」

「なんだそれ……」

「金だぞ?」

確実にこの10日間で稼げる事の出来ない金額が目の前に現れた。まず単位が違う、0の数が違うのだ。金貨と言う事は日本で言う100万円だ。それもその金貨の数が2枚もある、200万円だ。更に銀貨が数十枚もある、合計すると300万近い金額になるだろう。300万円なんて日本でも見た事が無い額。これだけの額があれば大抵の事は出来るだろう。だが金貨を扱ってくれる店が無いので銀行で換金するしかないだろう。

「だが、何故こんなにも金があるんだ?」

「ライオルが給料としてくれたんだ。貴族ってのは本当に金持ちなんだな、俺も見た時はびっくりしたぜ、これで飯の心配する必要が無いぜ!」

「これだけあればこの世界の本も買えそうね、楽しい異世界ライフを送れそうだわ」

忠則とあかりは勝手に豪遊生活を想像しているようだが、絶対にそんな生活はさせない。こいつらは本当に旅をしたいのだろうか、俺はこのたった数日の間に何度考えられているんだろうな……。

初代主人公のライオルは元貴族で物語の始まりに身に着けていたのは自らの誇りである鎧と剣。それと旅に必要な最低限の荷物と金貨1枚と銀貨数枚だった。貴族にしては少ない持ち物だと思ったが、使わないいい金を全て孤児院に寄付したのか置いてきたのかどちらかだろう。

忠則がお金をこんなにも持っていた事に衝撃を覚えたが予想外の収入で俺が考えていた計画の期間が縮まった。どの世界どの国でも金はあるに越した事は無い。

「忠則ありがとう、お前のおかげで上手くいきそうだ。だが直ぐに全部使う訳無いだろう？ 欲しい物を買うのはまだ先だ。ヘディガ―も買うのはまだ先だし、今日は旅に出るために必要な道具を一式買うだけだ」

「なんでだよ！ 俺は上手い飯が食えないと全力が出せないんだぜ！」

「そうよ黒野、私のエネルギー源の小説が無いと死ぬわよ」

「うるさい、飯は食えればいいだろう、それに小説は無くても生きていけるわ」

俺は二人の言い分を全て拒否して、俺達は旅に必要な道具を買いに行く。旅に必要な物は多い。荷物を背負えるしつかりしたリュックと変えの服と大きめの水筒。ナイフ、筆記用具、コンパス、地図、石鹸等、小説で読んだ物と自分が必要だと思える物を一つ一つしっかり選び値段を考えないで買う。

今回は忠則の手に入れた数の多い銀貨を惜しみなく使う。今回で揃える物をこの世界ですつと使う事になるかもしれない重要な物だ。旅の途中で壊れてしまったらその旅が困難になるのだ。

この世界は現実だ。ゲームでもなければ漫画でも小説でもない、途中でアイテムが落ちていたり魔物を倒してもお金が落ちてくる事は無い。1日3食の食事も必要だし睡眠も必要になる。更に常に最

高のコンディションでは無いのだ、この世界に来てあまり日にちが経過して居ない俺達はこれから環境の変化で体調を崩すかも知れないのだ。

ページをめくると様々な過程が飛ばされる様な物語では無い。完全に現実で起きている事だ、この世界で生きていくには毎日を生きていかなければならないのだ。この世界で長い旅をするという事は綺麗な事ばかりでは無い、様々な辛い事や苦しい事が容易に想像できる。俺と忠則なら耐えられるが女性のあかりには耐えられるだろうかという心配もある。

色々な問題を少しずつクリアしていかないといけない。今回の準備も出来るだけ時間をかけて行わないといけない。まだ戦争の準備が始まった段階だ。急がなくてはならないが戦争が始まるのはまだ先だろう、時間を掛ける場所は時間を掛けないといけない。

「結局1日掛かったわね、でもまだ時間が欲しい位だわ」

「そうだな、こんな時間に師匠の家を訪れるわけにもいかないし、明日もう一度準備をして向かおうか」

「そうだな、まだ開いてる店で飯食ってから帰ろうぜ」

俺達は忠則のお勧めの料理店に入りご飯を食べる事にした。何度見ても忠則の豪快な食事はスゴイ、忠則ほど豪快でありながら下品で無い食べ方をする者はいないだろう。

食事を終えて少し重たいリュックを背負って宿に戻る。予定より時間は掛かったが充実した日だった為、問題は無いだろう。明日は必ず少女師匠に会わないといけないと思い俺は静かに眠った。

「さあ起きろ忠則！」

朝になり俺はベッドでも丸まっている忠則を蹴り起こす。今日はあかりのわがままを無視して二人部屋を取ったためベットは二つあった。俺は昨日の様に寝ていただけだが忠則は昨日がよほど寝辛かったのか気持ち良さそうに寝ていた。

だが朝は起きないといけない。忠則の目覚めは悪くないが少し起きるのが遅いのが問題だ。昨日と同じように蹴り起こして顔を洗ってから部屋に集まり一緒に宿を出た。

今日はもう一度旅の道具を見て最終的なチェックをする。俺は荷物が中々多くなってしまったが、ギリギリ許容範囲だ。旅の移動は基本的にヘディガーでの移動になるのからある程度重くても大丈夫になるだろう。大抵の国から国への道のりはヘディガーがいるのなら通る事が出来る。

準備が終わり、必要最低限の物以外の荷物は金が必要だが安全な銀行に預けて少女師匠の家に向かう。

「そつえば、黒野が言ってた魔法使いの師匠ってどういう人なのよ？」

「あ……えっと、まあなんと云うかスゴイ師匠だ」

「おお、やっぱり長いひげに長い杖とか持って黒いローブ着てるのか？」

「まあ到着すればわかるよ」

二人が想像している師匠は間違っではない、この世界の魔法使いは実際そのイメージが普通なのだ。女の子が見る様なアニメの主人公な魔法少女。そんな魔法使いなんてこの小説のイメージとはかけ離れているのだ。

二人が実際に師匠と対面してどんな反応するのか想像が出来ない。無理やり想像しようと頭をひねっていると目的地に到着した。俺は後ろで待っている目を輝かせた視線を背中に感じながら少女師匠の家のドアをノックする。

「誰じゃ？ 今日の使用人がおらんのじゃ用件はまた別の日にしてくれ」

「師匠せめてドアを開けてください、黒野です」

「おお黒野か、ちよつと待っておれ」

俺は直ぐにドアから一步離れて待つ、師匠は魔法で勢い良くドアを開けるのだ、何度額を赤く腫らした事だろうか、若干額の皮膚が厚くなっている気がしないでもない。

案の定勢い良く開いた扉の前には小さな少女師匠が堂々と立っていた。後ろの二人の反応はどうだろうか？と考えながら師匠と会話を始める。まずは後ろの二人の自己紹介をしないと。

「師匠、いきなりすみません、今日は魔法の修行ではなく師匠の力を貸して頂きたいのですが」

「ふむ、私の力を借りたいと言うのじゃな？ 構わんがそれなりの対価がない……にゅおむ！！」

師匠が喋っている途中で誰かかの妨害が入った。

……あかりだ。

あかりが師匠を持ち上げて適度に豊富な胸の中に師匠の顔を押しつけて抱きしめた。俺は急展開過ぎるこの状況に身体が全く動かせなかった。数秒の時間を経て状況の把握が出来て師匠をあかりから引き離した。

「な、何をするのじゃ！ 黒野！ こやつは何者じゃ！」

「えっと、彼女は俺の仲間です、それとその後ろに居る奴も……」

「ねえ、この子が黒野の師匠だっていうの！ 可愛すぎるわ、でもこの小説ってそんなジャンルじゃ無かった筈なのに、どうして？」

あかりは興奮していた。お気に入りの小説の新作が出た時の状態だ、この状態が一度始まると中々治まらない。師匠は俺の後ろに周り服の端を掴んで隠れた。その状況が更にあかりを興奮させているのだが師匠には分からないだろう。

俺はあかりの肩を押さえてこの状況の鎮静化を試みようとしたが俺一人では無理だと一瞬で理解した無理だ。俺はあかりの後ろに居る筈の忠則に助けを求める。

「おい、忠則！ この状況どうにかしてくれ……忠則？ 何処に居るんだ？」

「おう、此処だぞー」

何故か師匠の部屋の中から声が聞こえる。俺は首を曲げて部屋を覗くと忠則がダンベルの様な物をダンベルとして使っていた。

……………こいつら自由すぎだろ。

それから1時間弱をかけて色々と双方に説明をして俺とあかりと忠則は師匠の大きな椅子の前で正座させられていた。何故俺までと言う疑問が残るが、それを口にするともた時間が消費されるだけなのは容易に想像が出来るので諦めた。

「それで？ 私になのを頼みたいのじゃ？」

「自分たちの様に召喚された者の中に俺達の仲間がまだ二人居るのですがその2人が何処に居るか探して頂きたいのです」

「それくらいなら容易いのじゃが、それに見合う物が無ければやらぬぞ？」

まだ少女師匠は少し怒っているのか威圧的な態度を取っている、あまり出し洩るのは良くないだろう、こちらが提出出来る物の全てを伝えた方がいいだろう。

「この世界のこれから起きる事になる情報と、お金、俺のオムライスが俺達の提供出来る者ですがどうでしょうか」

「お！ 黒野のオムライスが食えるのか！ そりゃ良いな」

「忠則、お願いだから黙れ」

「そうじゃのう、金はいらん。使いきれん程持つておる。じゃから黒野の持つているその情報とオムライスを貰おうか」

「では、交渉成立で？」

「待つておれ、直ぐに見つかる」

少女師匠は小さく細かい魔法陣を一瞬で出現させた。いつもは脳内で描く魔法陣を空間に描くと言う事は規模が大きい魔法なのがよくに分かった。だが師匠が使う魔法陣は俺が見ても全く分からない形をしていた、自分が教えて貰った基礎の魔法陣の応用と言う事しか分からない。色々オリジナルな場所や組み換え方があるのか、少し正規の魔法陣とは違う形をしていた。

師匠の魔法陣が書き終わり、魔法を発動させる。その瞬間爆発的な魔量の放出を感じたと思った途端、新しい魔法陣が自動的に描かれ一瞬で巨大化してこの家を飛び出した。

「何が起きたの？」

「なあ黒野の師匠は何しているんだ？」

「ああ今搜索魔法を発動しているんだが、これはすごいぞ……」

俺は二人共何がすごいのかをしつこく聞いてきたが無視してその光景を見ていた。最初の魔法陣は魔法陣を書くための準備の為の魔法だったのだ。範囲の必要な巨大魔法陣は脳内で書いても意味がなく、書くのにも時間が掛かるのが最上級魔法の難点だ。

この小説の主人公の魔法使いも大きな戦いに控えて、大きな魔法陣を前日に書いて上手く相手を誘い込み発動させていたのだ。だがこの師匠はその最大級魔法の欠点を攻略をしていた。

何時間も何日も掛かる魔法陣構築をたった数秒でやってのけたのだ。そして魔力の量も凄まじかった、つい先日まで自分の魔力を操作するのに苦労していたが周りの魔力を少しずつ感じれるようになってきた俺はその魔力の量に驚愕した。

基礎魔法の魔力に必要な量の約500倍程度になるだろう。俺がそれ程の魔力を放出するとその日はもう同じ魔法は使えないはずだ。まだ自分の魔力の量を完全に把握していないが多分半分以上の魔力を持つていかれるのは想像できる。

そしてその量を瞬時に均一に流し込む事が出来ない、俺なら流し込む過程で脳が焼き切れて気絶しまうだろう、それくらい脳に負担を与え精神的に苦しいのだ。だが少女師匠はそれでも呼吸も乱れる事も無く平然にしている。

俺が驚いていると魔法陣はこの国を覆ったのだろうか、師匠が少し動き俺達に声をかけた。

「すまんのじゃが、少し大きな声が出るが気にするな」

俺達は無言で頷く。それと同時に師匠は大きく息を吸い込み全てを吐き出した。

「っは！」

声は可愛かったが、声に込められた力強さは子供とは思えない何かを感じた。そして流れる魔力。その量先ほどの量をさらに上回る量だった。1.5倍から2倍程度の量だろう、開いた口が塞がらないとはこの事を言うのだ、目の前に起きている事の大きさの理解が追いついていないが身体が察知しているのか手が震えて足が今すぐ逃げ出したいと言っている。

俺がこの世界で魔法使いとして一生を過ごす事を決意して1年365日、常に魔法の研究と魔法の練習を続けてもこの少女師匠には

足元にも及ばないだろう。いや、及びたくも無い、この力は異質だ。普通の魔法使いとはまた別の何かがこの少女師匠にはあるのだ。

俺が読んで来たこの小説の話では魔法は此処まで大きな物は無かった。火を放つても範囲は遠くて数十メートルで遠くに行くほど勢いは弱まっていく。それに魔法を使うには大きな欠点がある、魔法陣構築から魔力を流し込み発動までの間確実に隙が出来るのだ。その時間は早くても数秒は掛かり難しいものだと10分以上は楽に掛かってしまう。

だが師匠は違った、今まで移動以外の行動は全て魔法で行っていた。その行動に対する魔法のタイムラグは0秒、既に魔法が脊髄反射的に使えるのだ。

一体何年そんな生活を続ければ身につける事が出来るのだろうか？十年では無理だ、それなら小説で現れた魔法使いの半分は師匠の様な生活が出来る。二十年。三十年。いや、百年経つてもそのような事が可能だと思ふ事が出来ない。

師匠は一切自分の事を語らなかった。名前を聞いてもはぐらかされ師匠と呼べと言われたのだ。この時点では何も不審には思っていないかったが、今は何故隠しているのは気になって仕方ない。

——この師匠が俺達を召喚したのではないのか？

脳裏によぎった言葉を振り払おうとする、そんな事はないはずだ。そもそもわざわざ自分を召喚しておいて、その過程を効く必要があるのか？それに俺に魔法を覚えさせる理由も分からない。

だがそれも含めて師匠が俺達を召喚した理由なのではないか？一度脳裏に浮かんだ言葉は中々離れてくれない。師匠が俺達を召喚したと言う確証もないが、していないと言う確証もない。もう考えるのは無駄だ、たとえ師匠に聞いて「違う」と答えたとしても今の俺は疑ってしまうだろう……。

「黒野大丈夫？ どうしたのよ？」

「大丈夫か、師匠の魔力とやらにヤられたのか？」

忠則の手が俺の肩に触れてやっとなりの声に気が付いた。知らないうちに酷く汗が出ていた。2人が心配そうに俺を見ていたので心配ない事を立ちあがって証明した。

結構時間が経っていたようだ。既に師匠は魔法を終えて佐藤兄妹を探し当てていた。俺はずっと汗をかいて一点を見つめて動かなかったらしい。忠則の言う通り魔力に充てられていたのかもしれない。師匠の魔力の放出量は日常的に当たっている数倍の量の魔力が一気に浴びせられたのだから、まだ魔力に大勢の無い自分には耐えられなかったのだろう。

俺は忠則とあかりに佐藤兄妹の場所を聞き、地図に印を付けてから依頼通りオムライス作りを開始した。前回のオムライス作りで使った簡易冷蔵庫の食品と足りない分の材料を買ってオムライスを作った。だが今回のオムライスはあまり美味しく出来なかった。店で出せるレベルではあるが、心がこもっていなかった。ずっと上の空でオムライスを作るのは初めての行為だ。

いつもの俺なら自分で自分の頬を思いっきり殴るような行動だ。オムライスを馬鹿にする行為は俺自身も許せない筈なのに……。

俺はその後師匠達の会話も頭に入ってくる事は無く、二人が心配していたがそれに対して何もすることは出来ず宿に戻るのだった。

15話 兄妹

「もう死ね。何でこっち来る訳？」

「兄が妹に近づいて何が悪い、兄としての当然の権利だ」

「あんたは兄でもなければ人間でもないわよ」

「いつも思うが何で咲子は兄に対してそこまでツンを貫くのだ。たまにデレを見せないと妹としての価値が下がる一方だぞ」

遠くから声が聞こえる。久しぶりの様な懐かしい様な気分だ。この数日間で様々な事がありすぎて日にち以上の時が経過している様に思えて仕方が無い。この騒がしい口喧嘩の罵倒の繰り返しも全く苦にならない。むしろ心地よく聞こえてしまうのは日本で毎週聞き続けていたからだだろうか。

当たり前だが声は近付けば近付くほど大きくなる。喧嘩が始まると周りが見えなくなるのは何時もの事だ。俺達は結局気が付かれる事無く至近距離まで近づいた。

「なあそろそろ喧嘩を止めて俺達に気が付いてくれないかな？」

「何よ、今忙しいの、邪魔しないで……え？先輩！！」

「先輩だと！！……これは夢なのか？」

佐藤兄はまだこの状況が理解できないようだ。佐藤妹、咲子は泣きながらあかりの方に飛びつき抱き合っていた。あかりは咲子の前だと言葉は悪いが優しいお姉さんを演じるのだ。頭を撫でて優しい言葉をかけている。

「咲子ちゃん良く頑張ったわね、もう私達が来たから安心して良いわよ」

「良かった、教会に先輩たちがいなかったから、此処には来ていな

いのかとずっと思っていました」

咲子はあかりに任せれば大丈夫だろう、咲子はあかりに絶対の信頼を置いているのだ。それが何故かは分からないがとても仲が良いのは見ていればわかる。

俺と忠則は佐藤兄、直人の場所に向かう、直人はまだ俺達の事をしっかり認識していないようだ、目をこすって幻覚かどうかを確かめている。

「すみません黒野先輩、俺の頬を抓ってくれないですか？」

「何で黒野なんだ？ 俺がやってやるぞ？」

「止めてください、頬が千切れます」

俺は直人の頬を抓ってやる。小さな声で痛いと言いつつ、俺達がいるのをやっと実感したようだった。直人は咲子と違い感情的ではないが何処かずれていると言いか可笑しい。さらにオタクだ。直人の驚いた表情は笑みに変わり目が少し潤んでいた、やはり自分達と違い、一人で妹を守りながらこの世界を生き抜くのは辛かったのだろう。

忠則は直人の頭に手を起き良く頑張ったぜと先輩風を吹かしていた。

俺達と佐藤兄妹はこうして俺達は遂に再会を果たしたのだった。

少し日にちを遡り俺達は宿屋に居た。師匠の魔法を見た次の日で俺は忠則とあかりにものすごく心配されていた。心配のされ方が重症患者の様で自分自身身体のどこが悪いのではないかと錯覚する位だった。

俺は昨日起きた事が気になってはいたが、既に上の空から戻って

いた。朝起きて昨日のオムライスに対する冒瀆を恥じて思いつき自分の頬を殴ってスッキリしていたのだ。

「なあもう大丈夫だから心配するな、もう大丈夫だからさ」

「だけどさっきの頬の腫れは？ 何かあったんじゃないの？」

朝食を食べているとあかりに以上に心配された、顔を合わせた瞬間に声をあげて俺を引き止めて人目も気にせずその場で共鳴歌を歌い出すと言う大胆な行動をやったのだ。

忠則も忠則で朝食を俺に分けようとするなんて、季節の変わる事の無い国に雪を降らすつもりなのかと思った。俺は朝食時から昼食にかけて部屋で自分が正常なのを必死で訴えて何とか二人の理解を得る事に成功した。まだあかりは心配するそぶりを見せるが気にしない事にした。

「時間が少し押したが、そろそろ出発しよう」

今日は佐藤兄妹に再開する為に今いる東都市から北都市に向かう。俺達は荷物を全て持ち徒歩で行く、今回は身体を鍛える訓練でもあるのだ。徒歩で北都市に向かうと3日は掛かるだろう。

歩き続けるのは簡単に見えて結構難しい事だ。俺とあかりは忠則の様に毎日身体を鍛えていない、翌日には直ぐに筋肉痛となつてあるくのが困難になるのは目に見えて分かる。

だが、これからは旅を続けるとなると沢山歩いて沢山走る場面が多くなるはず、山道や洞窟などヘディガーが通る事の出来ない所は全て自分の足で進まないといけない。

俺達は皆自分の持ち物を持って歩いていく、忠則が全て持とうかと聞いてきたが、忠則は既にでかい長剣を肩に下げているし、自分で持たなければ体力作りにならないので断る。

荷物には水筒に飲み水を入れているので道具を揃えた時より重く

なっている。だがやはりあかりの方が重いだろう、俺より大きめなリュックを背負い中身の俺より沢山は行っているようだ、女性だから俺達より道具が多いのは分かるがこのままのペースで歩いて大丈夫なのか心配になってくる。

「あかり、荷物重そうだが大丈夫か？ 良かったら荷物の中の物少し持ってやろうか？」

「大丈夫よ、リュックの中身はほとんど黒野と変わらないわ、ただ面白そうな本があったからつい買ってしまったの」

あかりはリュックの中から大きな本を取りだして楽しそうに自慢してくる。

「良いでしょ？」

「なあ、もしかしてその本旅にずっと持ち歩いていくつもりなのかな？」

「当たり前じゃない、私は本が無いと生きていけないの、それにこの国の文字を覚える訓練にもなるのよ、知ってた？ この世界の文字って自分の意識を変えるだけで読めたはずの言葉が意味のわからないこの世界の文字に切り替わるのよ」

「どういう事だ？」

あかりは共鳴歌を学んだ時の事を含めて文字と言葉に対する事を話してくれた。共鳴歌はこの国の言葉で音楽に合わせて歌う為、言語翻訳魔法が機能しないそうだ。

その為言葉を一から学ばないといけないと言う事だった。あかりは歌いたくても歌えないのが辛く、その気持ちを全て勉強にぶつけている様だった。

あかりの言葉の学習力はすごかった、あかりは速読術を学んでいるので小説の読むスピードは速い。今回の小説も既に何度も読んで

いる様だった。あかりが言うこの世界の言葉の勉強方法は一度日本語として本を読み、意味を理解してこの世界の言葉で読む。それを何度も繰り返し読めない言葉を少しずつ減らしていくという方法だった。

本当は危険で止めたかったが、あかりの熱意に負けて歩いている間も本を読んでいても何も言わなかった。自分と忠則であかりが危険にならない様に守りながら歩いた。

夜遅くまで歩く事はしなかった。日が沈むころには地図から宿屋を探し早めに寝る。夜行動するより朝行動した方が安全だからだ、忠則曰くこの国はあまり治安は良くないそうだ、やはり何度も戦争を行っている国は孤児の数が多いのだろう。

こうして俺達は筋肉痛などの痛みに耐えて予定より1日多く掛かったが4日歩き続けてリーディアの北都市に到着したのだった。

直人との再会を果たしてお互いの安否を確認し合ってから直人は口を開いた。

「先輩達は何処で何時召喚されたんですか？」

直人の質問は最もだろう、今までこの世界に居ないと思っていた俺達が数日後いきなり現れたのだ。それも俺達は此処に直人と咲子がいる事を知っているとすれば尚更だ。

俺は直人に今までの経緯を出来るだけ詳しく説明する。直人は忠則と違い話をちゃんと聞いてくれる良い後輩だ。まあ俺の一番の友達が忠則だつてことが原因なのかも知れない、忠則と一緒に居るとただまともに会話が成立するだけで嬉しい時があるのだ。

説明が終わると直人は驚いていた、多分自分が知らない事をこの場で色々知ったからだろう、確かに直人一人だと情報収集など出来

ないだろう。」

直人は妹と何時も口喧嘩をしているがとても妹思いの兄だ。本当にお互いが嫌っていれば毎日何時も一緒に何時はずが無い。妹の咲子も鬱も暴言を吐いているが心のどこかで信頼をしているだろう、直人いわく一向にデレる様子の無いツンデレ妹だそうだ。

俺は今までの事を話し終えて直人が状況の整理を終えるのを待つてから質問をする。

「直人と咲子は今までどうやってこの世界で生きてきたんだ？」

直人は俺の質問にゆっくりと口を開いた。直人と咲子の召喚はほとんど同時だったらしい、直人の家にはパソコンが一台しか無いので取り合いになっていたらしい、いつもの様に咲子が強引にパソコンを奪い取って先に小説を読もうしていたのだが、目を放すと咲子が居なくなっていたらしい。

だがその事に少し違和感を感じただけで可笑しいとは思わなかったそうだ、そして直人は咲子がいなくなったのでパソコンで小説を読もうとしたらこの世界に召喚されたそうだ。

召喚された場所は俺達と同じ様に教会で、直人以外にも沢山の召喚された者達が痛そうだ。直人はすぐに咲子を見つけて、教会をでて所構わず店に入り兄妹二人が出来る仕事が無いか回ったそうだ。言葉は通じたし文字も読めるので、すぐ行動した事が良かったらしく十何件かの店を周って給料なしの食事付きの住み込みで仕事を得る事が出来た。

それからは仕事が忙しく、二人は喧嘩もする事無くただひたすらこの世界で生きていく為に頑張っていたそうだ。

「ですが、数日暮らせるお金を貰って先日店を追い出されてしまいまして……」

「なんだ兄妹喧嘩が原因か？」

「いえ、仕事が忙しかったし私にも色々やる事があったので妹とはあまり話せなかったんです、理由は戦争が原因です……」

直人の働いていた飲食店はもうこの国から出ていくそうだと、戦争によって息子を亡くした夫婦が経営していたそうで、もうこの国に住む事は出来ないと言う事だった。

「この国って最初の主人公がいた国ですよ？　ですので私と咲子でギルドに行ってお金を貯めて商人に金を払い別の国まで同行させてもらおうと思っていた所だったんです」

「そうだったのか、俺達は此处でヘイガーを買って、この国で少しの間訓練を積んでから別の国に行こうと思っていたのだが、直人はどうしたい？」

俺は直人にあえて聞いた、直人の様子が少し違ったからだ。何時もならすぐにでも一緒に行くと言こうから言ってくる筈なのだ。

「今までの先輩達の話の聞いていると先輩達はこの世界を旅しようとしているんですよ？」

「ああ俺達はこの世界を旅して冒険するつもりだ。俺達が何故この世界に召喚されたか理由を探したい。俺は魔法使いに、忠則は剣士に、あかりは共鳴歌手になるつもりだ」

「それなら私と咲子は一緒に行動できません。咲子はまだ私と先輩達と違って大学生では無い女子高生です、この世界に来てから毎日が大変でした。私は男だから大丈夫なのですが、あかりは本当に必死でした。これ以上私は咲子を辛くさせたくないのです」

直人の意志は強い、俺の言葉で曲げる事はないだろう。直人の妹に対する思いは強固なものだ、日本であれだけ毎日喧嘩していても妹の目を放した事が無かった。妹もあれだけ口では罵倒を繰り返し

ているが、高校も同じだったし大学も兄と同じ所を目指している。
メンバーが集まる時、咲子も咲子自身は否定するが兄がいないと
テンションが低い。あかりが咲子を誘っても兄の方に付いていくだ
ろう。

「そうか、一緒に旅をしたかったがそれなら仕方ないな。じゃあ向
かうは国は決まっているか？ 決まっていなければこちらで指定し
たいんだが良いかな？」

「大丈夫です、まだ資金が溜まっていないので行先は決まって無い
ですよ」

「じゃあ、明日にも出発の準備をしろ」

忠則は銀貨を二十枚程度直人に渡した。お金の管理は俺が行いた
かったが、大金を手に入れる事が出来たのは忠則のおかげなので、
金の管理は任せている。今回、直人の使い方は納得だ、たまに目を
放すと何かを食べている時は殴りたくなったが。

「なんですか、この金額は！」

「俺が稼いだ金だぜ！ すげえだろう！」

俺は忠則が大金を手に入れた経緯を直人に話してからしっかりと
銀貨を握らせる。

「準備は出来るだけしっかりしておいた方が良いでしょう」

「先輩、ありがとうございます！」

「お礼なんていらさないさ、ところで日が落ちてくる頃だからそろそ
ろ宿を探したいんだ、良い場所は無いか？」

「それならまだ私と咲子が泊まっている宿に空きがあるはずですよ」

俺と忠則と直人はあかりと咲子を読んで宿に移動した。宿は安い

割に悪く無かった。いつも同じ部屋で寝ていた佐藤兄妹も女部屋と男部屋に分かれる事にした。

「そういえば、黒野先輩は魔法使えるようになったんですか？ 見せてください」

「ああそういえばやつと出来る様になったんだよな、まだ俺も見えないぞ？ 見せろよ」

俺は直人と忠則に魔法を使ってみると催促させられる。そう、魔法が使えるようになったのだ、使えるようになったのだが……。

「見せても良いが、期待するなよ」

俺は紙の上に魔法陣を描く、既に何百何千と描いているので魔法陣を書くだけなら早い。魔法陣に手を起き魔力を込める。ゆっくりと一定の魔力を注ぐ、そうゆっくりと慎重に。とても慎重に……。

「なあ、遅くないか？」

「うるさい静かにしろ。集中力が切れる」

「だがもう10分は経過してるぞ……」

そう俺は魔法陣に魔力を注ぐのにスゴイ時間がかかる。まだ魔法を発動するのに15分以上掛るのだ。忠則は時々俺に話しかけて集中を乱してくるが直人は静かに見ていてくれている。

俺は20分かけて遂に魔法陣全体に魔力を注いだ。集中力を持続するのはとても辛いが何とか成功させる。

「行けえええ！」

俺は魔力に命令をする。魔力は一瞬光り輝き魔法が発動される。

「……………なあ、黒野って魔法使いの才能無いのか？」

「忠則先輩！ 何言ってるんですか、まだこの世界に召喚されて日にちはあまり経ってません。これから伸びるんですよ」

忠則の直球も直人がフォローを入れてくれるがそれも悲しい。そう、俺は20分もの時間をかけて使用できる魔法はマッチ程度の火を発動させる程度なのだ……。

「すまん、魔法発動させると頭痛くなるんだ、俺は先に寝るよ」

「あ、ああそうかしっかり寝ろよ」

「黒野先輩おやすみなさい」

俺は二人の哀れんだ目を背中に感じながら俺はベッドで先に寝るのだった……。

16話 牧場

久しぶりにサークルメンバー5人で朝食を食べる。あかりと咲子は夜遅くまで喋っていたのか、起きるのが遅かったので昼飯も兼ねて食べる事になった。

時間が時間の為、飯屋は空いていた。忠則は朝昼の2食分の量を食べようと肉中心のメニューをから大量注文していた。完全に2食分以上の料理が忠則の周りだけに並べられる。

他のメンバーも通常の朝食より少しボリュームのある物を頼んだが、忠則の料理を目の前にと皆、自分の量が間違っているのではないかと錯覚しそうになって追加しそうになったが、食べ終わった後止めて良かったと安心する。昨日と同様に話は尽きない。日本に住んでいた時の話から、召喚された後の話。

お互いの情報交換と笑い話や辛かった話、様々な事を包み隠さず話し合った。食事が終わったのは結局昼前くらいになり他の客が来る前に店から出る事になった。

「では先輩方、これから私と咲子はこの国を出る準備を始めますのでまた宿で会いましょう」

「ねえ？ 何であんたが決めてんのよ！ 私は先輩達と一緒に行くからあんた一人で準備しといてよ」

「あんたとは私の事を指しているのか？ 妹よ、私の事はお兄ちゃんと呼べと何度言えば分かるのだ？」

「気持ち悪い。黙ってさっさと一人で私の荷物も揃えて来なさいよ」
「そうか、そこまで言うか。ならばこちらでも強硬手段に出るぞ、今日の晩、お前の荷物の中の服装が全てこの世界のメイド服に変わっているからな、覚悟するが良い」

「ちよつと！ 何考えてるの？ 馬鹿じゃない？ あんた本当に変態ね」

直人は咲子と口喧嘩を始めながらも、また宿で落ち合おうと約束して別れた。最後まで咲子の怒鳴り声が遠くから聞こえた為、俺と忠則とあかり、三人で笑いあった。

佐藤兄妹がこの国を出る為の準備をしている中、俺達は牧場を訪れていた。この世界の牧場は地球のものと似ている。何種類かの鳥や牛、豚のような生き物を家畜として扱っており、更に馬の代わりであるヘディガーも何十匹も取り扱っていた。

ヘディガーの値段は様々だ、年齢、性別、性格、体調など様々な条件で値段は変動する。平均は銀貨15枚。日本円で表すと15万円程度だ。

家畜として飼われているがヘディガーは肉食だ、基本的に人間を食べる事は無いが、狂犬病に似た病気に掛かる事もあったり、いたずらで攻撃を加えると襲われる事もある。

その為ヘディガーは国の中で放置する事は出来ない。この牧場の様な場所で預かってもらわないといけない為、色々とお金が掛かる物なのだ。

牧場にもギルドが存在する。ギルドを通じて提携した牧場同士の中でレンタルが可能なのだ。

レンタルの場合は盗難防止の為前払いでヘディガー一頭分の値段を払い証明書を作成してもらい、提携した牧場に証明書を提出した際、レンタル代を差し引いた値段が帰ってくると言う形式になっている。

俺は最初、レンタルの方が良いと思った時もあったが、旅は何時まで続くか分からない、短くても1年、もしかしたらこの世界で一生を終えるかもしれないのだ……。

あまりそういう考えを持ちたくなかったが、この世界に召喚された理由が分からない以上、その可能性も十分にある。それなら毎回国から国へ向かう時レンタルするより購入した方が安いし、ヘディガーは主人に忠実な動物で信頼関係も築きやすい。

俺達は牧場を経営している主人にヘディガーの購入したい事を説明し牧場の中に入る。

「あんだ達良かったねえ、この国はもうすぐ戦争が始まるからヘディガーの注文が多いんだよ、でもまだ予約が数件入ってるだけだね、ヘディガーの数は沢山いる。予約の人はまだヘディガーを決めていないし何選んでも大丈夫だよ」

牧場の主人の言う通り、成人したヘディガーだけでも100匹位いる様だ。俺達は初めて本物のヘディガーと対面した。やはり文字を見てイメージ出来る物以上の迫力だった。聞いていた犬と虎の間と言うのは少し違う様な気もするし、あっている様な気もする。

この世界にしかない動物を地球の動物で例えるのは難しい様だ、乗る事が出来る様な生き物なので、背中の骨と筋肉が発達しており犬や虎よりしっかりしているし、前歯は牙だが奥歯が草食動物の様に平らに出来ており、うまく噛み合う様にしっかりしている。

人が乗っても体重をコントロール出来る様になっているのは歯と顎がしっかりしているからだろう。脚の骨も太く、ライオンの様な脚をしている。

赤茶色の毛並みは狼の様にもふもふしており、何時までも触っていたい位だ。人を襲わないので餌を毎日同じ時間に与えていれば大人しく可愛い動物なのだ。

ヘディガーの食事は精肉店で余った肉を加工したものだ。食用にならない部分をミンチにして固めたドッグフードの様な物だ。他にも保存のきく干し肉の様な物もある。肉なら大抵の物を食べられるので、旅の途中も信頼関係を気付く事の出来たヘディガーなら一緒に野生の動物を狩って食料にする事も出来る。

俺達は何匹ものヘディガーを見て触れて自分が懐くかどうか、一緒に旅を出来るかを確認する。忠則は強いと言う事が分かるのか、大抵のヘディガーは大人しくなる。あかりも気に入られるヘディガ

―何匹が見つかって楽しそうにじゃれ合っていた。

「何故だ、こんな筈じゃなかったのに！」

あかりと忠則が順調にヘディガーを選んでいる時、俺はヘディガー達に追いかけまわされていた。取って食おうとしている訳じゃないので良いのだが、確実におもちゃだと思われている様だった……。ただの犬や猫なら問題ないが、ヘディガーは自分の体重の何倍もある。突撃されたら軽く数メートルはぶっ飛ぶのだ。既に何度かぶっ飛ばされて息をするのも苦しい。忠則とあかりは俺を見て笑っているが冗談じゃない、運が悪ければ骨が何本か折れてるはずだ。

それにしてもヘディガーの無邪気な顔が憎い、何だ？ どんだけ嬉しそうなんだよ、尻尾振るな、こつちくん！ 止めてくれマジでおい！

俺はそれから永遠にも感じる地獄を味わい、俺が動かなくなったのを見つけれ出した忠則がヘディガー達を押しつけて俺を引きずり、あかりが共鳴歌を歌い何とか意識を取り戻した。心に大きな傷を負いながらも俺は今までと違うヘディガーの方へ向かう。

今度は自分自身でも分かる程、警戒心丸出しで近づいていく、周りから見たら確実に怪しい男にしか見えない近付き方だ。俺はヘディガーと目を合わせる。俺は先ほどの悪夢がよみがえり体を硬直させる。

何とか逃げないでヘディガーと対面する。だが今回のヘディガーは俺に無関心だった。更に恐る恐る近付いたが今までの様に襲われる事は一切無かったが全く相手にされない。

「何故だ？ 何故俺は最初にあんなに襲われたんだ？」

「さっき聞いたけど、あの襲ってきたのは雄だったらしいぞ」

「雄？」

「黒野からヘディガーの雌みたいな匂いがしたんじゃない？ なん

か黒野ってひ弱だし」

あかりの言葉が胸に突き刺さる。俺はそこまで貧弱じゃない……。そう、俺は日本の体力測定で平均より少し上なんだ。隣に忠則がいなければ俺は普通なんだよ。

三人ともヘイガーを選び終わった時には忠則とあかりは俺を見て腹を抱えながら笑いつかれていた。結局俺は無関心の方のヘイガーには相手にされず、必死に抵抗しながら一番攻撃の少なく俺の言う事を聞いてくれるヘイガーを探しだしたのだった。

「あゝ腹痛いわ。どれだけ雄に好かれているんだ。黒野最後唾液まみれだったな」

「そうね、モテモテだったわね」

「うるさい……」

「あかり先輩と忠則先輩、そろそろ黒野先輩可哀そうですね」

牧場から戻って宿の近くの酒場で咲子と直人と合流していた。あかりと忠則は今日の俺の出来事を笑い話にして腹を抱えて笑っている。何処まで人を馬鹿にする気だこいつ等。

咲子と直人も俺のフォローをしてくれるが確実に笑いをこらえている、何て屈辱的な火だ今日は……。

俺は二人を無視して兄妹に話を振る。

「今日の買い物はどうだった？ 良い買い物出来たか？」

「実はまだ半分位なんです。あの馬鹿が私に変な服押し付けようとするから余計な時間が掛かっちゃって」

「咲子、何故私の名前を呼ばない、せめて私が兄であることが分かる呼び方をしたらどうだ。直人お兄ちゃんでも直人お兄様でも、直人兄い、妥協して兄貴でもかまわないぞ」

「横から口出すな馬鹿、あんたは黙ってれば良いの。私の邪魔しか

する事が無いの？」

「邪魔とは何だ、兄が兄である限りお前は私の妹だ。兄は常に妹のそばにいななければいけないのだ」

「変な思想を私に押し付けるって頭どうにかしてるんじゃないの！」

佐藤兄妹は結局喧嘩を始めた。あかりと忠則を見るとまだ俺をネタにして笑っている。俺は結局皆とともに会話が出来ず一日を終える事になったのだった。

朝起きると枕が濡れていた。これは涙なんかじゃない、決して涙なんかじゃない。汗だ、そう汗なんだ。そうに決まっている、何も悲しかった事なんて俺には無い。

今日は一日ヘディガーを乗りこなす練習を行う予定だ。俺は俺の中で昨日の記憶を無理やり改変した。あれは昨日の夜見た夢だ、そう夢に違いないんだ。

「あああああああああ！！！！！！」

そして再び夢が現実になる。ヘディガーの時は馬を超える。時速70キロで、時速最高速度は80キロを超える物もいる。そしてバイクや馬などに乗った事の無い人間がいきなり直接そのスピードを味わうとどうなるのか？

—— 結論。 死を垣間見る事が出来る。

俺はジェットコースターなどの絶叫マシンは人類が作った最もいい物だと思っている。あんな物この世に存在する必要など無いのだ。

だが今はそんな事を考えているべきじゃない、この現状をどうにかしないと。今俺は草原をただひたすら走り続けるこの興奮したヘディガーを如何にかしななければいけない。俺は必至で縄を放さない様に全力で掴むだけで精一杯の状態だ。

まず声を掛けてみる。

――反応なし。

蹴ってみる。

――更に早くなった。

手を放してみる。

――吹き飛んだ。

もう帰りたい、お家に帰りたい。なんだよこれ。

吹き飛ばされた後、Uターンして突撃してくるヘディガー。わざわざ頭を下げてみぞおちを狙ってくる。尻尾を振りながら興奮して突撃する顔はとても笑顔だ。こいつの笑顔は悪意の表れなのか？

何とか腹部を守り腕がミシミシと言いながら吹き飛ぶ。もう全身が痛すぎて何もできない。突撃するのに満足したヘディガーは俺をただひたすら舐めてくる。顔が涎だらけになる俺。それを見て呼吸困難になる忠則とあかり……。

笑いすぎて共鳴歌が歌えないあかりの前で横たわる俺はこの世界に来て一番の屈辱だった。息を整えて俺の顔を見て再度笑いだすあかりはたとえ仲間であろうと許さないと誓った。

一日は意外と速く過ぎてしまう。俺は一向にヘディガーを乗りこなせていなかったが、既に忠則とあかりは草原を颯爽と駆け抜けていた。

ヘディガーは俺の言う事を聞いてくれるが何もかも行動が激しすぎる。それと俺が何も指示しないと直ぐに興奮してしまうのだ。牧場の主人に効いても俺の様なケースは初めてで対処不可能らしい。

結局俺は一日であかりに共鳴歌を4度行ってもらい、二人の声が枯れるまで笑われ続ける事になった。

「ヘディガーいらない、やっぱり旅は自らの足で歩くのが一番じゃ

ないか？」

「……っ……っもう、止めて……」

「っはぁ……っはぁ俺を殺すつもりかっ……っはぁはぁ」

牧場からの帰る途中、二人は過呼吸を起こしていた。身も心もボロボロと言っつのはこの事だろう。静かに夕日を見上げると空が滲んで見えた。

「準備が出来ました」

共鳴歌で何度か回復したものの心がボロボロの俺は夕食の集まりで直人の言葉を聞く。俺達と同じくらいのリユックにまとめた物が二つ用意されていた。直人の真剣な声にガラガラ声で笑い疲れたあかりと直人も気持ちを入れ替えて聞く。

「戦争がもうすぐ始まるこの国は今、様々な所から商人が行き来しています、戦争が始まる前に早く別の国に行かないと職を手に入れるのが困難になると思います」

「そうか、じゃあ行く国はもう決めてあるんだ。向かう国はデリルにして欲しい、まだ先だがデリルで大会が開催されるのは知っているだろう？俺達は大会が始まるまでにギルドの依頼を受け訓練を積んで大会に参加したいと思うんだ」

「デリルの大会って……あの剣士ライオルの初舞台じゃないですか！」

そう、デリルはライオルが初めて向かう国。俺達も読者として良く知っている国だ。このリーディアより国の規模は小さいが、明るく活気のある街で様々な旅人達が訪れる国。

そこにある大会、デリル闘技大会は武器の使用は一切認められない拳だけの勝負。所謂総合格闘技だ。この大会でライオルは優勝し一気に知名度を得るのだ。

「この大会で忠則にライオルを倒してもらい優勝を目指す」

「やべえなそれ、最高じゃねえか……」

忠則は俺の言葉に武者震いをする、一瞬目の中に炎が見えた。この世界の歴史は変える事が可能だ。それは忠則が孤児院の子供達を助けたことで証明された。俺達の力がこの世界でどれ位通用するのか試すには丁度良かった。

この大会でたとえ優勝できなくても自分達がどれだけの力があるのかを目に見えて実感できる。優勝できれば俺達は旅を続ける事が出来る証明になるし、自信に繋がる。

確実にこのイベントは参加しないといけない。そしてこのイベントまでに実力をつけなくてはならない。

「多分デリルに到着するのは大会ギリギリになると思うんだ。だから咲子と直人は先にデリルに行つて、大会と参加者の情報を集めておいて欲しい」

「分かりました。必ず集めておきます」

こうして直人と咲子は次の日の早朝。俺達と別れを告げる事になった。

俺だけかもしれないが大量の問題がある。だがこの世界を生き抜き冒険者になる為の道がやっと見えてきたのだった。

17話 討伐

佐藤兄妹と別れた後、俺達は北都市の門近くの少し高めの宿を借りた。大会までは日にちで言えば1ヶ月以上ある。デリルに行くまでの間、ギルドで依頼を受けてこの世界で生きて行く力と知識を手に入れないといけない。

だから出来るだけ夜は安心して眠って疲れを取る為に、値段は高いがゆっくり出来る宿を取る事にした。

「あゝ、眠れないぜ」

寝る前、部屋で忠則は一人興奮していた。明日は遂にはじめて、この国を出て行くギルドの依頼を受けるのだ。忠則が今までずっとこの日を待ちわびていたのは分かっているが、この状態の忠則はウザい。

俺は忠則を無視して先にベットに潜って寝る準備をしていた。忠則の様に浮かれる事は出来なかった。

一昨日のヘイガーに乗る練習で起こった事を思い出すと不安で一杯だった。目的地に着くどころかあかりと忠則と一緒に行動できるかもわからない。

静かになる気がしなかった忠則に蹴りを入れてから俺は目を閉じて寝た。

「では、採集2つと討伐の計3つの依頼で宜しいですね？」

「はい、お願いします」

北都市のギルドで依頼を受ける。ランクが上がり信用度が上がれ

ば一人で何個も依頼を受けることが可能だが、通常ギルドで受けられる依頼は一人一つだ。

だが、採集や討伐等の依頼はチームを組み一人一つの依頼を受けると、チーム分の依頼量をギルドに持つていくことでチーム分の成功報酬が手に入る事が出来るのだ。

俺達は3種類の実質9つの依頼を受けてギルドをでる。

北都市のギルドは国の門の近くにあった。宿も門に近くを取っている。この約一カ月はギルドの依頼のみに集中できるようにしている。

門の前に行くと警備兵が左右と中と外計4人立っていた。昼の間は常に開門状態で、人の出入りは激しい。大きな荷物や怪しい恰好をしている者のみ私物の点検をしており、他国の侵入者等の警戒度はまだ弱い。

俺達は警備兵に挨拶をすると気持ちのいい挨拶を返してくれた。

「じゃあ遂に初の国外の依頼を始めようじゃねえか！」

忠則は北都市の大きな門を出た瞬間大きな声をあげて気合を入れた。その顔は興奮を隠し切れていなくニヤニヤしている。目を放したら直ぐにでも何処か勝手に走り出して行きそうだった。

簡単に言つとただ気持ち悪いだけな忠則を、俺は落ち着けと制止させる。

このまま歩いて目的地に行くには遠すぎる。往復で3日は掛かってしまうだろう、その為にヘイガーを購入したと言うのに既に忠則は頭から抜けている様だった。

「お前は歩いて目的地に行くつもりか？」

「お？ おお！ 初めてこの世界の大地を踏みこんだ興奮ですっかり忘れてたぜ」

俺は流石にそれは忘れるなよと思うが、忠則の言葉は大げさでは無かった。水平線が見える様な草原に、先には怪しげな雰囲気を醸し出している深い森。更に遠くには大きな火山が挑戦を待っている様に堂々とそびえ立っている。

この世界はやはり日本とは違うと再確認させられる。忠則には落ち着けと言った俺も流石に身体の震えを隠せないでいる。

俺は湧き上がる好奇心と忠則の様に叫びたくなる興奮を飲み込み、落ち着こうと深呼吸する。気持ちを落ち着かせるのは容易ではないが、目的をしつかり考えて行動に移す。

そういえばあかりが先ほどから何の反応もしていない。ふと思い周りを見渡すと、目を丸くして口を大きく開け静止していた。驚いているのは分かるが……お前は女だろ、口を閉じる。

興奮の収まらない忠則と、周りの見えていないあかりをこちら側に引き戻してヘディガーの居る場所に向かう。

ヘディガーの受け渡し場所は、人のが通るこの門とは少し離れた門にある。人専用の門とは違い大きくしっかりしていた。ヘディガーの通る門の方が正門と言っても良いだろう。

ヘディガーも馬車の様な乗り物を引く事が可能で、商人や地位の高い人間はそれに乗ってくることが多い。

この国は人間とヘディガーの住み分けがしっかり出来ているので門が別に作られており、更に別に作られている事によって、荷物の確認を取りやすく、密輸を防ぐことにもなっているようだ。

ヘディガーの受け渡し場所に近づくと俺に気が付いたヘディガーが既に興奮状態になりつつあった。

……歩いて目的地まで行きたい。

忠則とあかりは既に躡が出来つつあり、手を挙げるとヘディガーは自然に頭を下げて、手を下すと主人を乗りやすい様に腰を下げる。あかりと忠則は頭を撫でて餌を与えていた。

あかりは動物は好きだし、大きな犬を飼っていると聞いた事がある、その為に躡は得意なのかもしれないが、何故忠則まで此処まで

しつかりヘディガーは従っているのだろうか。

ヘディガーの店主も驚いている程だった。店主曰く10日程度毎日一緒に過ごしてやっとな懐いてくれたり躡出来たりするそうだ。

……そして店主は俺を見て更に驚いていた。

「痛い……」

忠則とあかりがヘディガーに乗った時、俺はヘディガーの頭部に乗りかかっていた。

俺も二人の様に手を挙げた時、全速力で走ってきたヘディガーに腹で受け止め朝食べた物がリバーズしそうな痛みと共に宙を舞い、綺麗にヘディガーの頭にもたれかかる様に落下した。

俺を見ながら店主が、此処までヘディガーが懐かないのは珍しいと呟いていたのは聞き間違いであって欲しい……。

左右に忠則とあかりが俺を監視するように見ている。スピードは速くもなく遅くもなくをキープしているが、一瞬でも気を逸らすと飛び出しそうな興奮状態だった。2時間程度で到着する予定だったが、その倍の時間は掛かる気がしてきた……。

ヘディガーの乗り心地は良いわけではない、揺れているので長時間乗っていると尻が痺れてくるし、ヘディガーに乗り慣れていない俺達は精神的な疲労も大きい。

「太陽が丁度真上にあるわ、お昼だしそろそろ休憩しましょう」

あかりは直ぐにヘディガーから降りて餌を与え横にさせる。忠則もお腹が減ったい様であかりに同意し、直ぐにヘディガーから降りて飯の用意をし始める。

ちよつと待て、何故そんなに簡単に降りる事が出来るんだ。そもそもヘディガーが停止してくれない。何とかヘディガーを走らせない様にゆつくり二人の周りをグルグル回っている。

あかりと忠則は既に地面に座りくつろいでいる、俺も休みたいが降ろさせてくれない。ってか、笑ってないで助けてくれ……。

「さあ早く飯食おうぜ、黒野は何やってるんだ？」

呪ってやる、今日の夜お前は確実に悪夢だ。俺はヘディガーから上手く降りられず尻から落ちて強打した尻を抑えながらそう思った。

目的地に着いた時は予定より数時間程度遅れていた。俺がその原因なのは言うまでも無い。

目的地の場所は怪しげな森の近く、手前にある草の生い茂る林だ。雑木林の様なこの地帯は深い森と違い、太陽の光がしっかりと通って、小動物や綺麗な花が咲いている場所が所々に見える。

森の中に進むと狼の様な魔物やヘディガーですら太刀打ちできない生き物が生息しているので入ってはいけない。

森の中にある薬草や、討伐対象の生態はランクが高く報酬も高い。だがその危険性により依頼を受ける人達は多くない。

俺達は迂闊に森に入らない様にある程度の距離を取る為に、雑木林手前にヘディガーを待機させる。俺は待機に数十分の格闘をしていた。その為あかりと忠則を先に採集に向かわせていた。

「黒野、遅いぞ！」

俺が何箇所かの打撲と、腹部に何度も突進される事によって内臓が滅茶苦茶にされている間に採集は終わっていたようだ。ギルドで

現物を見せて貰っていたので簡単に見つける事が出来たようだ。

今回の採集物は薬草と香辛料だ。薬草と言ってもゲームの様に食べた瞬間にライフやHPなどのステータスが回復する事は無い。地球の様に計算が可能ではないので憶測の値になるので明確な答えは無いが、この世界の植物は地球と同じか又はそれ以上の種類が存在している可能性がある。

その為、この世界の薬草と香辛料は区別されている。薬草とは傷口に直接当てたり、すり潰した物を体に塗ったり、そのまま食べたりのする物を指している。

また香辛料はそのままの意味だ。様々な味の元になっている、漢方薬の様な物も香辛料の一部として扱っている。薬草と香辛料の定義は国によっても異なるが大抵この定義で間違えではない。

「なあ黒野、これって本当に香辛料か？　少し食ってみたが全然美味しくないぞ……」

「香辛料を直接食べて美味しいはずが無いだろ、さつき昼飯食ったばかりなのに食い意地張りすぎだ」

「さあ後は討伐ね、名前はタブリブとか言う兎の様な生き物らしいけど、さつきから一度も見ていないわね」

採集依頼を達成した俺達はあかりの言葉と共に討伐依頼を達成するために意識を切り替える。討伐依頼は採集依頼の倍程度の報酬が手に入る。その分依頼の達成難易度は高く難しいとギルドで聞かされた。

俺達は搜索を開始した。まず討伐対象を見つけない事には何も始まらない。どう探せばいいかわからない俺達はまず一人一人別々に行動し、探し回る事にした。

雑木林の中は予想以上に進みにくく、一步一步慎重に進まないといけない。靴は高価な物を買ってあるし、出来るだけ頑丈で歩きやすい物を選んだつもりだが日本の良質な靴に比べるとやはり見劣り

する。

足元と周囲を何度も確認して出来るだけ音を立てない様に歩こうとしても、枯葉や枝を踏んでしまい予想以上に音を出してしまう。音を出すと様々な動物が警戒し逃げてしまう。この依頼は予想以上に難しいかもしれない……。

30分位だろうか、1時間位経過したかもしれない。腕時計や携帯が無いので正確な時間わからない、忠則に聞けば忠則の体内時計がある程度正確な時間を示してくれるが今は忠則は何処に居るのかも分からない、一応1時間くらいたったら採集ポイントに集合だった筈なので来た道を戻る事にした。

「見つからねえ……」

「ねえ見てこの子可愛くないかしら？ リスの仲間だと思うの。丸々して、ちっちゃくて良いでしょ？ 何食べるのかしら」

忠則は意気込みが強かった分全く見つける事が出来なかった事に落胆している様だ、それに反するようにあかりは何故が野生の小動物を既に手懐けており肩に乗せていた。

どうやって懐かせたのか聞くと、共鳴歌を歌っていたらやってきたそうだった。

……あかりの共鳴歌は使えるんじゃないか？

俺は一度二人に話を聞いてもらう為になんか無駄に考えようとして唸っている忠則を殴りあかりの目の前で大きく手をたたいた。

「痛いぜ、黒野、俺が真剣に考えてるって言うのによお」

「そうよ、びっくりしてリスっぽいあの子が逃げちゃったじゃない」

「忠則、お前が一人で考えた方法なんて98%失敗する自信が俺にはある。それにあかりはもう少し依頼について頑張ってくれ、お願いだ」

俺は何とか二人の意識を俺に向けさせて考えた作戦を説明する。

作戦は簡単だ、あかりが一人で共鳴歌を歌い、歌に釣られた依頼対象を隠れていた俺と忠則が捕獲して討伐するだけの単純明快な作戦だ。

俺と忠則はあかりから数十メートル離れて待機する、忠則の方を見ると何故か沢山の枯葉と枯れ枝を集めて雑木林と一体化しようとしていた。隠れるってそこまでしなくても良いだろうと突っ込みを入れたかったが距離が離れていたので諦める。

俺と忠則が隠れて、世界の音が風に揺れる草木の音と小鳥や何処からか聞こえる動物の鳴き声だけになった時あかりは共鳴歌を始めた。

「――」

あかりの共鳴歌は既に何度も聞いているが、とても心地が良い。歌詞の内容や、意味は分からないのに心が癒され眠くなってくる。

あかりの近くには既に先程の小動物や小鳥があかりの近くに寄り添っている。

10分程度経っても目標の獲物はやってこない、忠則の方を見ると目を閉じかけている。寝るつもりか？目を覚まさせたいがこの距離では無理だ……。

少しの間、忠則の方に注意を払っていると忠則の目が大きく開き動き出した。俺は驚いて直ぐにあかりの方へ視線を移す。

その先には討伐対象のタブリブがあかりの足元で丸まっていた。

あかりは歌う事に真剣でまだ気が付いていないし、気がついても捕獲できるか分からないだろう、長時間の共鳴歌は心の負担が大きい。歌いきった後のあかりは放心状態が数分続くのだ、その状態のあかりは何を言っても反応が薄い人形のようになるのだ。

俺と忠則は慎重に近づく、忠則は図体がデカイクセに動きは俊敏で静かだった。俺より速く静かに移動する忠則は遅いはずなのに残

像が見える様な錯覚を覚える。

あかりが忠則と俺に気が付いた。力が抜けた様に歌を終えた。限界だったのだろう、静かにその場で座り動かなくなった。

まだ動物達は俺達には気が付いていない、何匹かはあかりの共鳴歌で寝ている動物もいる。

忠則は既に後10歩程度の距離まで近づいていた。俺は既に忠則に捕獲を任せていた。俺が無理に動くと動物達に見つかってしまうだろう。

その時、忠則が小鳥の一匹に見つかり飛び立った。忠則はその瞬間、あかりに衝突する勢いで飛び込んだ。

あかりの近くに居た動物達が一斉に逃げだした、忠則はあと一歩のところでタブリブを逃がした。だが、その対象は俺に向かって飛び出してきた。

「黒野そつちに行った！」

忠則が叫ぶ。そんな事は分かっている。確実に捕獲してやる！

俺は直ぐに捕獲する為に準備しておいた大きな網を手にする、つてか忠則はなぜ素手で捕まえようとしたのだろうか……。

俺はタイミングを見計らい網を投げる、俺に気付き驚いたタブリブは急いで方向転換しようとしたが遅かった。俺は既に網を放っており、逃げ切る事は出来なかった。

「っしやあ！ 捕獲成功！」

俺は自分でも驚くほどの声をあげて両腕を天高く上げる。ヘディガー以外に、もう突撃されたくはない俺は、興奮した忠則が俺に飛び込んで抱きつこうとするのを上手く避ける。

網から抜け出せないタブリブが必死に動き回っている。その時俺はふと楽観視していた問題が頭をよぎった。

あかりがフラフラとこちらに寄ってくる、まだ心は癒えていないようだ。この感じだと今日はもう共鳴歌を歌うのは止めた方が良さだろう。

忠則は網に引っ掛かったタブリブを掴んで逃げ出さない様に袋に突っ込む。

「なあ今回の依頼って、討伐だよな……」

「そうだぜ！ 依頼達成だぜ！」

いや、まだ達成できていない……、依頼内容は対象の捕獲ではなく討伐だ。

——この捕獲したタブリブをこの手で殺さないといけない。タブリブの大きさは猫と同じくらいの大きさだ。耳が少し長く脚は短い、色は少し黒ずんだ茶色。目が赤くそこには涙が溜まっている様に見える。

小さくキュウキュとウと泣くこの命を俺達が終わらせる。

そして皮を剥いで肉と分ける、討伐後依頼主に渡すのは皮だけだ、タブリブの肉は食用になる。その日に飲食店にもって行きお金を払えば美味しいソテーや煮込み料理などにして貰えるのだ。

忠則はタブリブを捕獲したことに満足しており、その事に気が付いていないようだ。まだ興奮が収まっていないし、あかりもまだ何も考えられないようだ。視点が定まっていない。

……討伐依頼を受けたのは俺だったな。

「忠則、そのタブリブ俺に貸してくれ」

「お？ 黒野も捕獲した優越感に浸りたいのか、逃がすなよ！」

捕まえたのは俺だ、と突っ込む余裕は無かった。皮を剥ぐ方法は聞いてはいなかったが、ギルドで指南書を借りていた。指南書を読んでみると眩暈がした。そこには俺の想像をはるかに超えた世界だ

った。

吐き出しそうになるが唾を飲み込み必死に耐える。これから此処に記されている行為を俺自身が行わないといけない。

「川辺に行こう、この近くにあつたよな？」

「……黒野どうした？ 顔色が悪いぞ」

「ああ、大丈夫だ」

3人で雑木林から出て流れの緩やかな川辺に向かう。忠則は俺の方を何度も見ては心配する様な不思議そうな顔をしていた。

あかりはまだ心が癒えていない、俺らが歌を聞いていた時間は予想以上に長かったのかも知れなかった。俺と忠則の言葉を理解してただ黙々と俺についてきているだけだった。

川辺に到着し、タブリブを掴む。忠則が何かを察したようだ。

「おい、黒野……」

「ごめん……静かにしてくれ」

俺は静かに皮と肉を剥ぐ作業を開始した。

—— 何かが泣いている。

—— 何かが叫んでいる。

—— 何かが呼んでいる。

意識が曖昧だった。夢の中に居る様な、現実なのか分からない感覚で朦朧としている、手は動いているし何かの作業をしている事は分かった。視界が赤い、とても赤く染まっている。生暖かい感触が手から離れない。何かを触っている。液体が身体に掛かる。

意識があるのか、無意識なのか分からない丁度その間の様な感覚の中、俺は今行っていた作業が終わった事を理解した。

やりきった達成感と終わった解放感と、胸から込み上げてくる嫌悪感の中、俺は意識を失った。

「黒野！ 起きろ！」

頬にありえない衝撃を受けて首が90度曲がる。目が覚めた瞬間、永遠の眠りに着くかもしれない恐怖で飛び起きた。

俺が忠則に文句を言おうとした時、あかりが俺に飛びついてきた。女性に飛びつかれた経験の少ない俺は、あの女性特有の二つの膨らみが当たる感覚に赤面しながら慌てる。

赤面している事を誤魔化そうと何かを言おうとした時、二人の顔がとても心配していた事に気が付いた。

俺は意識が無くなる前の事を思い出す、音や匂い感触がまだ脳裏に焼き付いていた。込み上げる気持ち悪さが俺を襲う。

それを見た既に心が回復したあかりが心配そうに声を掛ける。

「大丈夫？ もう少し休んだ方が良い？」

「大丈夫、あまり休んでる時間は無いよ、日が沈む前に帰らないと」

俺はあかりの肩に手を置いて安心させる。いきなり国の外で夜を明かすのは危険すぎる。まだ日が沈んで無いので、今から帰れば間に合うだろう。

討伐は一匹しか出来なかったが時間と精神的に無理だった。忠則とあかりが心配しているが、出来るだけ気丈に振る舞い、帰る事だけを考える。

「初めての討伐依頼なのにしっかり出来ましたね」

受付の人に声を掛けられた。話を聞くといきなり討伐依頼を行う人の半数以上は、生きたままギルドに持ってきたり、皮を剥ぐ事が出来ずに逃がしてしまう人が多いそうだ。

特にここ数日は依頼失敗者が続出していたそうだ、俺たちみたいな召喚された人達が捕獲に失敗したり、皮を剥ぐ事が出来なかったりしたのでろう。

この世界はゲームの様に倒したら勝手に肉や皮だけにならないのだ。この世界をゲームの様に甘く考えてはいけない。

この世界を回って冒険を続けるには、この程度の依頼を何度も行い、狩った動物を自分で調理し、食べなければ生きていけない。この程度で気持ちを落としてはいけないんだ。

俺達はギルドを出て飲食店に向かう。3人ともお通夜の様な暗い雰囲気だったが、やらないといけない事がある。

「店主、この肉を調理してください」

俺が血抜きをし、手に入れた肉とお金を店主に渡す、店主は快く受け取ってくれた。

席に着き、誰も会話しない状態が続き数十分後、他のメニューと一緒に肉が運ばれてきた。俺はそれを3人分に分ける。

「……さあ食べよう、頂きます」

俺は静かに美味しそうに焼かれた肉を口に含む。正直食欲は無かったが、無理やり食べる、俺はこの肉を食べなければいけないから……。

俺はタブリブの肉を食べながら泣いた、あかりも静かに泣きながら食事をしていた。忠則も静かに肉を食べている。

皆、食べきった後、御馳走様と静かに長い間頭を下げていた。俺は食事に対する意識が変わる事になった今日、様々な生き物に感謝

した。

「明日も討伐依頼を受けよう」

此処で諦めたら冒険はできない、俺は何度目か分からない新たな決意をし、二人に告げる、あかりも忠則も静かに頷く。

こうして初めての国を出たギルドの依頼を受けた一日は終わった。

18話 食事

討伐の依頼をまた一つ受けた。その足取りは重かった。昨日の討伐依頼が想像を遙かに越えた物だったのだから仕方が無い。

ただどこを乗り越えなくては、この世界を冒険なんて言う大きな事は出来ない。

ヘディガーを扱いなれていない俺は、二人に左右に並ぶよう見張ってもらっていないながら目的地まで進む。

あかりと忠則も会話をしているが、つい先日の様な明るい笑顔には戻ってはいない。

特にあかりは朝ごはんを食べる事が出来ず、体調も良くないようだ。だがどんなに体調が悪くても今回、皮を剥ぐ事を行うのはあかりだ。

俺と忠則が言った訳じゃないく、あかり自身が俺達に申し出たのだ。何度か辛そうにしているあかりを、俺と忠則が皮剥ぎを交代しようかと申し出たが、拒否し続けた。

目的地には昨日より速く着く事が出来たし、俺もヘディガーの扱いに慣れつつあった。まあ打撲と内臓へのダメージはあまり減っていないが……。

あかりは自分の頬を叩き気合を入れて俺と忠則に声をかける。

「じゃあ歌うわ、今回もしっかり捕まえてね」

俺と忠則にしっかりと告げる。覚悟を決めたのか、しっかりとした声で生気が感じられた。

あかりは共鳴歌を歌う、昨日とはまた別の曲の様だ。昨日と同様、歌詞の意味は分からなかったが、心が落ち着く。今回の共鳴歌の効果は安らぎを与える力が大きいようだ。前回よりも小動物達が広範囲に渡って、気持ち良さそうに眠っていた。

眠っている動物達が多いので、警戒心が少なくても良いが、前回の様にあかりの周りに集まっていけないので周囲を見渡さないといけなかった。

「見つけた……」

俺は息を吐く様に呟く、タブリブは2匹同時に現れた。俺は忠則の方を見てアイコンタクトを取る。

2匹のタブリブは微妙な距離を置いてあかりの近くで寝転がっていた。

見る限り一人では2匹と一緒に捕まえる事は出来ない位置に居た。片方を捕まえたらもう片方は目を覚まし逃げてしまうだろう。

忠則も2匹のタブリブに気が付いていたようだ。タイミングを見計らい、同時に捕獲しようとか意思疎通に成功し、行動を開始する。

この枯葉や枯れ木が無造作に落ちている雑木林で、音を立てずに歩くのは至難の技だが、あかりが歌っている間なら、大きな枝を折る様なミスをしなければ気付かれる事は無いだろう。

一度あかりの方を見ると視線が合った。まだ意識はしっかりしていて、俺達の状況も把握できている様だ。頑張つてとウインクをして、余裕がある事をアピールしてきた。

昨日より俺の負傷が少しだけ減った事や、タブリブを発見するのが早かったからまだ数分の余裕はあるのだろうか。

あかりから視線を放すと忠則がタブリブまで一気に接近していた。飛び込んで網を投げればもう捕獲できる距離まで来ている。

俺は急ぎながらも慎重に足元とタブリブを交互に見て、距離を測りながら進む。忠則より少し遅れたがタブリブを捕獲できる一に着く事が出来た。

忠則と視線を合わせ同時に頷く。その時、俺達を見ていたのかあかりが歌うのを止めた。歌が止まった事に気が付いたタブリブは目

が覚める。状況を把握できていないタブリブに忠則と二人で同時に網を放った。

逃げ切れる事無く捕まったタブリブは未だに抜け出そうと暴れている。捕まえた時の達成感はずいぶん昨日と変わらず良かったが、この後の事を考えると素直に喜べなかった。

捕獲に成功したのを確認しにあかりがこちらに向かって走ってくる、顔色は悪くなく目も死んでいなかった、まだ心を消費しきっていないようだ。

「捕まえた？」

「ああしかも二匹だぜ！ 昨日より良い報酬が手に入りそうだ」

忠則は捕まえたタブリブをあかりに見せる。いつもの様に明るくあかりに振る舞う忠則だが、いつもより元気があまりない様に見える。

忠則もこれからの事を考えてしまうのだろう、俺は昨日の事を思い出すと手が震えだしてしまう、出来ればもう二度とあの様な体験はしたくなかった。

忠則が獲物を持ったまま少しの無言が続く。風と小鳥の囀りだけが聞こえてくる状況が、少しの間続いた。俺が何か言おうかと考えていると、最初に口を開いたのは意外にもあかりだった。

「さて川辺に行きましょう、こんな所で時間を潰すより宿で本を読んでいたいわ」

驚いて何も言えない俺と忠則はそのままあかりの後ろをついて行く。そのあかりの後ろ姿は決意をしたのか堂々と雑木林の中を突き進んでいく。

川辺までの距離は歩いて10分程度の場所にある。その間に忠則はあかりの決意を見て自分が情けなくなっていたのか、悔しそうな

顔をしてブツブツと何かを呟いていた。

一人で何かを呟いている姿は気味が悪い、それが忠則となると尚更だ。この大きな図体で顔を歪ませて下を向いている。それだけで迫力のある姿なのに、聞き取れない声で延々と何かを呟き続ける姿はホラーでしか無い。

結局俺は一人で先に進んでいくあかりと気持ちの悪い忠則に何も言えず、居心地の悪い10分間を体験する事になった。

もうすぐ川辺に着くか言う時に、いきなり大声を出す忠則。木に止まっていた小鳥達が数羽飛び立った。

俺とあかりはもう慣れていたが、忠則を知らない奴の9割以上はこいつを不審者だと認識するだろう。ここに俺達以外の人間がいないで良かった。

大声を出した忠則はその勢いのまま、あかりが持っているタブリブを一匹奪い取った。

「俺もやる、2匹いるだろ？ 丁度いいじゃねえか」

威勢の良い声で話す忠則の手は震えていた。それに対して俺は何も言えない、昨日の俺も似た様な感じだったのだろう。

二人は既に準備を始めていた、俺は何も言えなかった。言える事は無かった。これは自分自身との戦いだ。自らの意思で「生き物を殺す」と言う行為を行わないといけない。

あかりがタブリブに手をかける、大きな鳴き声と共に視界が赤く染まっていく。

あかりは目を背けず、齒を食いしばり必死に手を休めなかった。目には涙が溜まり赤くなっていた。タブリブの鳴き声は直ぐに止み静かになる。あかりの頬に涙が伝う。

忠則もあかりに続きタブリブの息の根を止める。震えている手を必死に動かしていた。タブリブが動かなくなった時、忠則は手を放してしまった。死を自らの手の中でしっかりと感じて恐怖したのだ

ろっ。

二人は昨日俺を見て、皮の剥ぎ方や血抜きの方法を事前に勉強していたのだろう。その手はゆっくりとだが迷いなく進んでいく。

先に終わったのはあかりだった。その顔は返り血と涙でグチャグチャになっていた。静かに、顔を洗って来るわと俺に一言つぶやき川の上流へ歩いて行った。

忠則が終わったのはあかりが戻ってきたところだった。無言で俺にタブリブの皮と肉を渡すと少し離れた所で吐いていた。あの忠則が食べた物を吐くと言う事は耐えきれられない事だろう。

吐いた後直ぐには戻ってこなかった、俺とあかりに顔を見せない様に木陰で休んでいた。その姿は見た事の無い悲しげな背中だった。俺が何度かヘディガーに突き飛ばされる苦痛を乗り越えて、国に帰還した時には二人の調子は戻って着ていた。少し辛そうな部分も見えたがもう大丈夫だろう。

ギルドで依頼達成報告を行い、報酬を貰う。昨日より討伐対象が増えた分、報酬も多くもらえた。まだ生き物を殺すと言う行為に慣れてはいないが討伐数が増えると言う目に見える成果は俺達の自信になる。

「さあ飯にしようぜ、俺は昼の分もしっかり食わないといけねえかな」

忠則が元気よく俺達に話しかける。タブリブの処理の後に吐いた事を、ネタにできる程には調子が戻っているようだ。忠則が元気だと俺とあかりも自然に笑みがこぼれる。

いつもはただうるさく、面倒くさく、鬱陶しいだけの、忠則の軽快な笑い声や一方的なキャッチボールも気分が沈んでいる時は本当に助けられる。

一人で先に飯屋に突き進む忠則を追いかけてながらあかりと視線を合わせ笑いあう。

「私達に暗い雰囲気は似合わないわね」
「そうだな」

飯屋に着くと昨日の様に肉を渡し調理をして貰えないかと交渉し、承諾してもらう。昨日の様な暗い雰囲気はそこには無かった。乗り越えたとは言えないが、乗り越えるための心構えは出来た気がした。料理が運ばれ、手に入れた肉が机に並ぶ。笑みは止み静かになる。決して暗い雰囲気ではなかった。俺達の眼には光が宿っていた。皆真剣になる。

「いただきます」

俺は祈った。生き物を食べると言う行為に謝罪ではない感謝を。今日も食事を出来ると言う感謝を。生きていくと言う実感を食事を一口一口しっかり噛み締める。俺は自然と声が出ていた。

「美味しいな」
「……ああ美味え」
「そうね美味しいわ」

少しずつ会話が続いて行く、昨日の様な暗い雰囲気はそこには無かった。まだ空元気でしか無いが、俺は乗り越えられると確信した。俺達なら大丈夫という根拠は無い確信。

今はそれだけで十分だった。前に進む力はまだ俺達にある。足を止めていけないのだ。

最初の討伐依頼の日から15日が経過した。俺達は動物を討伐に対する考え方を変えた。討伐は自らの食糧を手に入れる為の行為だ。その過程で、余すことなく活用する為に毛皮を剥いでギルドに持っていく。

討伐依頼は毎日行った。昼までにタブリブを捕獲できた時は、自分達で調理して食べた。この数日で、食に対する考え方や、生き物を殺すと言う意味が身にしみて分かった。

まだまだかもしれないが、この世界で生き抜く為に一步一步成長して行っている感覚がしっかりと感じられた。

そして、タブリブや他の動物の討伐に慣れて、この日も依頼を終えた後、飯屋に来ていた……。

「無理だ！ 嫌だ！ 出来るか！」

俺は叫んでいた。周りから見れば子供が親に駄々をこねる様な状態だったかもしれない。

だが嫌な物は嫌なのだ、俺はまだ死にたくない。

「大丈夫だって、俺は黒野はやる男だと思ってるぜ！」
「うるせー！ 何だよその適当な言葉と鬱陶しい笑みは！」

酒場の様な賑わいがある飯屋に来ていた俺達は、特に注目される事は無かったが、それでも大きな声で必死に抵抗している俺の顔を見ている人はいた。

俺が必死に抵抗している内要は『昇格依頼』だった。名前の通り昇格試験の様な依頼だ。

この依頼を成功すれば、俺達のギルドランクは最低ランクのFからCに一気に昇格出来る。

ギルドランクCに昇格出来ればもっと報酬の高い依頼を受ける事も可能になるし、一度に受けられる依頼の数も増やすことが可能だ。

基本的に昇格すると良い事しかない。更に今回俺達が目指している大会は、参加基準がギルドランクC以上と設定されていたはずだ。どう考えても昇格試験は受けないといけない。そう、受けないといけないのだが……。

「忠則良いのか？ ヘディガーと4日、5日も一緒に寝泊りすると言う事は、俺に死ねって言うているのと同義だぞ！」

昇格試験の内容自体は「薬草の採集」と言うそこまで難しくはない。だが、問題はその薬草の場所だった。

採集場所はリーディアから遠く離れた山岳地帯。ヘディガーを乗りこなせたとしても片道2日は掛かってしまうのだ。

そう、この依頼は数日の間国の外で寝泊りをしないとイケないのだ。それもヘディガーと一緒に……。

「大丈夫だって、黒野も結構丈夫になってきたじゃねえか、今日だってヘディガーに5メートルくらい突き飛ばされても直ぐに起き上がったじゃねえか」

「それは大丈夫じゃないんだよ、突き飛ばされた後、更に追撃しようとしてきたヘディガーから逃げる為に必死だったんだ。誰だって逃げるわ！」

「だけだよー、あんまり時間無いんだぜ？ そろそろまずいんじゃないか？」

「うう……ただどなあ……」

忠則の言葉に俺は否定が出来なかった。俺達はもう初めての討伐依頼達成の日から既に10日以上経過しているのだ。日数的にもそろそろ昇格依頼を受けないといけない時期だろう。

だが、それでも俺は死にたくない……、忠則とあかりには分からないだろうが、あの内臓がぐちゃぐちゃになる様な感覚と骨が折れ

る様な衝撃の痛みは何度体験しても慣れないし辛い。半日で死にそうになるのに5日間とか耐えられる気がしない。1日で死ぬ自信がある。

「諦めなさい、黒野。正直このままどれだけ時間をかけたってヘデイガーは大人しくしてくれないわ」

あかりが俺にトドメを刺してくる。あかりの言っている事は的を射ている、その通りだ。

正直、このまま此処で一カ月、一年とギルドの依頼を受け続けていてもヘデイガーは俺に対して過剰なスキンシップを止める事は無いだろう……。

どう考えたって前に進む為には昇格依頼を受けないといけない……。

……。

「わかった………。だけど俺を全力で助けてくれよ。特にあかり、共鳴歌が歌えなくなったら俺は死ぬからな！」

「そんな残念発言を自信満々に言わないでよ……。」

結局、あれだけ拒否していたが次の日に依頼を受ける事になってしまった。俺はその日の夜、これから起こるであろう恐怖に怯え、悪夢にうなされながら明日を迎える事になったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2503t/>

In The Fantasynovel

2011年10月9日00時56分発行